四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

空港跡地遺跡

（Ｊ　地　区）

１９９７．３

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建　設　省　中　国　地　方　建　設　局

空港跡地遺跡（Ｊ地区）正誤表

	誤	正
42頁14行	… 137はＳＰ222出土遺物である。	… 137はＳＰ229出土遺物である。
遺物観察表 50頁 遺物番号 24	土師質　椀	土師器　椀
遺物観察表 50頁 遺物番号 25	土師質　椀	土師器　椀

四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

空港跡地遺跡

（Ｊ　地　区）

１９９７．３

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建　設　省　中　国　地　方　建　設　局

序　　文

平成元年12月の新高松空港の開港に伴って高松市林町の空港跡地は，研究情報機能および高度文化機能を有する技術・情報・文化の複合拠点，香川インテリジェントパークとして生まれ変わることになりました。

香川県教育委員会では，高松空港跡地の整備事業に伴い，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，平成２年度から平成６年度までに県立図書館・文書館，四国工業技術研究所などの建設用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。

このたび『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡（Ｊ地区）』として刊行いたしますのは，平成７年度に建設省中国地区建設局により委託されました，四国工業技術研究所の施設増築地における埋蔵文化財発掘調査についてであります。同地の調査では，古代末から近世にかけての遺構・遺物が出土しております。なかでも古代末から中世の集落遺構は，高松平野に見られる条里制地割と同一の主軸方位を持ち，中世になると集落には，溝を掘りめぐらす集落形態に変わるという新しい知見を得ることができました。

本報告書が，本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでのあいだ，香川県土地開発公社及び関係機関，並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようにお願い申し上げます。

平成９年３月

香川県教育委員会
教育長　　田中　壮一郎

例　　言

1．本報告書は四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書で，香川県高松市林町新町2217-14番地外に所在する空港跡地遺跡（J地区）（くうこうあとちいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が建設省中国地方建設局からの依頼を受け，香川県教育委員会が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，調査対象面積（2,780 m^2）を平成7年12月1日から平成8年3月31日まで実施した。
発掘調査の担当は以下のとおりである。
調査　　片桐孝浩・谷畑雅稔・高橋佳緒里

4．調査にあたっては，次の機関や方々の協力を得た。記して謝辞を表したい。
（順不同，敬称略）
建設省中国地方建設局，四国工業技術研究所，香川県商工労働部産業立地課

5．報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の編集・執筆は片桐孝浩が担当した。

6．本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。
(1)　挿図の縮尺は，掲載の図面内にスケールで示した。
(2)　方位は，国土座標第Ⅳ座標系の北を示す。
(3)　標高は，T.P.を基準としている。

7．本書に用いている遺構記号は次のとおりとし，遺構番号の表記は平成8年12月刊行の『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 空港跡地遺跡 Ⅰ』に準じる形で，下段（例）のとおりとした。

SB…掘立柱建物	SD…溝	SK…土坑	SP…柱穴	SE…井戸
例SBj01～	SDj01～	SKj01～	SPj001～	SEj01～

8．挿図の一部は，建設省国土地理院地形図　丸亀，玉野，高松及び高松南部（1/50,000）を使用した。

9．出土竹製品については㈶元興寺文化財研究所に委託し，保存処理を実施した。

目　　次

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査の経過……1
１．調査計画……1
２．調査区及び検出遺構の呼称方法……2
３．調査方法……2
４．調査体制……2
５．整理方法……5
６．整理体制……5

第２章　立地と環境
第１節　地理的環境……6
第２節　歴史的環境……6

第３章　調査の成果
第１節　土層序について……12
第２節　調査区の概要……12
第３節　遺構・遺物について……12
１．掘立柱建物跡……15
２．井戸跡……22
３．土　坑……27
４．溝状遺構……36
５．柱穴出土遺物……40
６．包含層出土遺物……42
第４節　まとめ……43

挿 図 目 次

第１図　整理報告地区割図…… 3～4
第２図　調査区割・位置図…… 3～4
第３図　遺跡位置図…… 6
第４図　旧石器時代，縄文時代(～中期)
　　遺跡位置図…… 8
第５図　縄文時代後期・晩期遺跡位置図…… 8
第６図　弥生時代前期・中期遺跡位置図…… 9
第７図　弥生時代後期遺跡位置図…… 9
第８図　古墳時代前期・中期遺跡位置図…… 10
第９図　古墳時代後期遺跡位置図…… 10
第10図　古代，中世遺跡位置図…… 11
第11図　空港跡地遺跡　Ｊ地区遺構全体図… 13～14
第12図　SBj01平・断面図…… 15
第13図　SBj02平・断面図…… 15
第14図　SBj03出土遺物実測図…… 16
第15図　SBj03平・断面図…… 16
第16図　SBj04平・断面図，出土遺物実測図… 16
第17図　SBj05平・断面図…… 17
第18図　SBj06出土遺物実測図…… 17
第19図　SBj07出土遺物実測図…… 17
第20図　SBj06平・断面図…… 18
第21図　SBj07平・断面図…… 18
第22図　SBj08平・断面図…… 19
第23図　SBj09平・断面図…… 20
第24図　SBj08出土遺物実測図…… 21
第25図　SBj09出土遺物実測図…… 21
第26図　SBj10平・断面図…… 22
第27図　SEj01平・断面図…… 23
第28図　SEj01出土遺物実測図①…… 25
第29図　SEj01出土遺物実測図②…… 26
第30図　SKj01平・断面図…… 28
第31図　SKj02平・断面図…… 28
第32図　SKj03平・断面図…… 28
第33図　SKj04・05平・断面図…… 28
第34図　SKj06平・断面図…… 29
第35図　SKj06出土遺物実測図…… 29
第36図　SKj07平・断面図…… 29
第37図　SKj08平面図…… 29
第38図　SKj08出土遺物実測図…… 29
第39図　SKj09平・断面図…… 30
第40図　SKj09出土遺物実測図…… 30
第41図　SKj10出土遺物実測図…… 30
第42図　SKj10平・断面図…… 31
第43図　SKj11平・断面図…… 31
第44図　SKj12平・断面図…… 32
第45図　SKj12出土遺物実測図…… 32
第46図　SKj13平・断面図…… 32
第47図　SKj13出土遺物実測図…… 32
第48図　SKj14平・断面図…… 33
第49図　SKj14出土遺物実測図…… 33
第50図　SKj15平・断面図…… 33
第51図　SKj15出土遺物実測図…… 34
第52図　SKj18出土遺物実測図…… 34
第53図　SKj16平・断面図…… 35
第54図　SKj17平・断面図…… 35
第55図　SKj17出土遺物実測図…… 35
第56図　SKj18平・断面図…… 35
第57図　SKj19平・断面図…… 35
第58図　SKj20平・断面図…… 37
第59図　SKj21平・断面図…… 37
第60図　SKj22平・断面図…… 37
第61図　SKj23平・断面図…… 37
第62図　SDj01土層断面図…… 38
第63図　SDj04土層断面図…… 38
第64図　SDj01出土遺物実測図…… 39
第65図　SDj01・05北壁土層断面図…… 40
第66図　SDj08断面図…… 40
第67図　SDj10土層断面図…… 40
第68図　柱穴出土遺物実測図…… 41
第69図　包含層出土遺物実測図…… 42
第70図　空港跡地遺跡　Ｊ地区遺構変遷図… 45～46

表　目　次

第１表　遺跡一覧表…… 11
第２表　遺構観察表……47～48
第３表　出土遺物観察表 …… 49～54

図　版　目　次

図版１　調査区全景(真上より)
図版２　(1)第Ⅰ調査区遺構検出状況(南より)
　　(2)第Ⅰ調査区遺構検出状況(南南東より)
図版３　(1)第Ⅰ調査区北部遺構検出状況(西より)
　　(2)SBj01検出状況(西より)
図版４　(1)SEj01検出状況(南より)
　　(2)SEj01断面(南より)
図版５　(1)SKj08検出状況(西より)
　　(2)SKj12検出状況(南より)
図版６　(1)SDj01北壁土層(南より)
　　(2)SDj01土層(北より)
図版７　(1)第Ⅱ調査区遺構検出状況(西より)
　　(2)SBj04・05・07・08・09検出状況(西より)
図版８　(1)第Ⅱ調査区東部遺構検出状況(北より)
　　(2)SBj04・05・07・08・09検出状況(南より)
図版９　(1)SBj07・08検出状況(西より)
　　(2)SBj09検出状況(西より)
図版10　(1)SBj08 SPj160断面(北より)
　　(2)SBj09 SPj111断面(北より)
図版11　(1)SKj17土層(南より)
　　(2)SKj21土層(南より)
図版12　(1)SDj04土層(南より)
　　(2)SPj186遺物検出状況(南より)
図版13　SBj07出土遺物①
図版14　SBj07出土遺物②
　　SBj08出土遺物①
　　SBj09出土遺物①
図版15　SBj08出土遺物②
図版16　SBj09出土遺物②
図版17　SEj01井戸掘方内出土遺物①
図版18　SEj01井戸掘方内出土遺物②
図版19　SEj01井戸掘方内出土遺物③
　　SEj01井戸石組み内最下層出土遺物
図版20　SEj01裏込め埋土出土遺物①
図版21　SEj01裏込め埋土出土遺物②
図版22　SEj01裏込め埋土出土遺物③
図版23　SKj06出土遺物
　　SKj08出土遺物
　　SKj09出土遺物
　　SKj12出土遺物
図版24　SKj14出土遺物
図版25　SKj18出土遺物
　　SDj01出土遺物①
図版26　SDj01出土遺物②
図版27　SDj01出土遺物③
図版28　SDj01出土遺物④
図版29　柱穴出土遺物①
図版30　柱穴出土遺物②
図版31　柱穴出土遺物③，包含層出土遺物
図版32　SKj09出土遺物(カラー)
　　SKj14出土遺物(カラー)
　　SDj01出土遺物⑤
図版33　SDj01出土遺物⑥
図版34　SDj01出土遺物⑦

付　図　目　次

付　図　空港跡地遺跡　J地区(Ⅲ－53・54区)遺構平面図

第1章　調 査 の 経 緯

第1節　調査に至る経過

香川県は，旧高松空港跡地を香川インテリジェントパークとして整備を進めている。この整備事業に伴い，香川県教育委員会は平成2年度に跡地約32haについて，対象地の1％に相当する3,200㎡の試掘調査を実施し，跡地内の約26haに弥生時代から近世にかけての集落跡である空港跡地遺跡が広がることを確認した。発掘調査は平成2年度の基盤整備事業関係で実施した現四国工業技術研究所と産業頭脳化センターの間の道路部を皮切りに，遺跡内の開発計画が具体化した箇所から実施している。平成6年度末までに県立図書館・文書館，サンメッセ香川，産業頭脳化センター，民間分譲地及び跡地内道路について発掘調査を行った。平成6年度までの事前調査面積は，試掘調査を除き，遺跡面積の約6割に相当する147,985㎡となっている。

四国工業技術研究所の本体建物及び工事掘削影響箇所については，平成3・4年度に発掘調査を実施しており，中世から近世にかけての方格地割溝と建物跡等を検出している。また，四国工業技術研究所の東側は民間分譲地で，平成3年度から5年度にかけて発掘調査を実施しており，弥生時代から近世にかけての集落跡・墓跡等を検出している。今回，報告する四国工業技術研究所の付帯施設部については，本体工事計画時点において整備計画が具体化しておらず，前回の本体部の発掘調査では対象外になった箇所である。平成6年度末から付帯施設整備計画が具体化し，埋蔵文化財の発掘調査について，四国工業技術研究所と協議を県教育委員会は行った。しかし発掘調査を担当する㈶香川県埋蔵文化財調査センターの年度当初計画策定時点以降の協議であったことから，平成7年度の県教育委員会から㈶香川県埋蔵文化財調査センターの当初委託事業には盛り込むことができなかった。その後，センターの発掘調査事業において，当初計画よりも調査期間が短縮することとなった事業が生じた。そこで四国工業技術研究所関係の発掘調査を実施することで協議が整い，平成7年12月1日付けで，香川県教育委員会と㈶香川県埋蔵文化財調査センターとは「平成7年度埋蔵文化財発掘調査事業」の契約変更を行い，四国工業技術研究所付帯施設建設工事関係の発掘調査について，平成7年12月1日から平成8年3月31日までの期間で，2,000㎡を対象として実施することとなった。なお発掘調査面積については，その後の現地発掘調査の進展に伴い，工事影響地も含めて追加調査が可能である見通しが立ち，最終的には原因者より要請のあった全対象地2,780㎡について発掘調査を実施した。

第2節　調査の経過

1．調査計画

発掘調査は平成7年12月1日から平成8年3月31日までの期間で実施した。当初の計画では調査対象面積が2,000㎡であったが，調査の進展に伴い工事影響範囲も含めた2,780㎡になった。

調査に当たっては調査区を南北2調査区に分けて，便宜的に北部を第Ⅰ調査区（Ⅲ－53区），南部を第Ⅱ調査区（Ⅲ－54区）とした。重機による掘削作業の前に予備調査で遺構面までの土層厚と包含層の有無を確認し，排土置場の確保と機械掘削厚を決め，作業を進めることとした。

調査は第Ⅰ調査区から開始し，１月下旬から第Ⅱ調査区の調査を実施した。周囲の調査で当調査区の遺構密度がある程度予想できたので，調査はスムーズに行われた。

2．調査区及び検出遺構の呼称方法

旧高松空港の跡地にある空港跡地遺跡は空港跡地整備事業に伴い平成２年から平成６年まで発掘調査を実施している。その発掘調査に継続して平成７年度から整理作業を開始し，平成12年度まで整理計画が予定されている。平成７年度の整理作業の成果として，空港跡地遺跡発掘調査報告書の第１冊目が平成８年12月に『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第１冊 空港跡地遺跡Ⅰ』として刊行された。

当報告書に掲載する「空港跡地遺跡（J地区）」は平成７年度に四国工業技術研究所増築に伴い発掘調査したもので，調査区は平成３年度に調査されたⅢ－３・４・６～８区と平成４年度に調査されたⅢ－16～18・38・49区に囲まれたⅢ－53・54区の部分である。そのため平成２年度から平成６年度にかけて調査された空港跡地遺跡と同じ遺跡で，継続する遺構があることが判り，それぞれにおいて遺構の名称を統一する目的から『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第１冊 空港跡地遺跡Ⅰ』で使用した調査区名及び検出遺構の名称に準じることで事業主体の違う報告書間の混乱をなくした。

したがって当遺跡の調査区は，発掘調査時の呼称ではⅢ－53・54区となり，報告書作成時の呼称ではＪ地区となる。

また，検出遺構の名称は，各調査区で完結させるため遺構略称中に地区番号「Ａ」～「Ｊ」の小文字「ａ」～「ｊ」を挿入して報告することから，本書に収録した遺構については略称中に「ｊ」が並記される（例：SBj01）。

3．調査方法

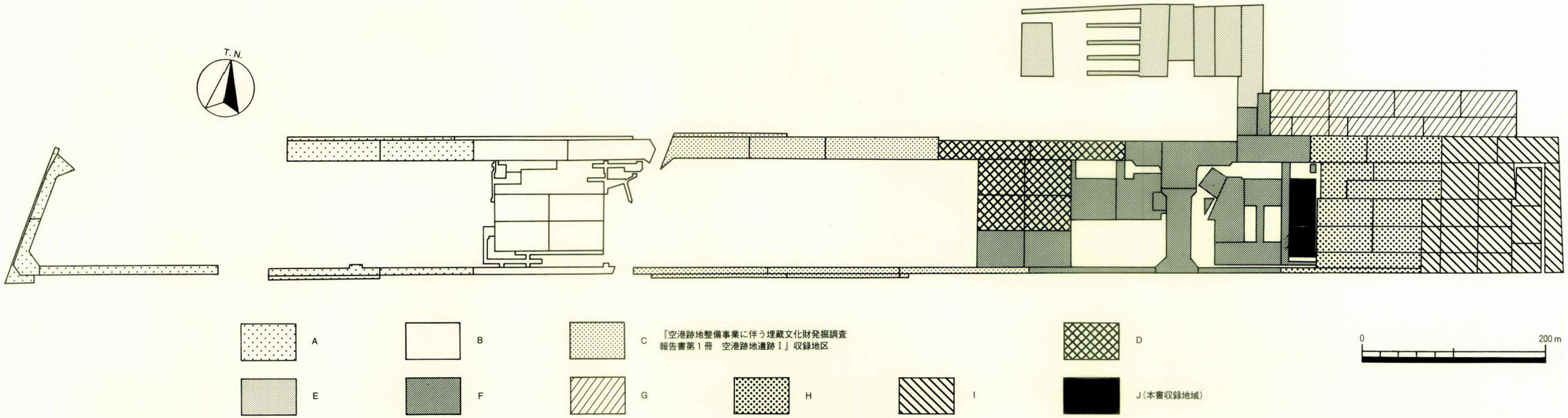
発掘調査については香川県教育委員会が調査主体で，㈶香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として，センターの直営方式により現地調査を実施した。

4．調査体制

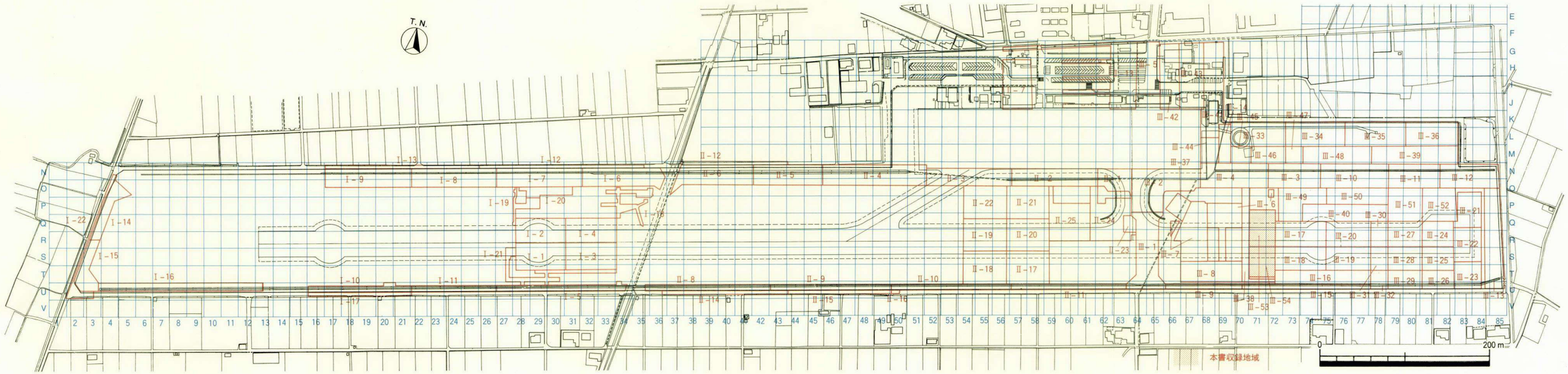
調査組織は，次のとおりである。

平成７年度

文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　調査		
総　括	課　　長	高木　尚	総　括	所　　長	大森　忠彦
		（～10.23）		次　　長	真鍋　隆幸
	課　　長	藤原　章夫	総　務	参事(土木)	別枝　義昭
		（10.24～）		係長(事務)	前田　和也
	課長補佐	高木　一義		主　　査	西村　厚二
埋蔵文化財	副主幹	渡部　明夫	調　査	参　　事	糸目　末夫
	主任技師	森下　英治		係　　長	藤好　史郎
	技　　師	塩崎　誠司		文化財専門員	片桐　孝浩



第１図　整理報告地区割図



第２図　調査区割・位置図

総　務	係　　長	源田　和幸	文化財専門員	谷畑　雅稔
		(～ 5.31)	調査技術員	高橋佳緒里
	係　　長	山崎　　隆		
		(6. 1～)		
	主　　査	星加　宏明		
	主任主事	高倉　秀子		

5．整理方法

整理は平成８年10月１日から12月31日の３ヵ月間で，整理作業員８名で実施した。

まず整理作業は遺物の注記から開始した。注記作業終了後，接合・復元の後，実測遺物の抽出を行い，続いて遺物の実測作業を行った。次に各遺構ごとに実測遺物のレイアウトを行い，遺構図もあわせてトレースし，最後に編集作業を行った。

6．整理体制

整理組織は，次のとおりである。

平成８年度

文化行政課

総　括	課　　長	藤原　章夫
	課長補佐	高木　一義
埋蔵文化財	副主幹	渡部　明夫
総　務	係　　長	山崎　　隆
	主　　査	星加　宏明
	主　　事	打越　和美

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　整理

総　括	所　　長	大森　忠彦
	次　　長	小野　善範
総　務	係長(事務)	前田　和也
	主　　事	佐々木隆司
調　査	主任文化財専門員	廣瀬　常雄
	文化財専門員	片桐　孝浩
	整理補助員	岡崎江伊子
		小畑三千代
		岩井　弘恵
		合田　和子
	整理作業員	岡野　雅子
		前田　好美
		山上　真理
		松尾　優子

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

瀬戸内海沿岸に東西に連なる香川県の平野は，一般に讃岐平野として総称されているが，実際は東から長尾平野，高松平野，丸亀平野，三豊平野といった地域単位の小平野に細分でき，いずれも南部の阿讃山脈に源を発する中小河川によって形成された扇状地である。

このうち高松平野は，北を瀬戸内海，東を立石山山系，南を阿讃山脈，西を五色台山塊に限られた総面積約19㎢，丸亀平野に続く規模を持つ。平野部には屋島，石清尾山山塊を始め台形やお碗を伏せたような山があちらこちらにみられる。

平野の形成は，その多くが塩江町に源を発する香東川によってなされ，春日川以東の部分のみが春日川，新川といった小河川の影響下になるが，扇状地の発達は見られない。現在の香東川は寛永年間，西島八兵衛の治水事業によるもので，本来は石清尾山塊の東を迂回して東側に広く氾濫していたことが知られており，現在の御坊川はその最末期の川筋にあたる。また，往時の旧河道は，自然の凹地の下手を堰止めて形成された溜め池にもその名残をとどめており，南から分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池（消滅）とつながる香東川の旧河道が復原できる。

香川県は瀬戸内海式気候に属し，年間1,000㎜前後と全国屈指の少雨地帯で，農業用水確保のために多くの溜め池が築造され，県別の溜め池保有数では兵庫県，奈良県についでいる。香川用水通水まではこれらの溜め池単位に水掛や水利組合が組織され，きびしい水利慣行を残していた。

近世以降では，微高地上に四周に堤防を巡らせ，その四周の全部または一部が条里の阡陌に沿うような皿池がみられるようになるが，その一方で三谷三郎池，神内池などの，開析谷を堰止めた大規模な溜め池も多く築造される。

空港跡地遺跡は，地形的に扇状地の末端部にあたり，周辺には丘陵裾部を伏流した地下水が自墳井として地上に湧きだす「出水」と呼ばれる泉が散在する。

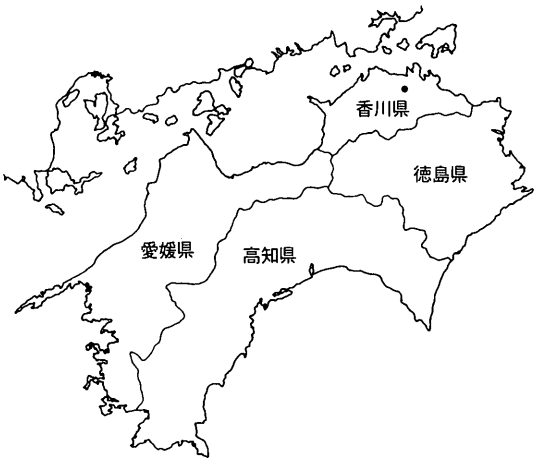
第2節　歴史的環境

高松平野部での周知の遺跡については近年の高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査などの大規模な発掘調査によって面的に遺跡が確認され，徐々にその広がりが判りかけている。

ここでは旧石器時代から中世までを大まかではあるが7時期に分け，各時期ごとの遺構の広がりに視点を置き，その概略を述べたい。

旧石器時代，縄文時代（～中期）

旧石器の遺物は点的ではあるが雨山南遺跡，大池遺跡，東山崎・水田遺跡などで少量出土し，遺構は



第3図　遺跡位置図

高松平野西部に位置する中間・西井坪遺跡でAT火山灰上層から舟底型石器とナイフ型石器を主体としたブロックが確認されている。縄文時代では有舌尖頭器が出土している大池遺跡（草創期），下司遺跡（前期）などが挙げられる。

旧石器，縄文時代（～中期）では遺構は点でしかなく，広がりは認められない。

縄文時代後期・晩期

縄文時代後期になると平野縁辺部で三谷三郎池C遺跡，前田東・中村遺跡，佐料遺跡と徐々に遺跡数を増やし，さらに晩期になると平野部中央で林・坊城遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井出東Ⅰ遺跡，井出東Ⅱ遺跡，居石遺跡，上天神遺跡と遺跡数が増加する。

これら晩期の遺跡は次の弥生時代前期の遺跡と重複するものが多く，弥生時代の集落域が縄文時代晩期には確立していたことが判る。

弥生時代前期・中期

弥生時代では前述した縄文時代晩期の集落を踏襲するものがあり，加えて天満・宮西遺跡，空港跡地遺跡，大池遺跡，松縄下所遺跡などが確認されている。浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡ではこの時期から自然堤防状及び後背湿地に整った小区画の水田が営まれており，早い時期から稲作文化が受け入れられていたことが判る。これは縄文時代後・晩期ころから平野部中央に居住域を移し，初歩的な灌漑技術を持っていたことを裏付けるものである。弥生時代中期では，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井出東Ⅰ遺跡，凹原遺跡，上天神遺跡，空港跡地遺跡があり，前期に比べるとその数はやや減少する。

弥生時代後期

弥生時代後期になると遺跡数は平野部・山間部を問わず増加する。

平野部では太田下・須川遺跡，蛙股遺跡，居石遺跡，井出東Ⅰ遺跡，井出東Ⅱ遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，林・坊城遺跡，六条・上所遺跡，松縄下所遺跡，キモンドー遺跡などが，周辺丘陵部では中間・西井坪遺跡，前田東・中村遺跡，すべり山遺跡，葛谷遺跡，竹元遺跡，久米池南遺跡，久米山遺跡群などがある。

以上の遺跡はほとんどが弥生時代終末で終わり，次の古墳時代に継続して営まれる集落は確認されていない。

古墳時代前期・中期

前期では諏訪神社墳丘墓，鶴尾神社４号墳，猫塚，石舟塚などの積石塚からなる石清尾山古墳群があり，中期になると小日山１・２号墳，三谷石舟古墳，高野丸山古墳がある。

平野部の遺跡はやや減少する傾向にあるが，丘陵部の古墳は確実に増加する。

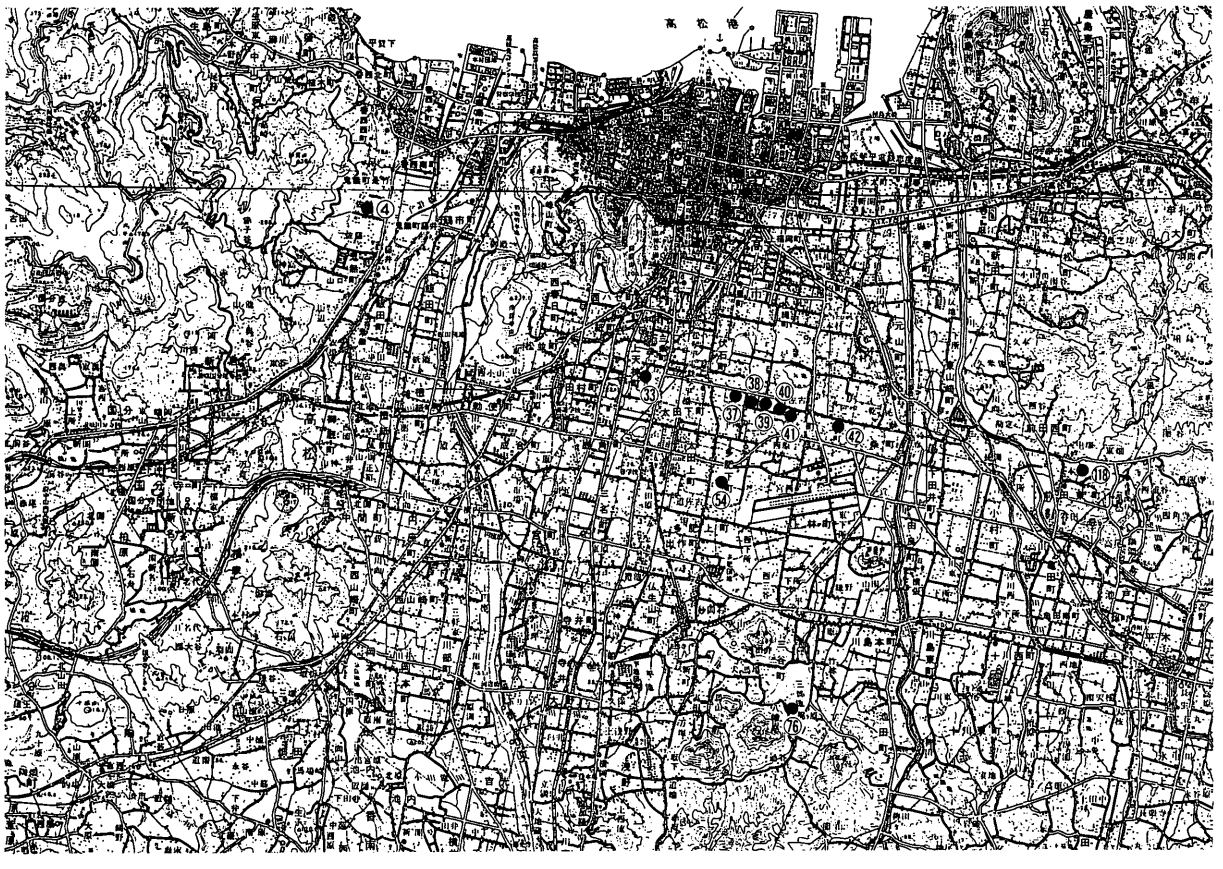
古墳時代後期

後期では平石上２号墳，矢野面古墳，犬の馬場古墳，石舟池古墳群，岡山古墳群，長尾古墳群などに代表されるように高松平野縁辺部の丘陵に爆発的に古墳数は増大する。

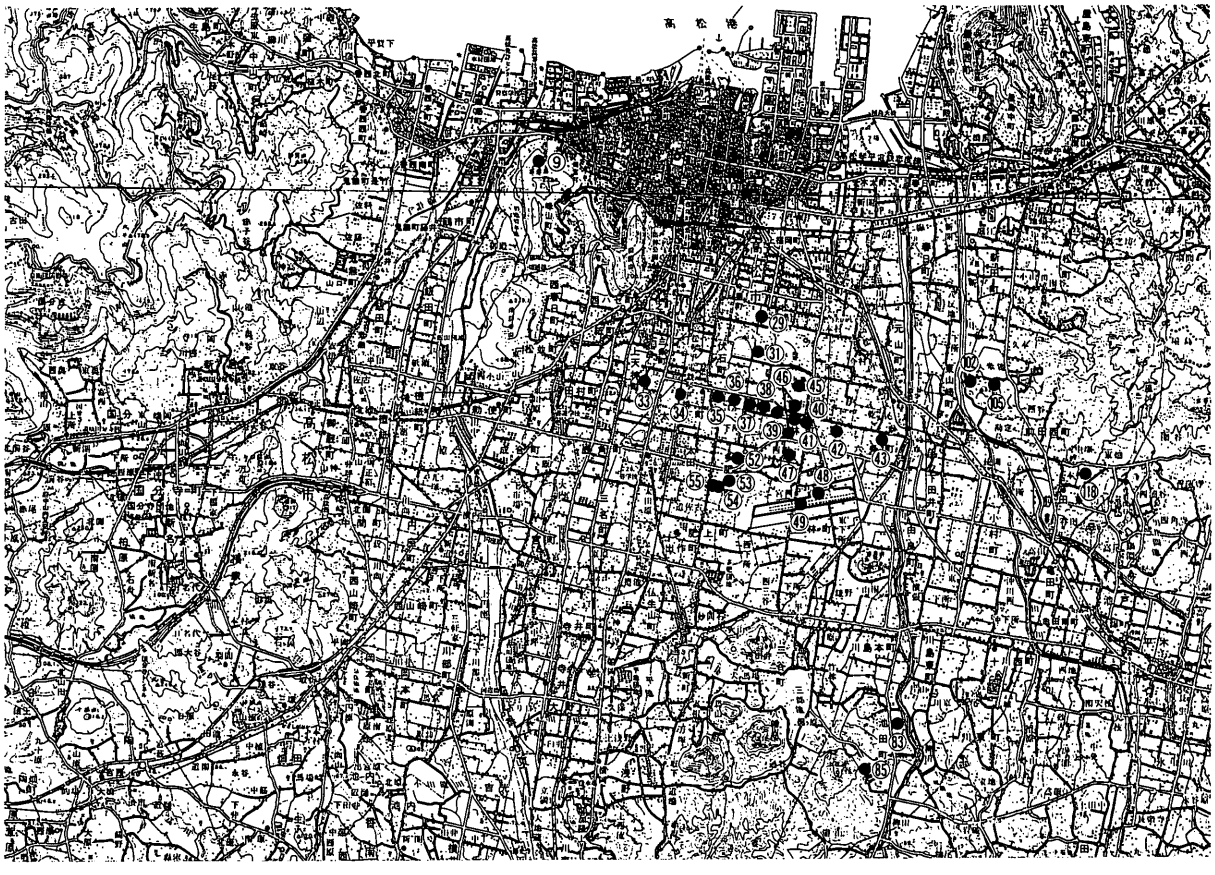
古代、中世

古代では宝寿寺跡，山下廃寺，下司廃寺，坂田廃寺などの古代寺院跡があり，中世では浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡などで中世の小規模な区画の水田跡が確認されており，特に近年弘福寺領讃岐国山田郡田図から古代・中世の条里地割が研究されている。

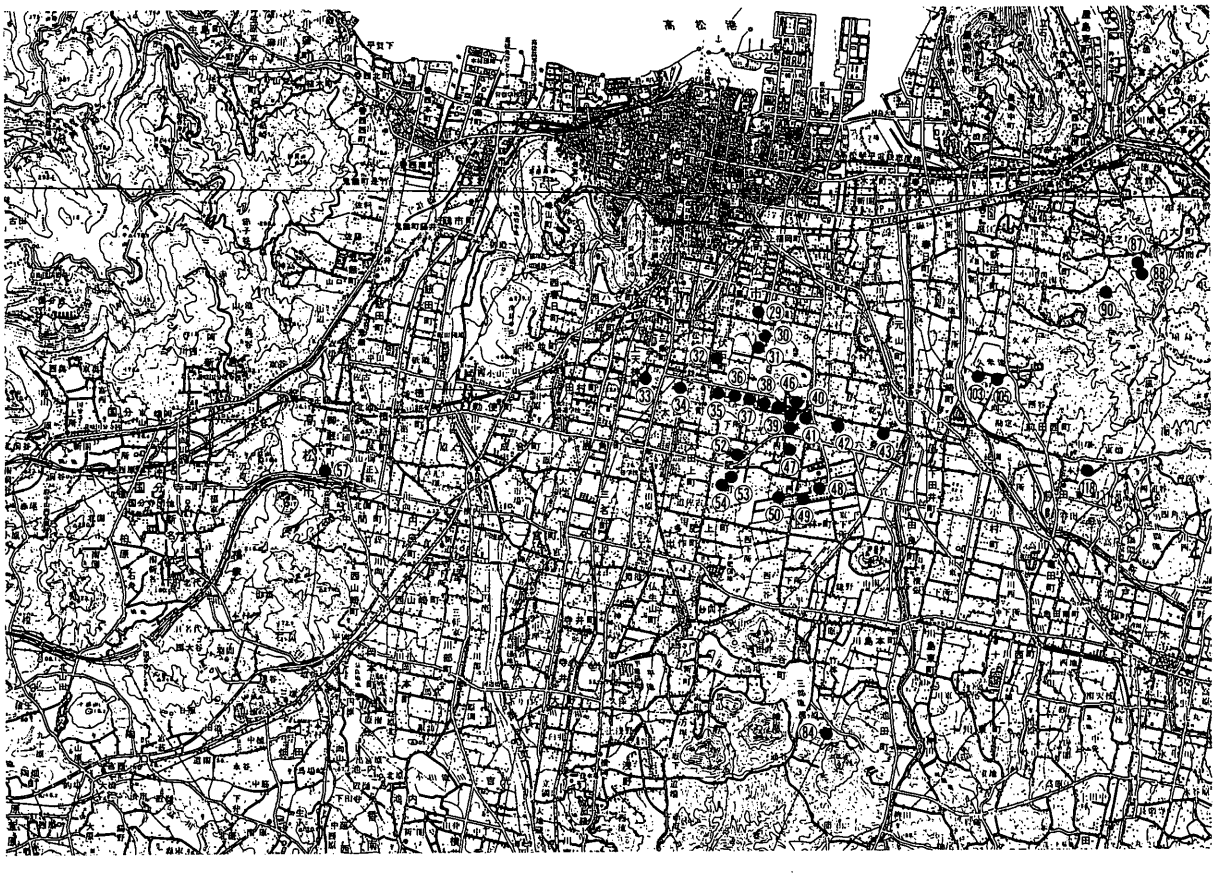
第４図　旧石器時代，縄文時代（～中期）遺跡位置図



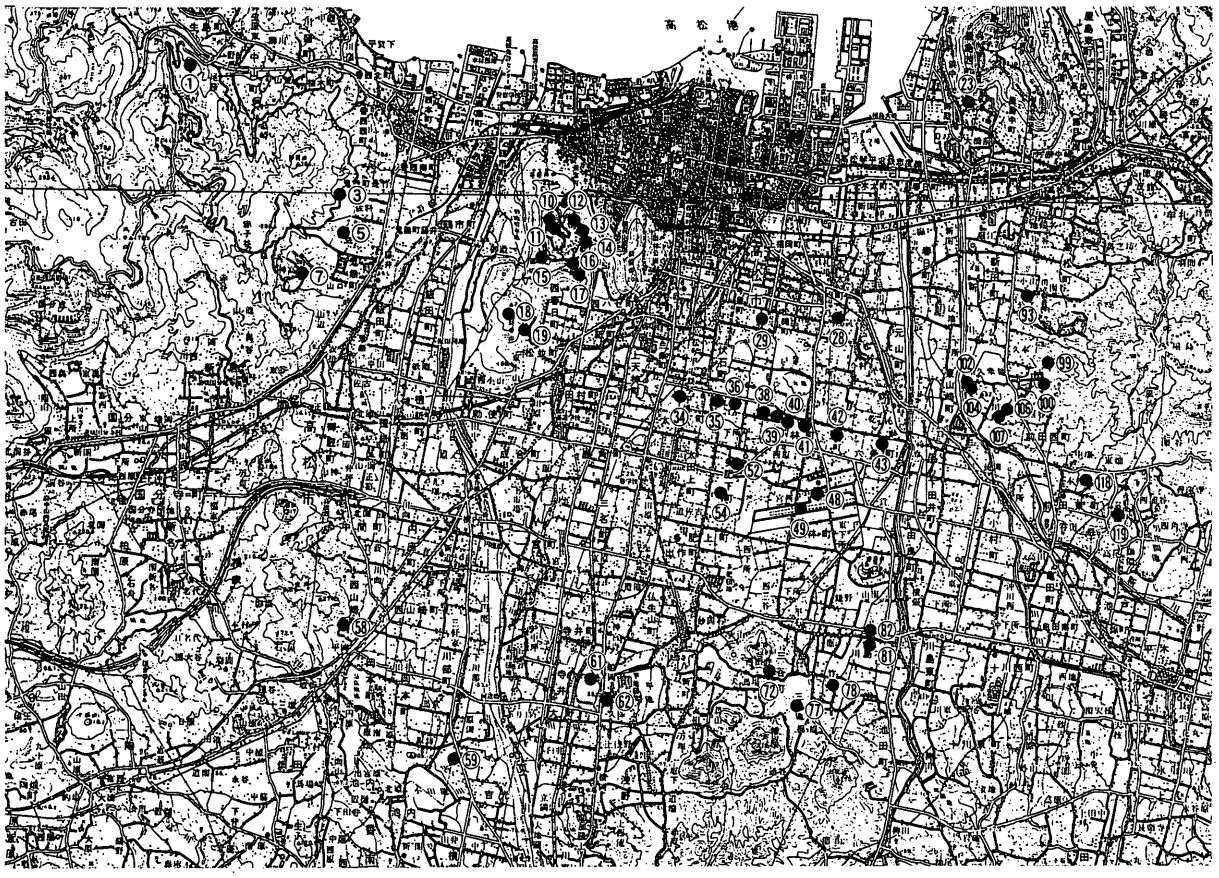
第５図　縄文時代後期・晩期遺跡位置図



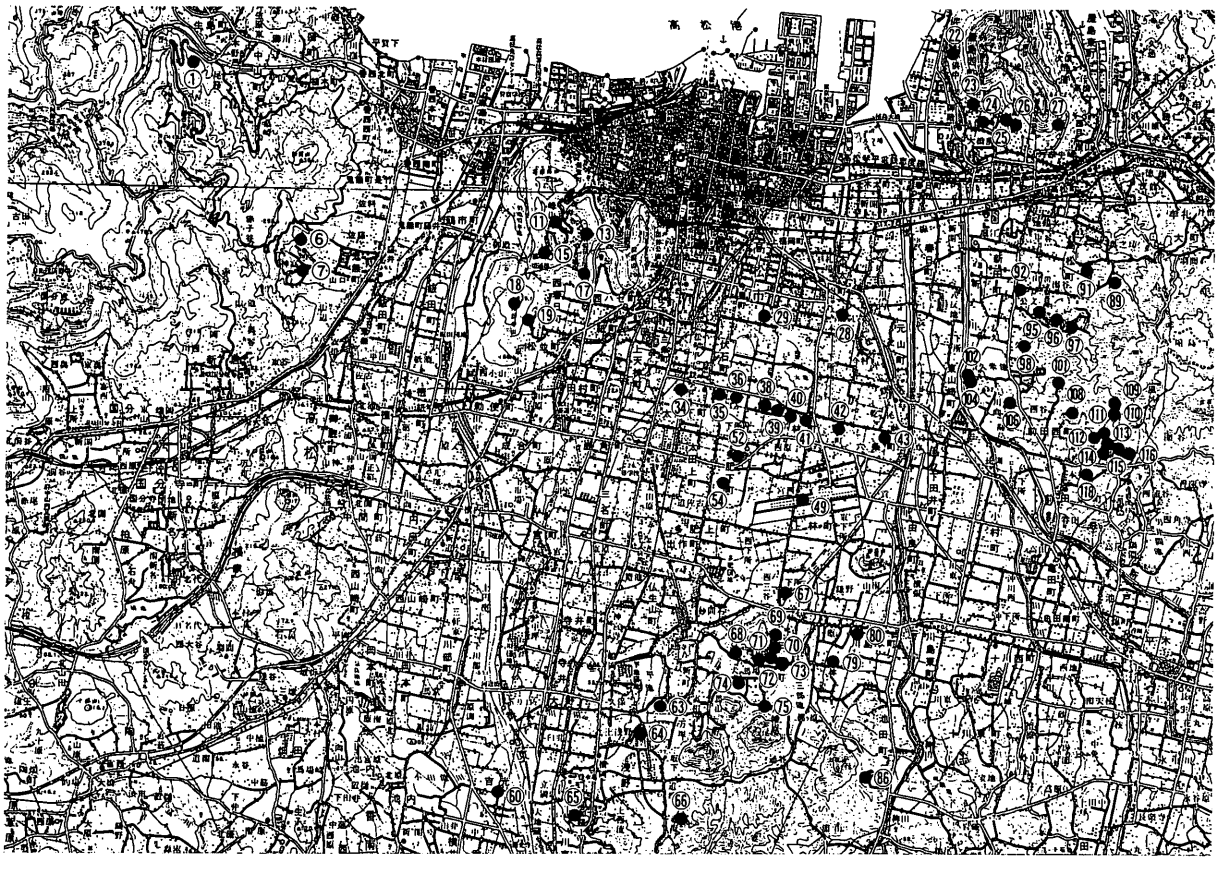
第６図　弥生時代前期・中期遺跡位置図



第７図　弥生時代後期遺跡位置図



第８図　古墳時代前期・中期遺跡位置図



第９図　古墳時代後期遺跡位置図

第10図　古代，中世遺跡位置図

第１表　遺跡一覧表

①横立山経塚古墳
②勝賀廃寺
③かしが谷２号墳
④佐料遺跡
⑤今岡古墳
⑥平木１号墳
⑦古宮古墳
⑧神高池古墳群
⑨下ノ山遺跡
⑩摺鉢谷９号墳
⑪石清尾山古墳群
⑫北大塚古墳
⑬鏡塚古墳
⑭石舟塚古墳
⑮猫塚古墳
⑯姫塚古墳
⑰鶴尾神社４号墳
⑱浄願寺山古墳群
⑲南山浦古墳群
⑳坂田廃寺
㉑高松城東ノ丸跡
㉒浜北古墳群
㉓中筋北古墳群
㉔屋島中央西古墳
㉕金比羅神社古墳群
㉖東山地古墳
㉗湯の谷古墳群
㉘白山神社古墳
㉙天満・宮西遺跡
㉚境目下西原遺跡
㉛松縄下所遺跡
㉜キモンドー遺跡
㉝上天神遺跡
㉞太田下・須川遺跡
㉟蛙股遺跡
㊱居石遺跡
㊲井手東Ⅱ遺跡
㊳井手東Ⅰ遺跡
㊴浴・長池Ⅱ遺跡
㊵浴・長池遺跡
㊶浴・松ノ木遺跡
㊷林・坊城遺跡
㊸六条・上所遺跡
㊹東山崎・水田遺跡
㊺大池遺跡
㊻松ノ木・天皇遺跡
㊼天皇西原遺跡
㊽公務員宿舎遺跡
㊾空港跡地遺跡
㊿一角遺跡
(51)拝師廃寺
(52)凹原遺跡
(53)日暮・松林遺跡
(54)多肥松林遺跡
(55)松林遺跡
(56)多肥廃寺
(57)中間・西井坪遺跡
(58)本堯寺北古墳
(59)若宮神社古墳
(60)佐賀神社古墳
(61)船岡山古墳
(62)舟岡古墳
(63)万塚古墳群
(64)八王子古墳
(65)横岡山古墳
(66)東赤坂古墳
(67)加摩羅神社古墳
　加摩羅神社遺跡
(68)雨山南古墳
　雨山南遺跡
(69)平石上１号墳
(70)平石上２号墳
(71)小日山２号墳
(72)小日山１号墳
　瘤山１号墳
(73)瘤山２号墳
(74)犬の馬場古墳
(75)矢野面古墳
(76)三谷三郎池Ｃ遺跡
(77)三谷三郎池西岸窯跡
(78)三谷石舟古墳
(79)石舟池古墳群
(80)高野南古墳群
(81)高野廃寺
(82)高野丸山古墳
(83)光専寺山遺跡
(84)三谷通谷遺跡
(85)中山田遺跡
(86)中山田古墳群
(87)大空遺跡
(88)すべり山遺跡
(89)南谷古墳
(90)南谷遺跡
(91)長尾古墳群
(92)小山古墳
(93)石塚古墳
(94)山下廃寺
(95)山下古墳
(96)岡山小古墳群
(97)岡山古墳群
(98)久米古墳
(99)久本東峯古墳
(100)北山古墳
(101)瀧本神社古墳
(102)諏訪神社古墳
　諏訪神社遺跡
(103)久米山古墳群
(104)諏訪神社墳丘墓
(105)久米池南遺跡
(106)高松市茶臼山古墳
(107)茶臼山古墳群
(108)田楽古墳
(109)金石山１号墳
(110)金石山２号墳
(111)平尾１号墳
(112)平尾２号墳
(113)平尾３号墳
(114)平尾４号墳
(115)平尾小古墳群
(116)山本古墳
(117)宝寿寺跡
(118)前田東・中村遺跡
(119)権八原遺跡

第3章　調査の成果

第1節　土層序について

当遺跡で検出した遺構は弥生時代後期から近世と時期幅が認められたが，後世の削平のため同一遺構面での検出であった。この遺構面は基本的に灰黄色粘質土をベースとした面で，部分的に灰黄色粘質土の下層である砂礫層がみられる部分もあった。現地表面から約1.4ｍ程が四国工業技術研究所建設時の客土で，除去したのちに旧高松空港時の地表面が出現し，更に約0.3ｍ程の旧耕作土及び部分的に堆積する包含層を除去したのちに遺構面が確認できる。部分的に確認できる包含層は濁白茶色粘質土で，中世を中心とする遺物が出土する。遺構面の海抜高は約14ｍである。

第2節　調査区の概要

平成７年度調査の空港跡地遺跡は高松平野の南部（旧空港跡地）の高松市林町新町2217-14に位置する。これまで空港跡地遺跡は平成２年度から平成６年度にかけてかなりの部分が発掘調査されており，今年度の調査区周辺も北及び西は３・４年度調査にⅢ－４～８区，Ⅲ－38区として，南は平成４年度にⅢ－15区として，東は同じ平成４年度にⅢ－16～18区として発掘調査が実施されている。

今年度の発掘調査は，四国工業技術研究所増築に伴うもので，上記に囲まれた2,780㎡が対象面積である。調査区は北部を第Ⅰ調査区（Ⅲ－53），南部を第Ⅱ調査区（Ⅲ－54）に分け，第Ⅰ調査区から調査を開始した。

第Ⅰ調査区では中央でほぼ南北に流路をとる溝SDj01を検出し，溝より西部で掘立柱建物３棟・土坑・柱穴が，東部で井戸SEj01・土坑を検出した。中央のSDj01は以前の調査から四国工業技術研究所建物部分で検出した掘立柱建物群を区画する区画溝の東辺に当たることが判る。この区画は東西130ｍ，南北110ｍで，今回の調査でほぼ区画内の建物配置が明らかとなった。また，井戸SEj01はその溝より東で検出しており，近接して同時期の遺構は確認されていない。

第Ⅱ調査区では西端で第Ⅰ調査区から延びるSDj01を検出した。溝より東部では掘立柱建物７棟・土坑・柱穴などが検出した。これら掘立柱建物群は12世紀中葉頃のもので，近接して同時期の遺構は検出していない。

第3節　遺構・遺物について

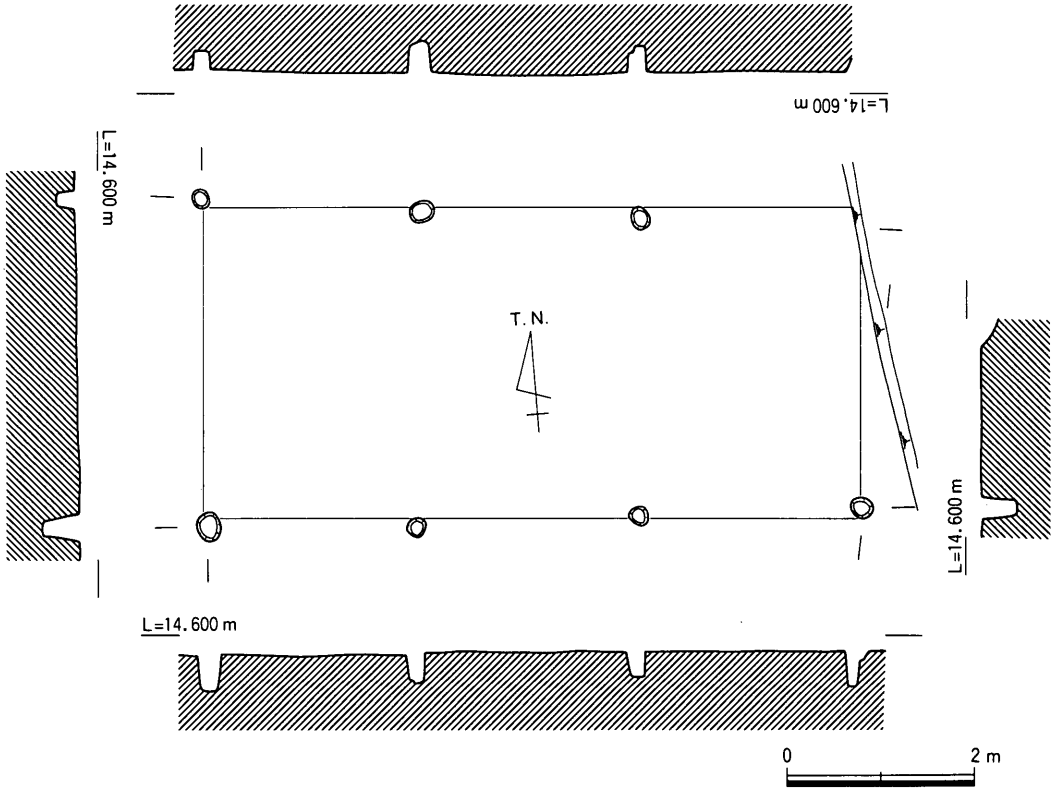
空港跡地遺跡で検出した遺構は，掘立柱建物10棟，井戸１基，土坑23基，溝状遺構11条，柱穴多数である（第11図）。時期は弥生時代後期の柱穴が僅かに確認できるが，そのほとんどは古代末から近世にかけてのものである。

第11図　空港跡地遺跡　J地区遺構全体図

1．掘立柱建物跡

掘立柱建物は第Ⅰ調査区西半と第Ⅱ調査区東半で検出した。第Ⅰ調査区西半で検出した掘立柱建物は前述した区画溝SDj01内にあり，区画内の建物配置をみることで位置付けができるものと考える。第Ⅱ調査区東半で検出した掘立柱建物は若干の時期差があり，２回程度の建て替えが考えられる。

時期は柱穴出土遺物より前者が近世で，後者が古代末から中世初のものである。



第12図　SBj01平・断面図

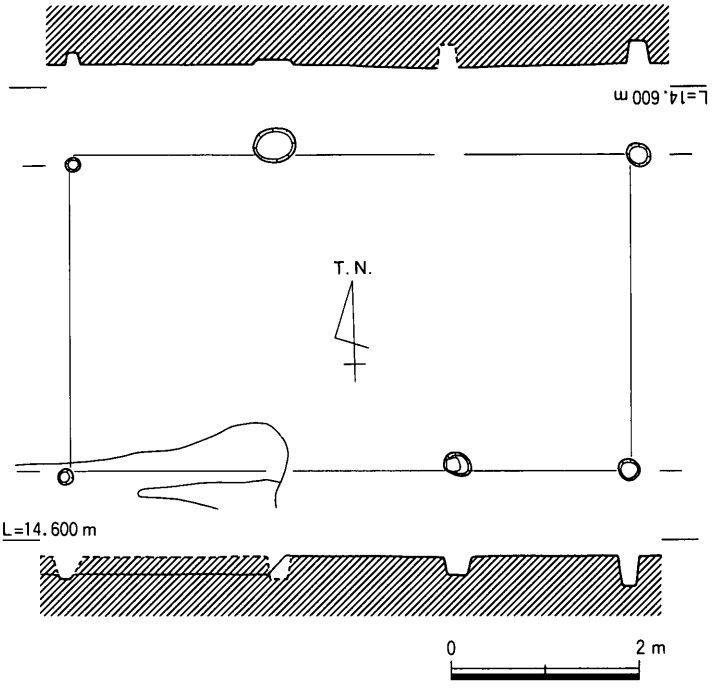
SBj01（第12図）

SBj01は第Ⅰ調査区で検出した掘立柱建物で，規模は梁間１間×桁行３間（3.25×6.98m）である。柱穴は直径約0.25m前後で，検出面からの深さは約0.40m前後を計る。ほぼ東西棟のもので，主軸（南北軸）は真北から5.0°東偏する。

時期は柱穴から遺物が出土していないので不明であるが，柱穴埋土が灰白色を呈していることから近世と考える。

SBj02（第13図）

SBj02は第Ⅰ調査区で検出した掘立柱建物で，SBj01と若干主軸を異にする程度で，ほぼ同位置で確認した。規



第13図　SBj02平・断面図

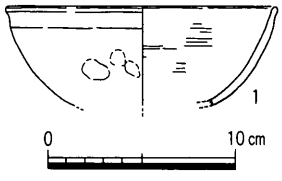
模は梁間１間×桁行３間（3.34×5.94ｍ）の掘立柱建物である。柱穴は直径0.25ｍ前後で，検出面からの深さは約0.24ｍを計る。ほぼ東西棟のもので，主軸（南北軸）は真北から1.5°東偏する。

時期は柱穴から遺物が出土していないので不明であるが，柱穴埋土が灰白色を呈していることから近世と考える。

SBj03（第15図）

SBj03は第Ⅰ調査区で検出した掘立柱建物で，規模は梁間２間×桁行(2)間（3.98×(3.30)ｍ）である。柱穴は直径約0.21ｍ前後で，検出面からの深さは約0.18ｍを計る。ほぼ東西棟のもので，主軸（南北軸）は真北から11.5°東偏する。

柱穴SPj66から，黒色土器Ａ類椀が出土している（第14図－１）。体部が内彎しながら外上方に延びるもので，体部内外面に僅かに横方向のヘラ磨きが認められる。

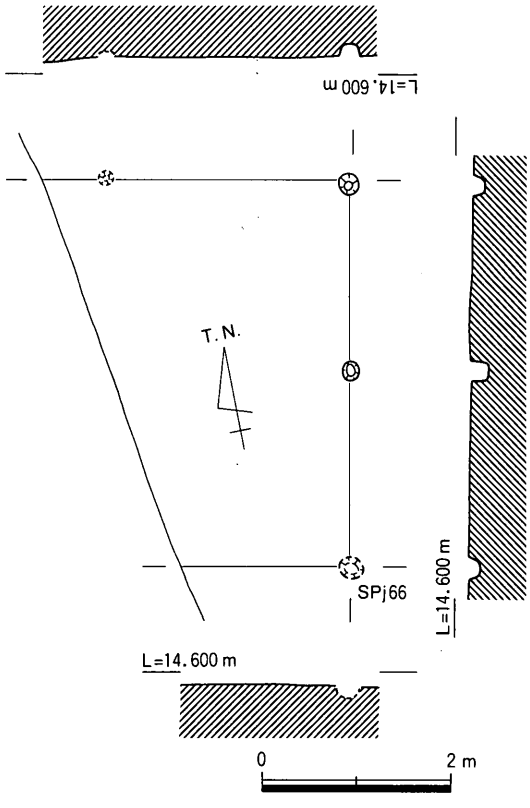


第14図　SBj03出土遺物実測図

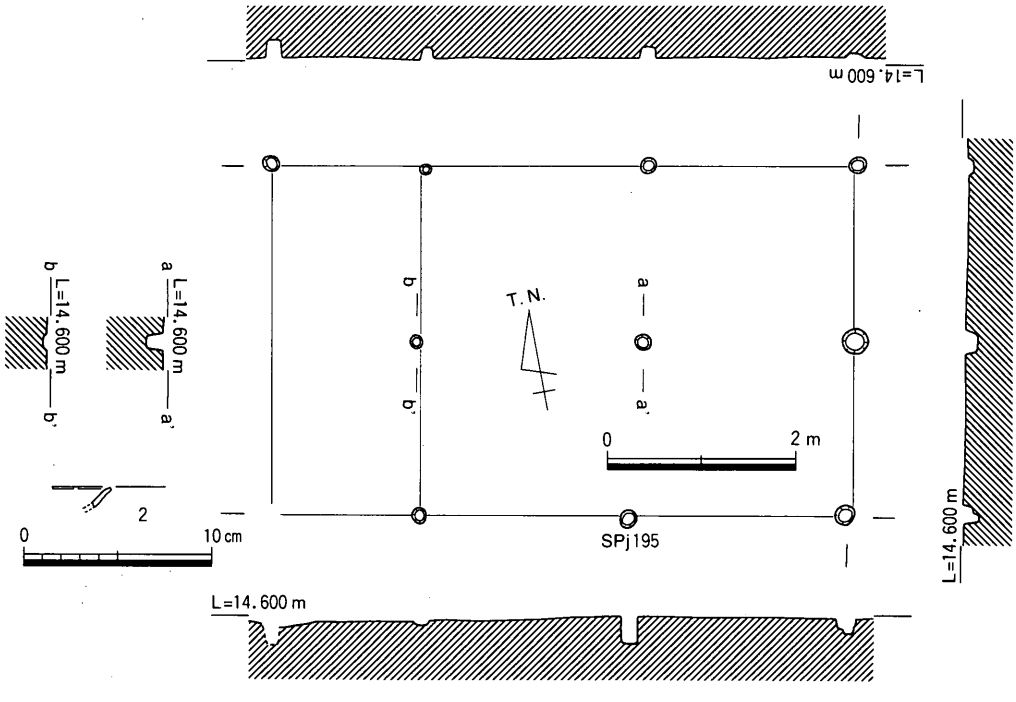
時期は黒色土器Ａ類椀から12世紀中葉頃である。

SBj04（第16図）

SBj04は第Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物である。規模は梁間２間×桁行２間(3.67×4.59ｍ)の総柱で，西側に間隔の違う庇が１間延びる。柱穴は直径0.17ｍ前後で，検出面からの深さは約0.20ｍを計る。東西棟のもので，主軸（南北軸）は真北から11.0°東偏する。



第15図　SBj03平・断面図



第16図　SBj04平・断面図，出土遺物実測図

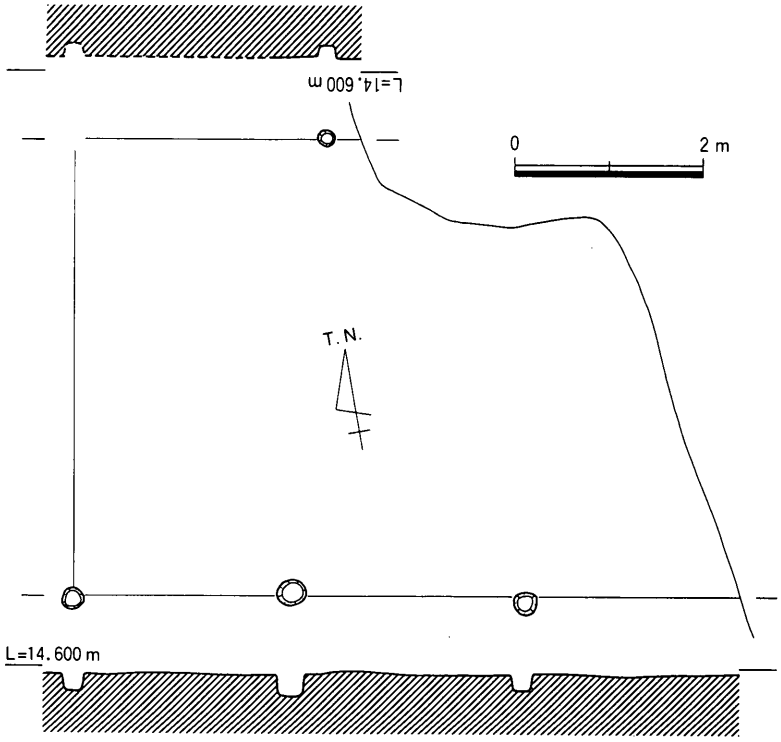
柱穴SPj195からは，黒色土器B類椀が出土している（第16図－2）。口縁端部内面に細い沈線が認められる。

時期は黒色土器B類椀が10世紀頃のものであるが，同時期と思われる掘立柱建物の埋土及び主軸方向から12世紀頃と考える。

SBj05（第17図）

SBj05は第Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物で，規模は梁間(1)間×桁行(3)間((4.76)×(7.07)m)である。柱穴は直径0.24m前後で，検出面からの深さは約0.18mを計る。東西棟のもので，主軸（南北軸）は真北から10.0°東偏する。

時期は柱穴から遺物が出土していないので不明である。

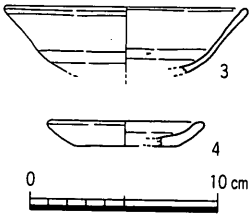


第17図　SBj05平・断面図

SBj06（第20図）

SBj06は第Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物で，SBj07・08と重複する。規模は梁間1間×桁行3間（3.30×6.61m）の掘立柱建物で，全面に庇を持つ。柱穴は直径0.20m前後で，検出面からの深さは約0.16mを計る。ほぼ東西棟のもので，主軸（南北軸）は真北から8.0°東偏する。

柱穴SPj156から十瓶山窯産須恵器椀（瓦質土器椀）が，SPj169から土師器小皿が出土している（第18図－3・4）。3は外面横ナデ，内面は横ナデの後板ナデが施されている。4は底部はヘラ切りで，体部は外上方にやや内彎しながら延びる。



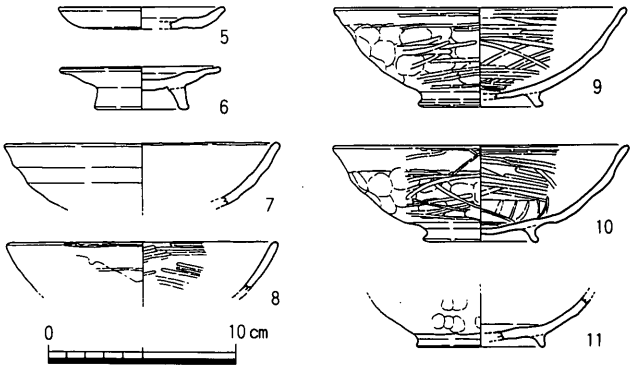
第18図　SBj06出土遺物実測図

時期は須恵器椀及び土師器小皿から12世紀末頃と思われる。

SBj07（第21図）

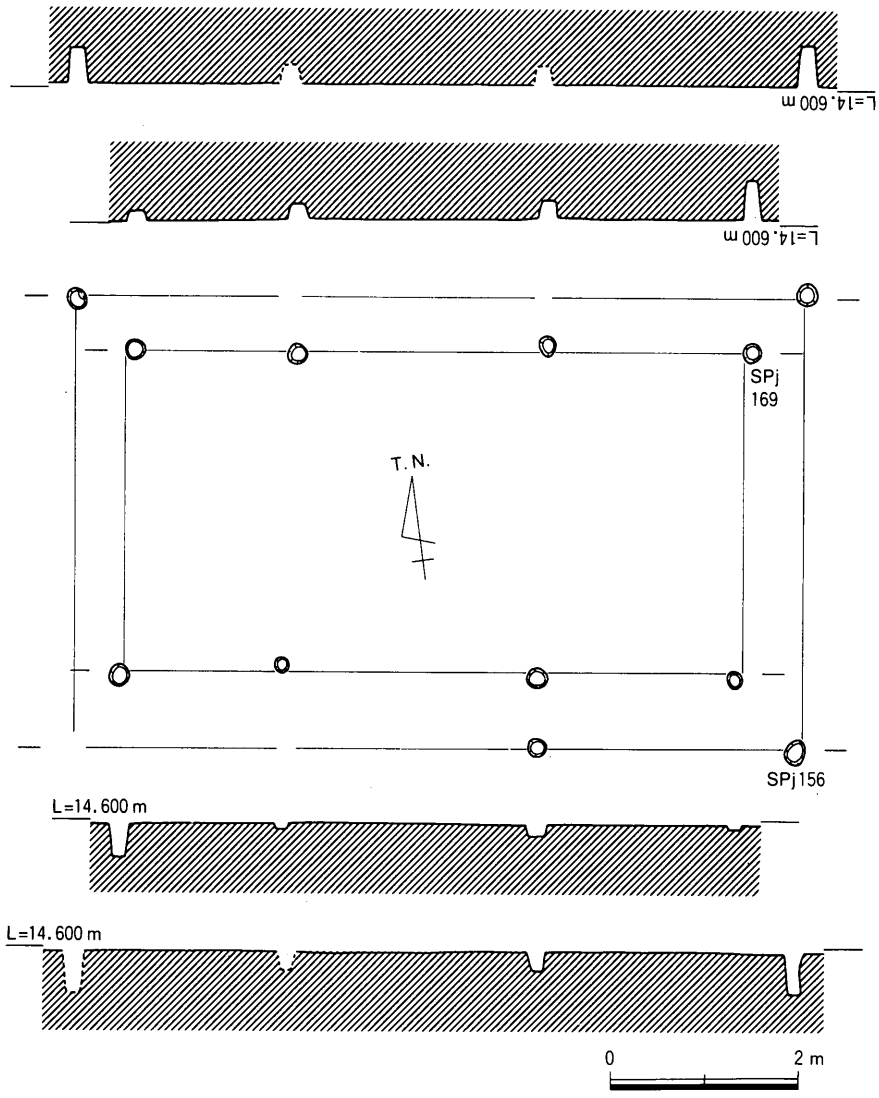
SBj07は第Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物で，規模は梁間1間×桁行3間（3.28×5.26m）を計る。柱穴は直径約0.25m前後で，検出面からの深さは約0.40mと他の掘立柱建物に比べるとかなり深い。SBj07は南北棟のもので，主軸（南北軸）は真北から13.0°東偏する。

柱穴内からは，土師器小皿・高台付小皿・土師器椀・黒色土器椀・瓦器椀が出土している

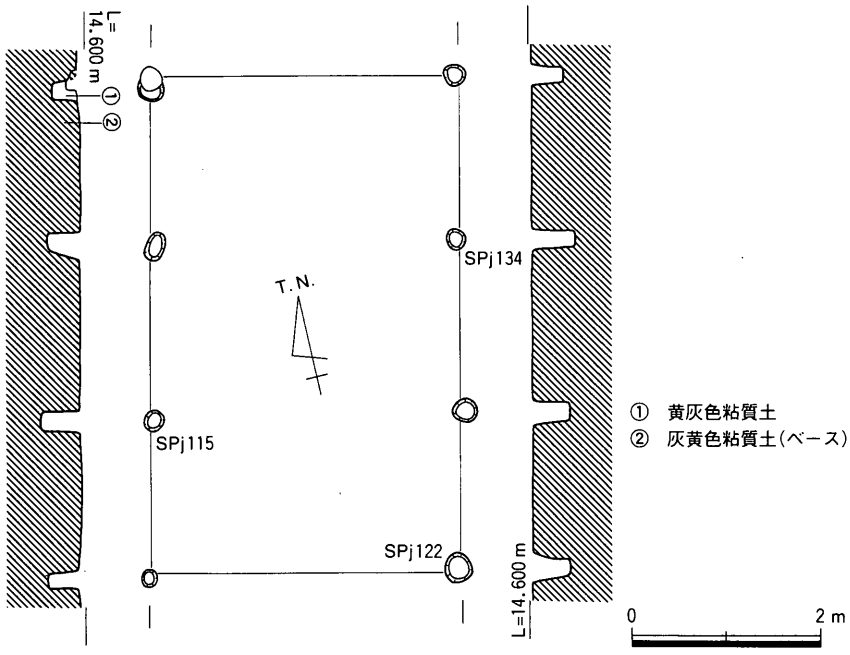


SPj115出土　9
SPj122出土　5・6・8
SPj134出土　7・10・11

第19図　SBj07出土遺物実測図



第20図　SBj06平・断面図



第21図　SBj07平・断面図

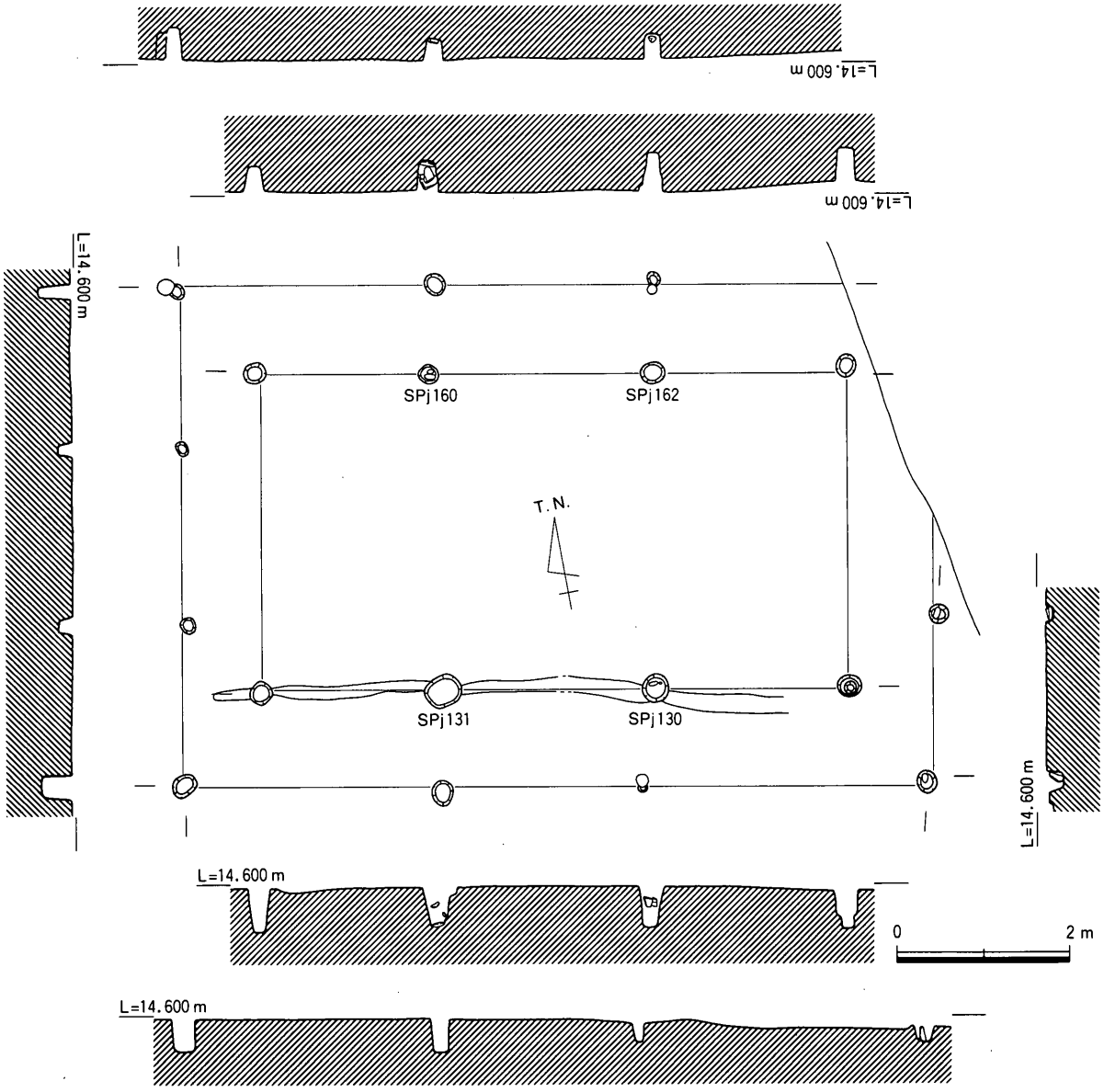
（第19図－５～11）。５は土師器小皿で，底部ヘラ切りされ，体部は直線的に外上方に延びる。６はやや足高の高台が付く托状の小皿である。７は土師器の椀である。８は黒色土器Ａ類椀である。体部内面には分割気味に，外面にはやや粗い横方向のヘラ磨きが施されている。体部外面のやや間隔を開けた横方向のヘラ磨きの特徴から西村遺跡で多量に出土した黒色土器に類似する。９～11は和泉型瓦器椀である。高台はしっかりしており，体部は内彎気味に外上方に延びる。体部内面にはやや密に，外面には指頭痕の後，やや粗くヘラ磨きが施されている。

時期は黒色土器椀・瓦器椀などから12世紀中葉頃と思われる。

SBj08（第22図）

SBj08は第Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物で，周囲に庇を持つ。規模は梁間１間×桁行３間（3.62×6.77ｍ）を計る。柱穴は直径約0.30ｍ前後で，検出面からの深さは約0.50ｍと他の掘立柱建物に比べるとかなり深い。ほぼ東西棟のもので，主軸（南北軸）は真北から10.0°東偏する。

柱穴内からは，土師器小皿，土師器坏，土師器椀，青磁碗，瓦質こね鉢，砥石が出土している（第24図



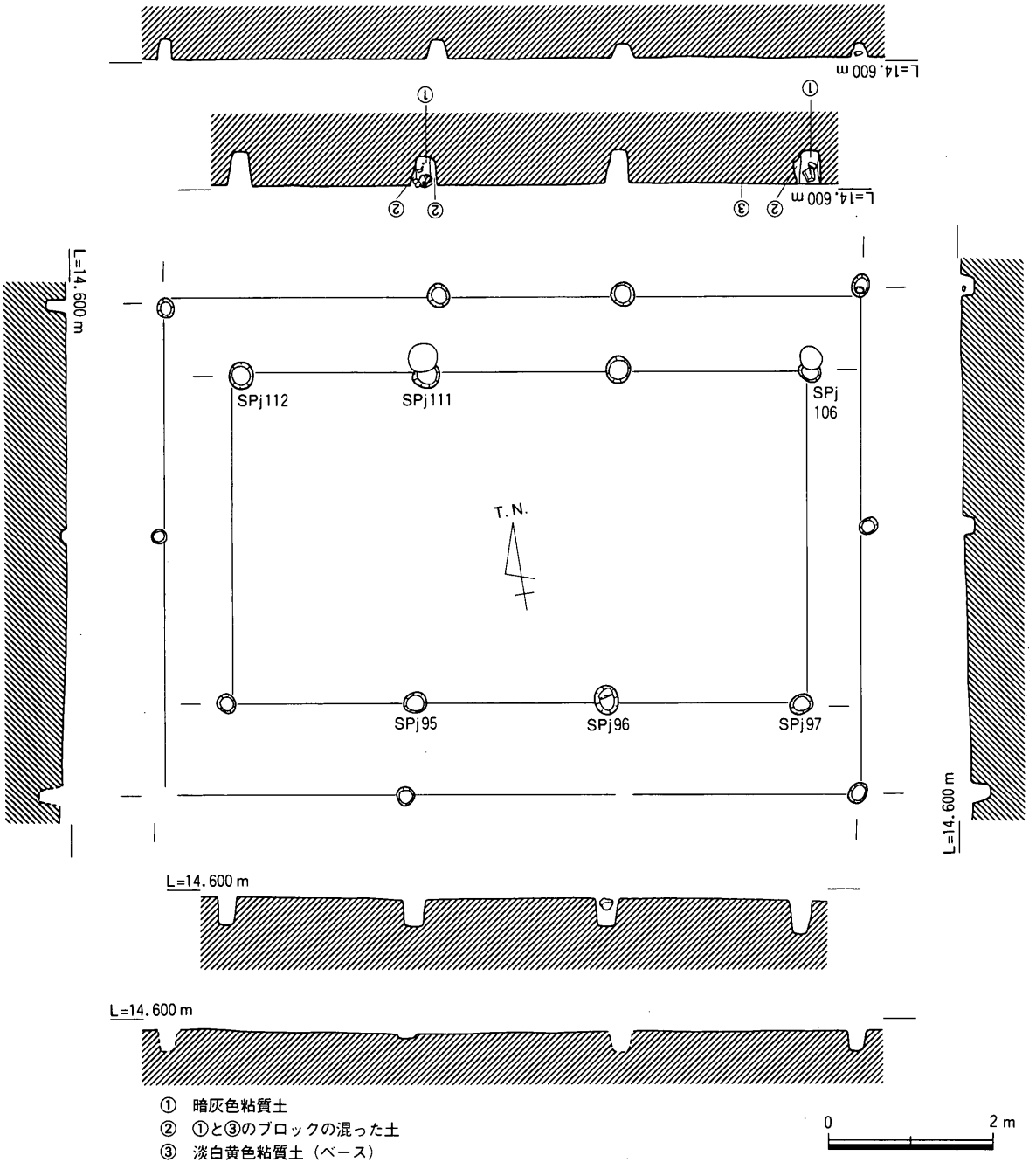
第22図　SBj08平・断面図

－12～20)。12・13は土師器小皿である。底部はヘラ切りされ，体部は直線的に外上方に延びる。14は須恵器小皿（瓦質小皿）である。底部はヘラ切りされ，体部は直線的に外上方に延びる。15・16は土師器坏である。15は内面にヘラ磨きが認められる。17は土師器椀である。18は青磁碗Ⅰ－5類である。19は十瓶山窯産須恵器こね鉢（瓦質こね鉢）である。瓦質焼成されている。20は砂岩製の砥石である。表・裏面及び側面にも使用痕が認められる。

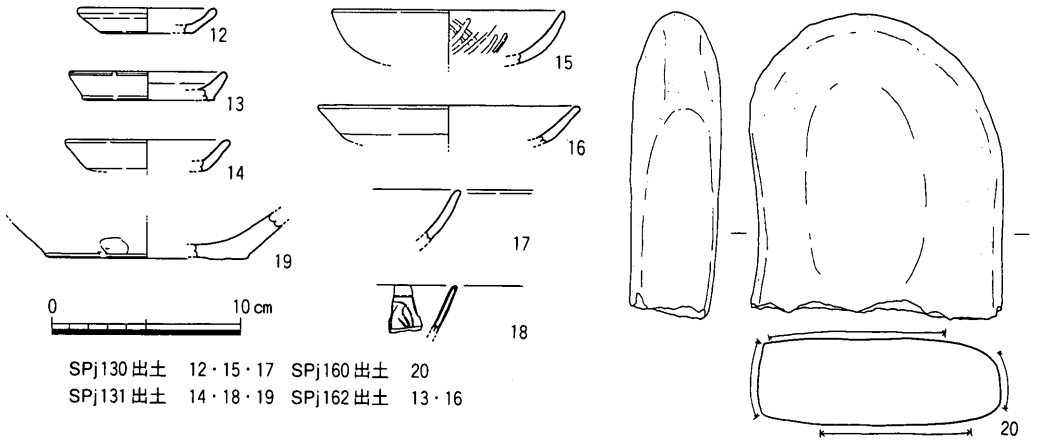
時期は須恵器こね鉢・青磁碗・土師器椀などから13世紀前半頃と思われる。

SBj09（第23図）

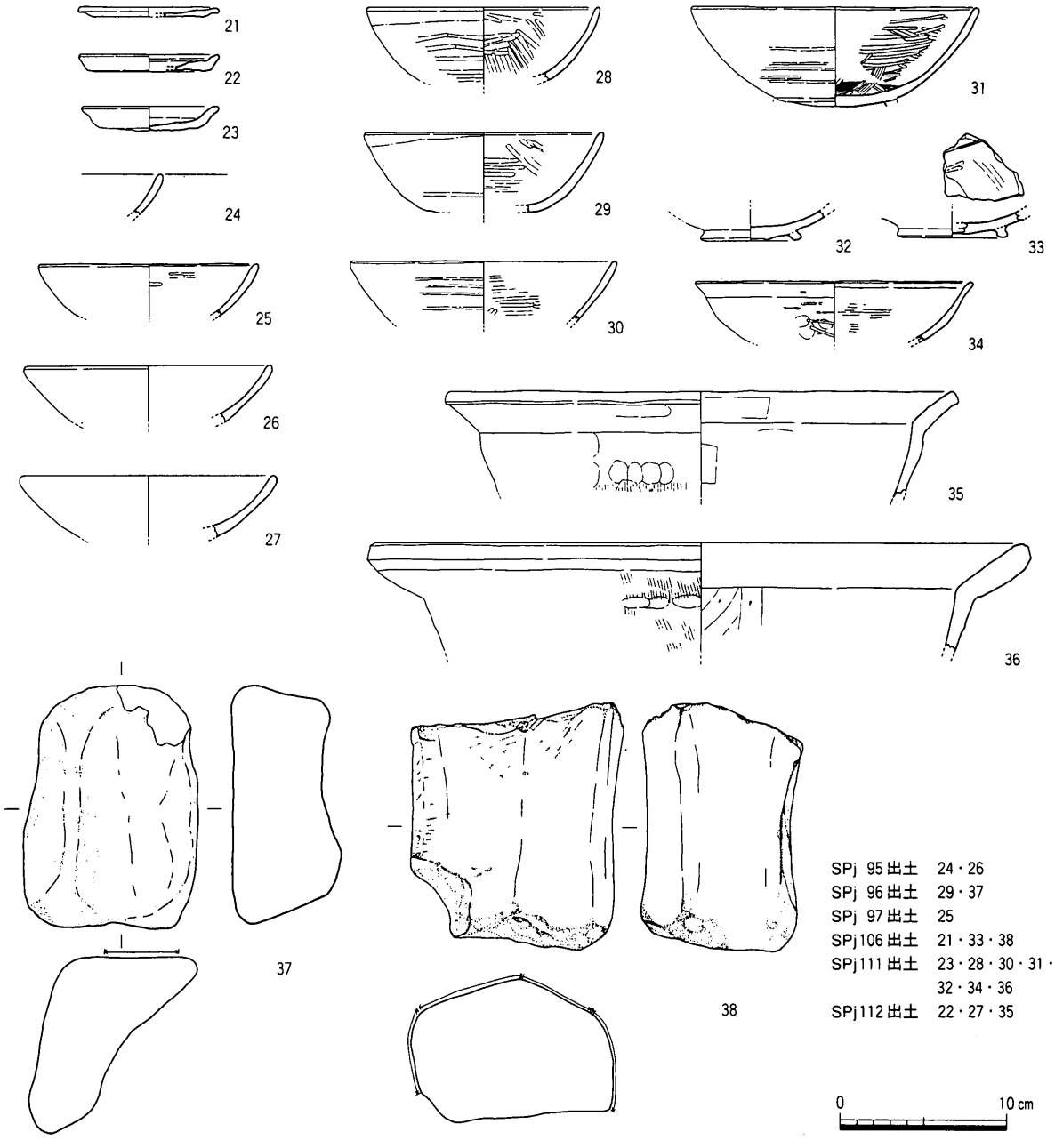
SBj09は第Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物で，周囲に庇を持つ。規模は梁間1間×桁行3間（4.02×6.95m）を計る。柱穴は直径約0.30m前後で，検出面からの深さは約0.40mと他の掘立柱建物に比べ



第23図　SBj09平・断面図



第24図　SBj08出土遺物実測図



第25図　SBj09出土遺物実測図

るとかなり深い。SBj09は東西棟のもので，主軸（南北軸）は真北から9.3°東偏する。

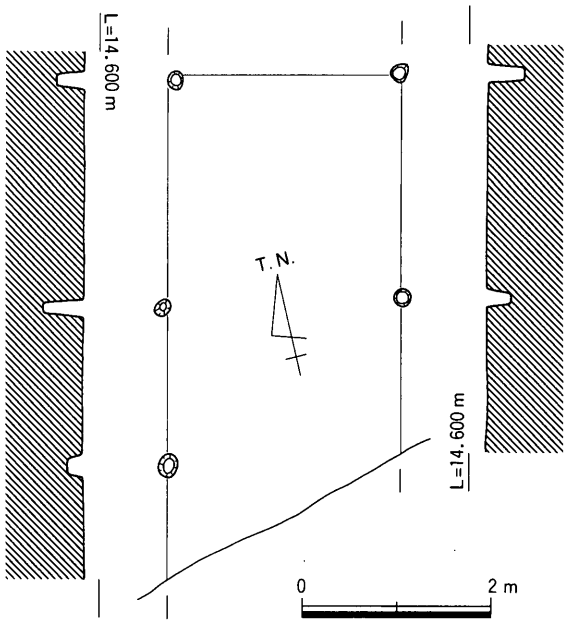
柱穴内からは土師器小皿，土師器椀，黒色土器椀，瓦器椀，土師質土鍋，砥石が出土している（第25図－21～38）。21～23は土師器小皿である。全て底部はヘラ切りで，体部は横ナデされている。21は器高の浅いもので，胎土は他のものに比べると精良である。24～27は土師器椀である。26と27は同一個体であるが，26はSPj95から出土したもので，27はSPj112から出土したものである。28～33は内黒の黒色土器椀である。内面には分割状のヘラ磨きが密に，外面にはやや間隔を開けた横方向のヘラ磨きが施されている。外面ヘラ磨きの特徴は西村遺跡で多量に出土する黒色土器と類似する。34は瓦器椀である。体部内面にヘラ磨きが，外面には指頭痕の後ヘラ磨きが施されている。35・36は土師質土鍋である。頸部は「く」の字に屈曲し，体部は内彎しながら延びる。器高は浅く，体部外面に粗い刷毛目が施されている。37・38は砂岩製の砥石である。38は欠損部以外の4面に使用痕が認められる。

時期は黒色土器椀・瓦器椀などから12世紀中葉頃と思われる。

SBj10（第26図）

SBj10は第Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物で，規模は梁間1間×桁行(3)間（2.47×(5.19)m）を計る。柱穴は直径約0.17m前後で，検出面からの深さは約0.28mを計る。SBj10は南北棟のもので，主軸（南北軸）は真北から13.5°東偏する。

遺物が出土していないため時期は不明である。



第26図　SBj10平・断面図

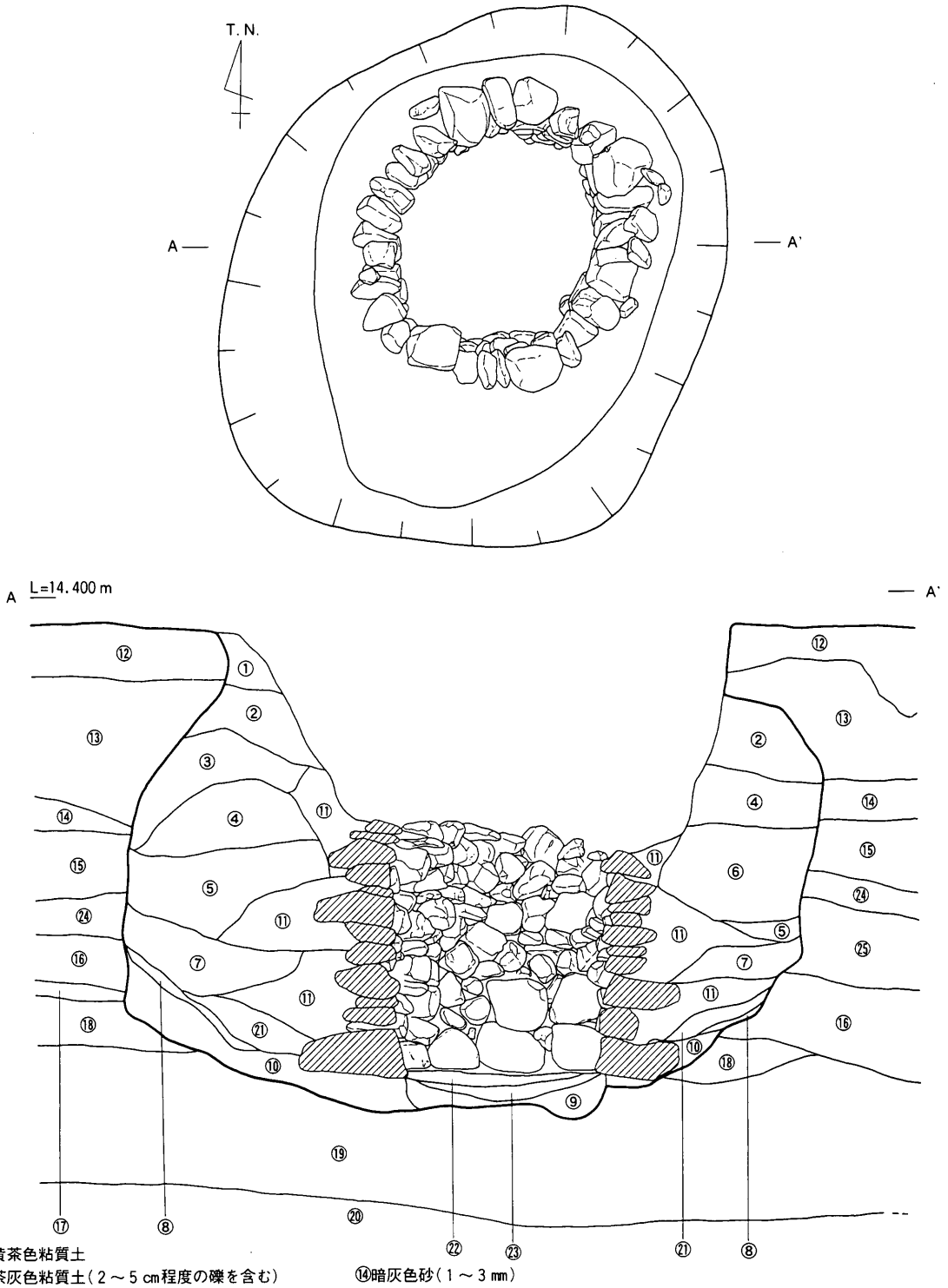
2．井戸跡

調査区で井戸は1基確認している。前述した区画溝SDj01の東側（区画外）で検出しており，同時期の遺構は区画溝SDj01と西側で検出した掘立柱建物2棟である。

SEj01（第27図）

SEj01は第Ⅰ調査区東部，SDj01の東側で近接して検出した。検出平面形態は歪な円形を呈し，検出面から0.6m下で円形の石組み上面を検出した。石組み井戸の構造は平面形態がほぼ円形で，円筒形を呈しており，曲物などの下部構造はない。石組み基底部に長辺60cm，短辺20cm程度の角張った石及び川原石（砂岩）の短辺側を内側に向けて置き，上部は長辺20cm，短辺10cm程度の川原石（砂岩）でほぼ垂直に構築している。規模は石組み上面から底まで約0.8m，直径約0.65mを計る。

掘方は検出平面形態が歪な円形で，掘方断面は下層の砂礫層まで掘削しているため，下層ではオーバーハング気味に抉れている。土層は掘削面が灰黄色粘質土で，約0.5m下で砂層になり更に下層で砂礫層になる。湧水層は土層及び井戸の深さから検出面から約1.2m下の青灰色砂層と考えられ，現在の湧水点が検出面から約1.7mであることから当時は湧水点が約0.5mほど上位にあったものと考える。掘方内の土層は，下部から石組みの裏込めに2～10cm程度の礫を裏込めにするのを基本とし，砂層と交互に埋め戻され，石組みほぼ上面で砂礫層によって面を整え，上部の粘質土で固定したものと考える。石組み内部には泥炭層が堆積していた。



①黄茶色粘質土
②茶灰色粘質土(2～5 cm程度の礫を含む)
③暗灰色砂(1 mm以下)
④淡茶灰色砂礫(1 mm以下の砂、2～5 cm程度の礫)
⑤暗灰色砂(1～5 cmの礫を含む)
⑥暗青灰色砂礫(1 mm以下の砂、2～10 cm礫)
⑦濁黄灰色砂(1 mm以下)
⑧灰黒色砂(1～2 mm)
⑨暗黒灰色砂(1～2 mm)
⑩青灰色砂(1 mm以下の砂に⑨を含む)
⑪礫(2～10 cm)グリ石層
⑫灰黄色粘質土
⑬茶灰色粘質土(2～10 cmの礫を含む)
⑭暗灰色砂(1～3 mm)
⑮黒灰色砂礫(1～2 mm砂、2～5 cmの礫を少量含む)
⑯灰青色砂(0.5 mm以下)
⑰青灰色砂(0.5 mm以下、木片を含む)
⑱白青灰色砂(1 mm以下)
⑲青灰色砂(1 mm以下)
⑳青灰色砂礫(2～10 mm砂、2～10cm礫)
㉑ほぼ⑦と同じ
㉒青灰色砂
㉓淡茶黄色砂礫(かたくしまっている)
㉔ほぼ⑧と同じ
㉕暗青灰色砂礫(1～2 mm砂、2～5 cmの礫を少量含む)

第27図　SEj01平・断面図

遺物は石組み内部及び掘方内部より多数の遺物が出土している（第28・29図－39～76）。

39～60は井戸掘方内及び石組み内出土遺物である。

39は磁器小坏である。全面に淡い緑味を帯びた透明釉が掛かっている。40は京焼風陶器碗である。体部内外面に透明釉が掛かっている。釉は貫入が著しく，体部外面には透明釉の後緑色の呉須で笹葉を描いている。発色は悪い。41は肥前系陶胎染付碗である。やや黄緑味を帯びた透明釉が全面に掛かっているが，焼成は悪く，釉に発泡が認められる。呉須は淡い青色に発色している。42は陶器鉢である。口縁部上端以外に茶色釉が掛かっている。43は陶器壺の底部である。外面は茶色に発色する釉が掛かっている。44は唐津刷毛目鉢である。高台部を除く全面に緑味を帯びた釉が掛かり，貫入が認められる。内面見込み部は蛇の目釉剝されている。45は唐津刷毛目鉢である。内面に刷毛で暗黄色の釉が塗られている。46は陶器蓋である。全体に円板状を呈するもので，下面外周部分に断面台形状の凸帯を持つ。47は陶器灯明皿である。内面は塗り土によりこげ茶色に発色する。体部外面はヘラ削りされている。48は直行する口縁部を持つ陶器鉢である。体部外面は塗り土により茶色に発色する。49は陶器擂鉢である。口縁部上端及び口縁部下端に重ね焼痕が認められることから備前焼と思われる。内面の条溝はやや間隔を開ける。50～54は陶器擂鉢である。内面の条溝は密に施され，体部外面には横方向のヘラ削りが施されている。53は底部が高台状に作られ，内面見込み部まで条溝が密に施されている。内面体部と見込み部の境はかなり摩滅し，条溝が消えている部分がある。54は体部内面に条溝が密に，見込み部には「ウールマーク」状の条溝が施されている。体部外面は横方向のヘラ削りが施され，底部外面には輪状の窯道具の痕跡が認められる。50～52は堺産あるいは明石産の陶器擂鉢で，53は堺産，54は明石産である。55は土師質の火鉢と思われる。体部外面に波状文が認められる。56～58は土師質の焙烙である。56は内耳部分に2箇所穿孔が認められる。

59・60は石組み井戸内底部から出土した竹製の茶杓である。節の部分を底にし，体部外面を細かく削っている。柄は斜め方向にみられ，59は内面で止まり，60は貫通している。

61～64は裏込め埋土④から出土した遺物である。

61は瀬戸焼小碗である。胎土は陶器で，高台畳付け以外全面にやや緑味を帯びた透明釉が掛かっており，全体に貫入が著しい。体部外面の呉須は青色に発色する。瀬戸焼の陶胎染付である。62・63は肥前系陶胎染付碗である。62は高台畳付け以外にやや青味を帯びた釉が掛かっており，全体に貫入が著しい。呉須の発色は悪く，くすんだ緑色を呈する。63もほぼ62と同様であるが焼成は良く，呉須の発色はよく口縁端部外面の袈裟襷文が黒色に，それ以外が青色に発色している。64は須恵器甕を転用した円板状土製品である。

65・66は裏込め埋土⑤から出土した遺物である。

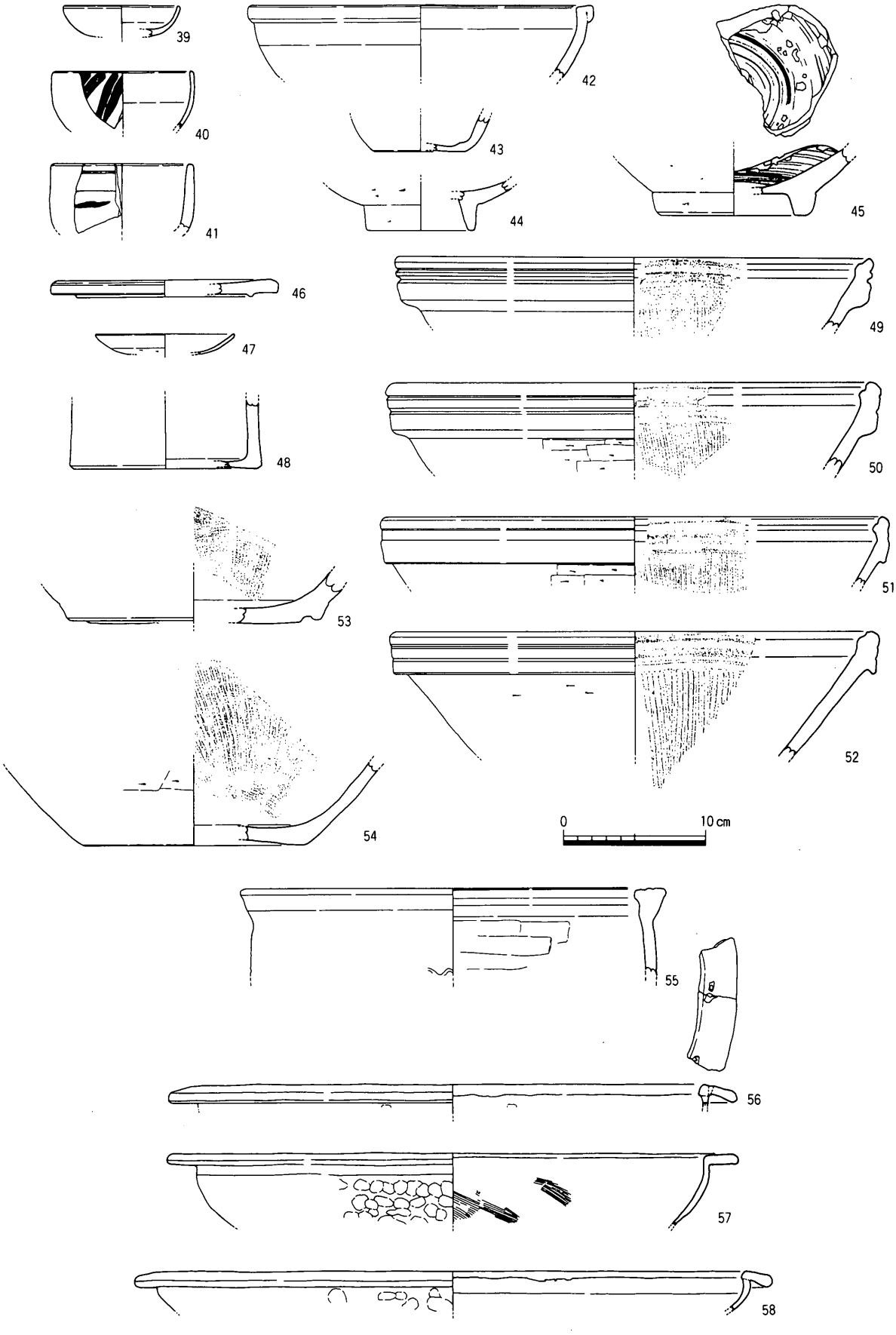
65・66は瓦質の羽釜である。65はやや小型のもので口縁端部外面に外耳が認められる。66は大型のもので口縁部内外面に粗い指ナデが，内面には下半部に粗い刷毛目が認められる。

67・68は裏込め埋土⑥から出土した遺物である。

67は土師質の焙烙である。68は陶器擂鉢で，体部内面に条溝が密に施され，体部外面は横方向のヘラ削りが施されている。内面見込み部及び底部外面に輪状の窯道具の痕跡が認められる。堺産あるいは明石産である。

69～71は裏込め埋土⑦から出土した遺物である。

69は磁器皿と思われる。70は陶器壺あるいは甕の底部と思われる。底部に扇形の外郭線に一文字を



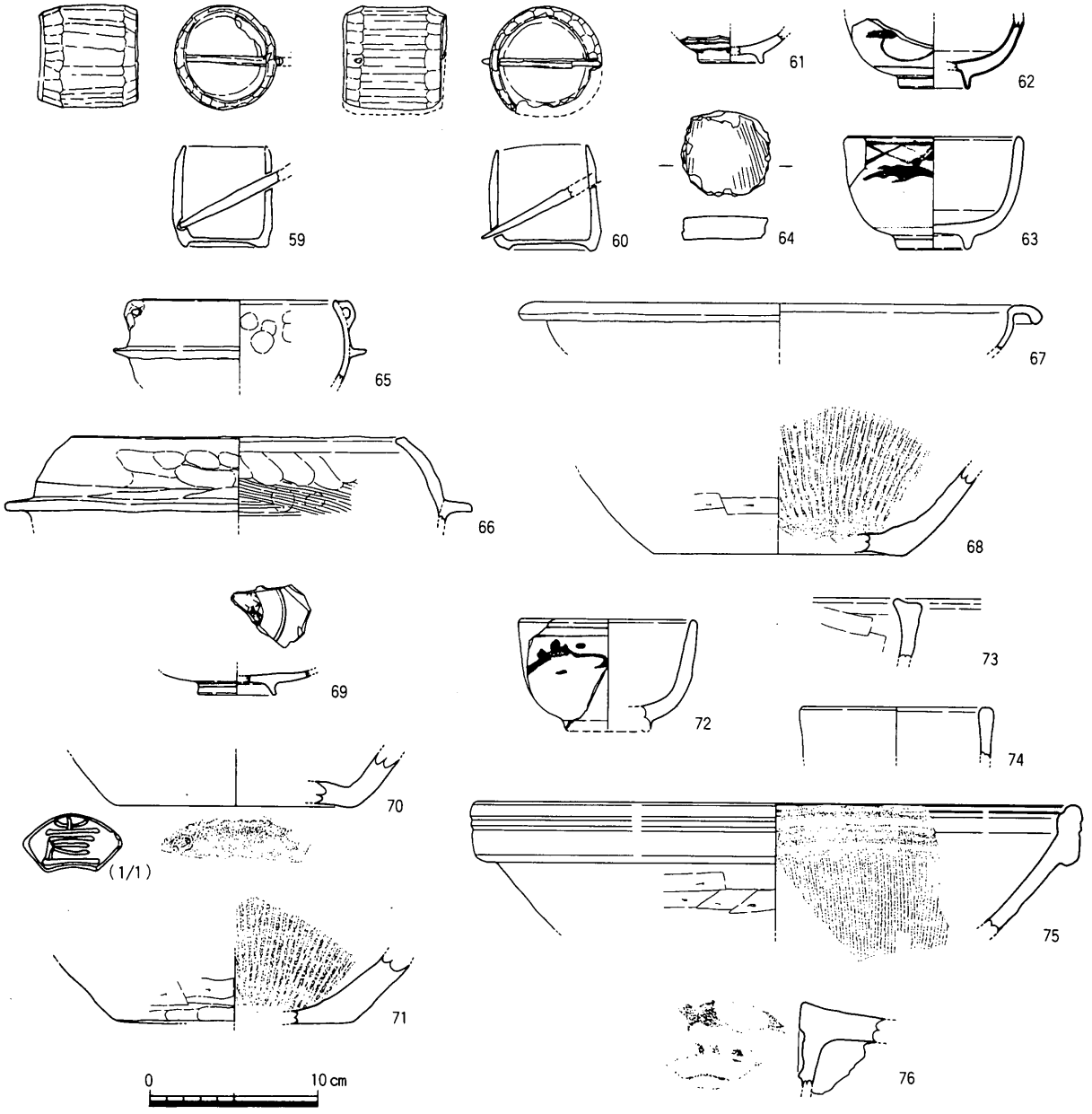
第28図　SEj01出土遺物実測図①

入れた刻印が認められる。71は陶器擂鉢である。内面に密に条溝が，外面にはヘラ削りが施されている。明石産か。

72～76は裏込め埋土⑪から出土した遺物である。

72は肥前系陶胎染付である。全体に貫入の認められるやや青味を帯びた釉が掛かっており，呉須の発色は悪い。73は土師質の土釜と思われる。口縁部の立ち上がりも鍔もほとんど形骸化したものである。74は直行する陶器鉢の口縁部である。75は陶器擂鉢で，体部内面に条溝が密に，外面にはヘラ削りが施されている。堺産あるいは明石産と思われる。76は巴文軒丸瓦である。瓦当面には小振りの巴文とやや大きめの連珠が認められる。

時期は肥前系陶胎染付や瀬戸焼陶胎染付及び陶器擂鉢などから18世紀後半から19世紀前半頃と思われる。



第29図　SEj01出土遺物実測図②

3．土　坑

当調査区で土坑は23基検出した。検出した位置は大きく分けてSDj01周辺にまとまりを見せるものと南東部付近に散在するものである。前者は出土遺物及び埋土から近世に掘削されたものと思われ，後者は埋土が暗茶灰色粘質土を呈し，平面形態が一定していないこと及び遺物が出土していないことから自然の落ち込み状の土坑の可能性がある。

SKj01（第30図）

SKj01は第Ⅰ調査区北端で検出した。北側が調査区外に延びるため，全体の平面形態は不明であるが，おそらく隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は現存する部分での長辺が1.76ｍ，検出面からの深さは0.08ｍを計る。埋土は灰色粘質土と茶色粘質土の混じった層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj02（第31図）

SKj02は第Ⅰ調査区北端で検出した。北側の一部が調査区外に延びるため全体の平面形態は不明であるが，おそらく不正円形を呈するものと思われる。規模は現存する部分での天幅が1.14ｍ，検出面からの深さは0.14ｍを計る。埋土は濁茶白色粘質土の単層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj03（第32図）

SKj03は第Ⅰ調査区北端で検出した。北側の一部が調査区外に延びるため全体の平面形態は不明であるが，おそらく隅丸方形を呈するものと思われる。規模は現存する部分での天幅が1.32ｍ，検出面からの深さは0.42ｍを計る。掘方はほぼ垂直になり，埋土は上層が灰色粘質土を基本とし，下層になると暗灰色の砂層を基本とする土層になる。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj04（第33図）

SKj04は第Ⅰ調査区北部で検出した。平面形態は楕円形で，SKj05と一部が重複する。規模は長幅が1.34ｍで，検出面からの深さは0.52ｍを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj05（第33図）

SKj05は第Ⅰ調査区北部で検出した。平面形態はほぼ円形で，SKj04と一部が重複する。規模は天幅1.20ｍ，検出面からの深さは0.52ｍを計る。埋土は白灰色粘質土に茶黄色を基調とするベースのブロックを含む単層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj06（第34図）

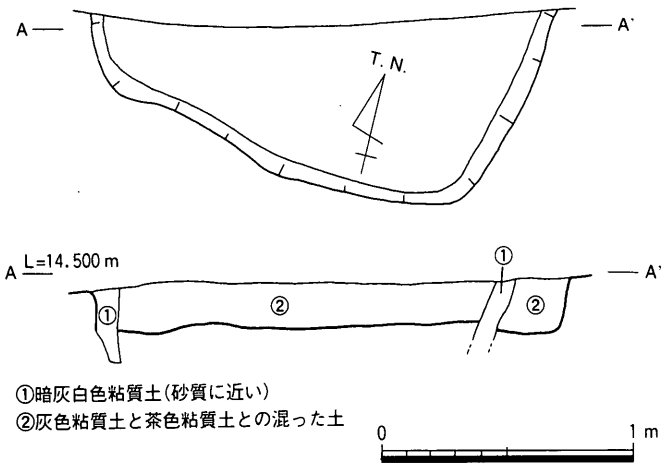
SKj06は第Ⅰ調査区北部で検出した。平面形態は円形で，規模は天幅1.11ｍ，検出面からの深さは0.33ｍを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

土坑内から陶器・瓦質土器が出土している（第35図）。77・78は陶器擂鉢である。体部外面には横方向のヘラ削りが，内面には条溝が密に施されている。明石産であろうか。79は瓦質羽釜の口縁である。

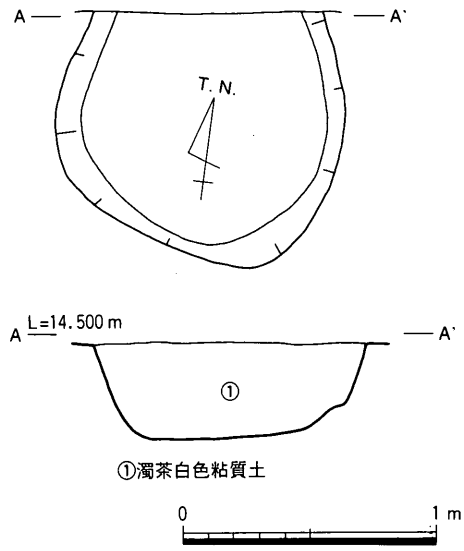
時期は陶器擂鉢から18世紀末から19世紀前半と思われる。

SKj07（第36図）

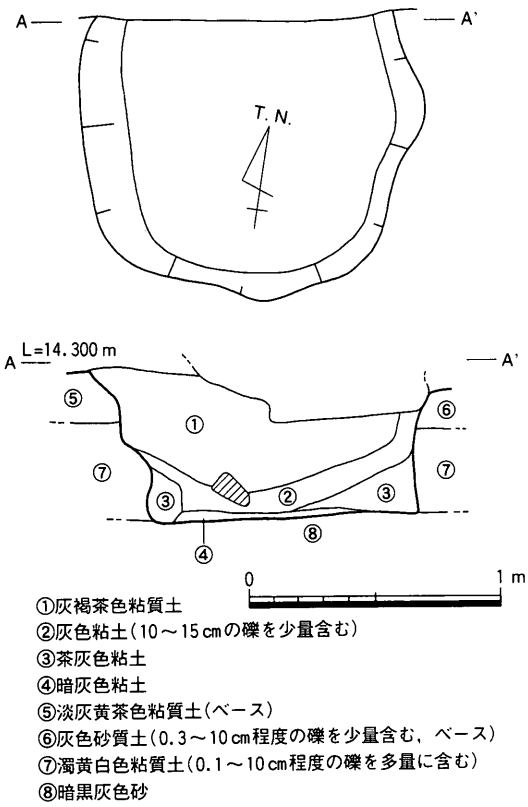
SKj07は第Ⅰ調査区北部で検出した。平面形態は不正円形で，規模は天幅0.90ｍ，検出面からの深



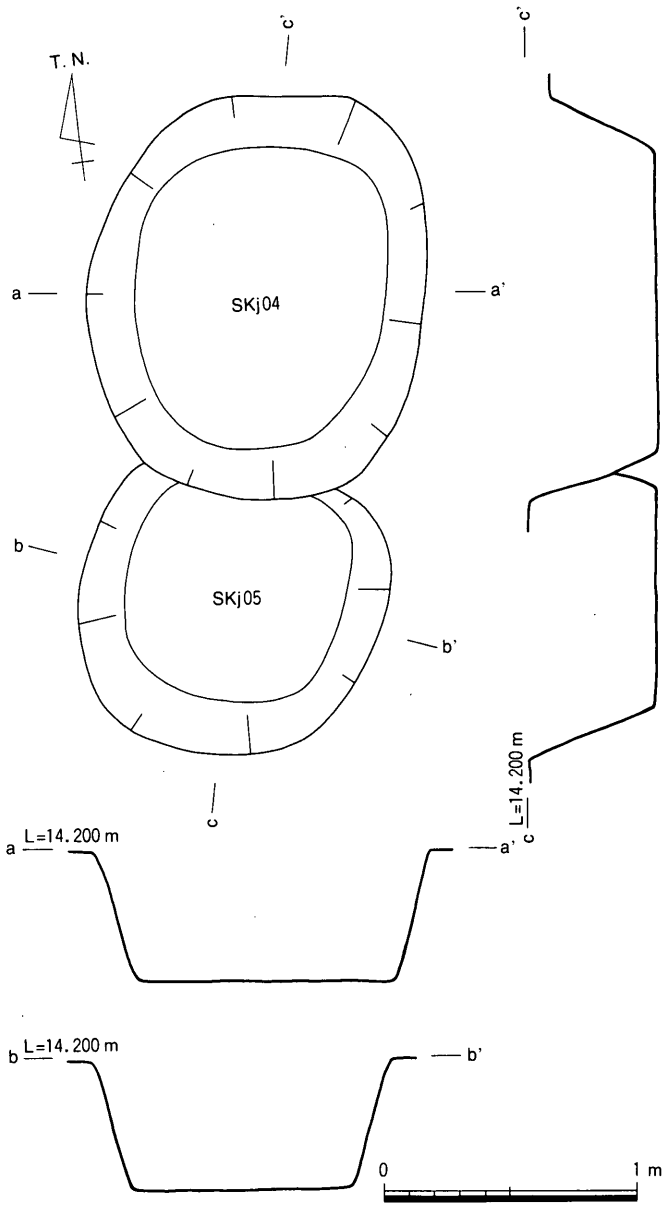
第30図　SKj01平・断面図



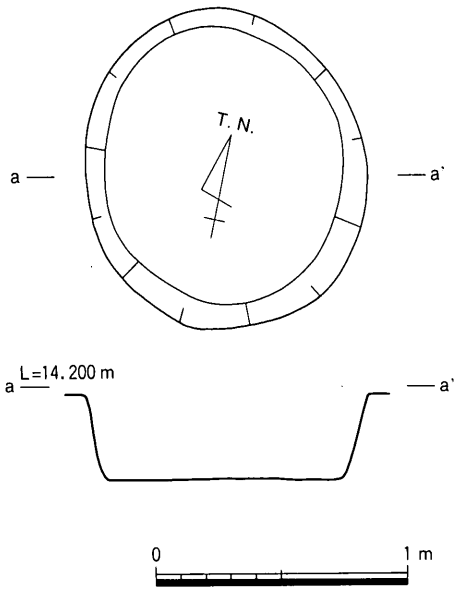
第31図　SKj02平・断面図



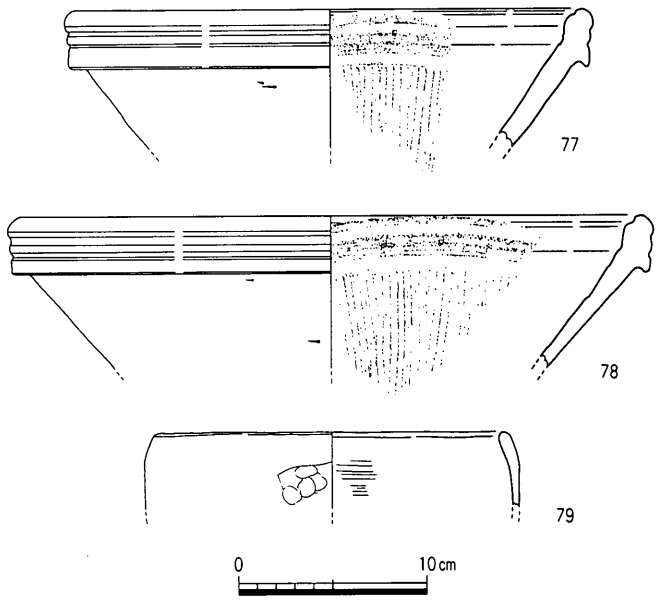
第32図　SKj03平・断面図



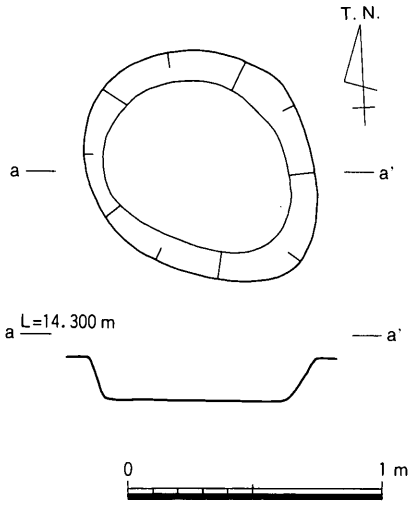
第33図　SKj04・05平・断面図



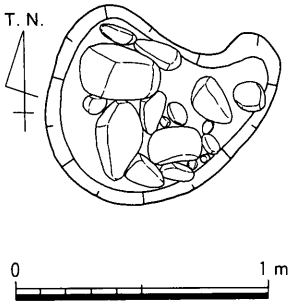
第34図　SKj06平・断面図



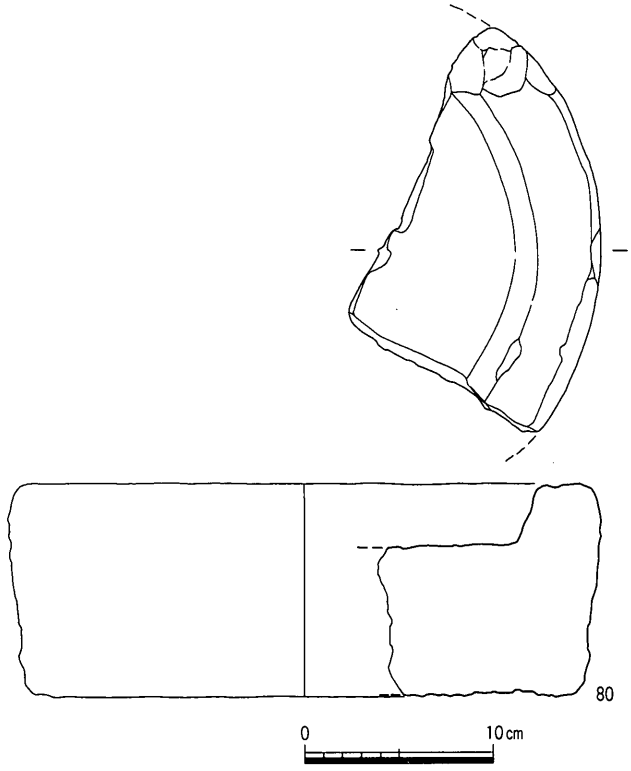
第35図　SKj06出土遺物実測図



第36図　SKj07平・断面図



第37図　SKj08平面図



第38図　SKj08出土遺物実測図

さは0.17mを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj08（第37図）

SKj08は第Ⅰ調査区北部で検出した掘立柱建物SBj01・02に伴う土坑である。平面形態は歪な円形で，規模は天幅0.78mを計る。土坑内からは5～30cm程度の川原石と石臼が出土している。埋土は白灰色粘質土の単層である。

80は角礫凝灰岩製の石臼である（第38図）。

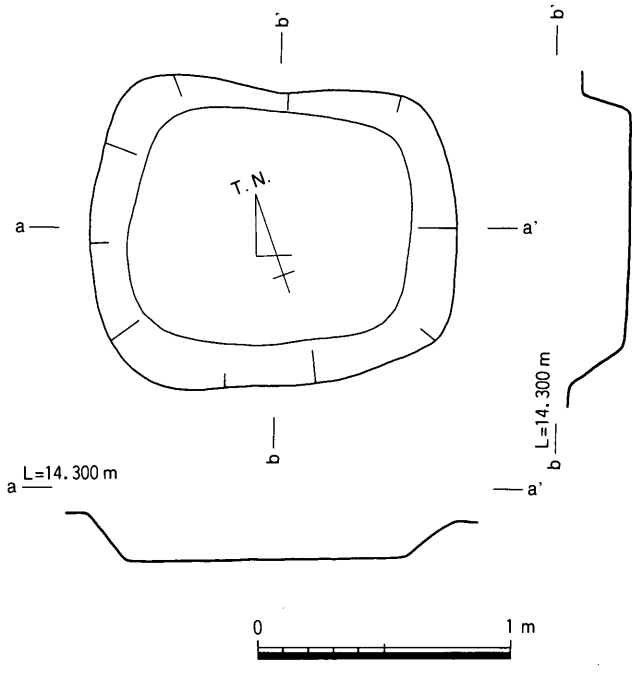
時期を決定する遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土及び石臼から近世と考えると，掘立柱建物と同時期になる。

SKj09（第39図）

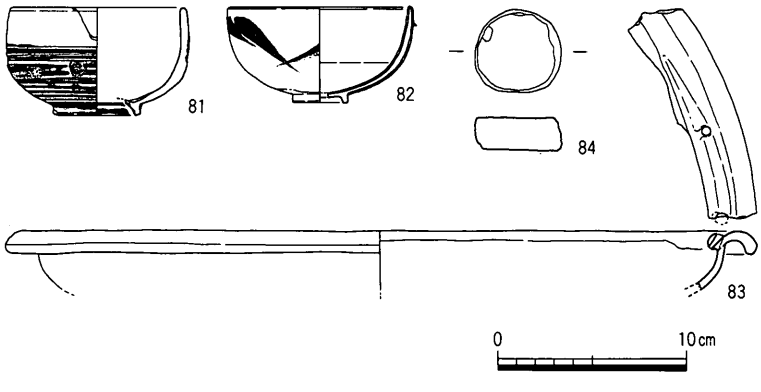
SKj09は第Ⅰ調査区北部で検出した井戸SEj01に隣接して検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し，規模は長辺1.45m，短辺1.11m，検出面からの深さは約0.24mを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

土坑内から陶器碗などが出土している（第40図－81～84）。81は瀬戸焼の所謂「こしさび」碗である。体部内面及び外面上半に灰釉が，下半に鉄釉が掛かっている。18世紀末から19世紀前半のものである。82は京焼風陶器碗である。やや小さい高台から体部は内彎しながら上方に延びる。全面に淡い緑味を帯びた透明釉が掛かり，体部外面には緑・赤色の呉須で笹葉を描いている。同様な遺物が隣接する井戸SEj01から出土していることから同時期に併存していたことが判る。83は土師質焙烙である。内彎する体部から口縁部は外反しながらほぼ水平に延びる。口縁部内面に上方からの穿孔が2箇所セットで認められる。84は瓦を転用した円板状土製品である。

時期は瀬戸焼碗から18世紀末から19世紀前半と思われる。



第39図　SKj09平・断面図

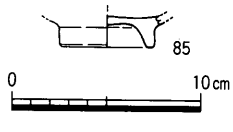


第40図　SKj09出土遺物実測図

SKj10（第42図）

SKj10は第Ⅰ調査区北部で検出した。平面形態は隅丸長方形で，規模は長辺が1.18m，短辺が0.66m，検出面からの深さは0.15mを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

土坑内から京焼風陶器碗が出土している（第41図－85）。



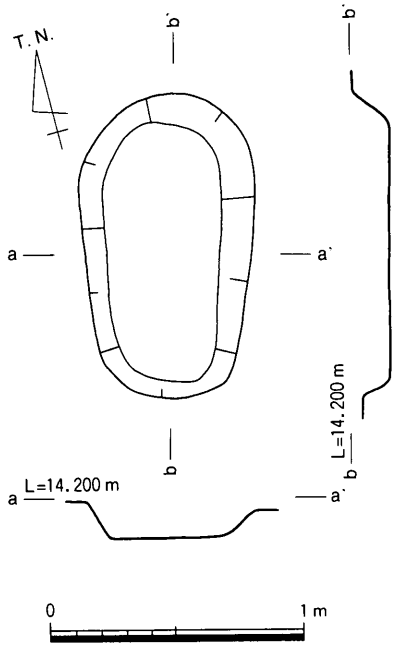
第41図　SKj10出土遺物実測図

時期は京焼風陶器碗から18世紀末から19世紀前半と思われる。

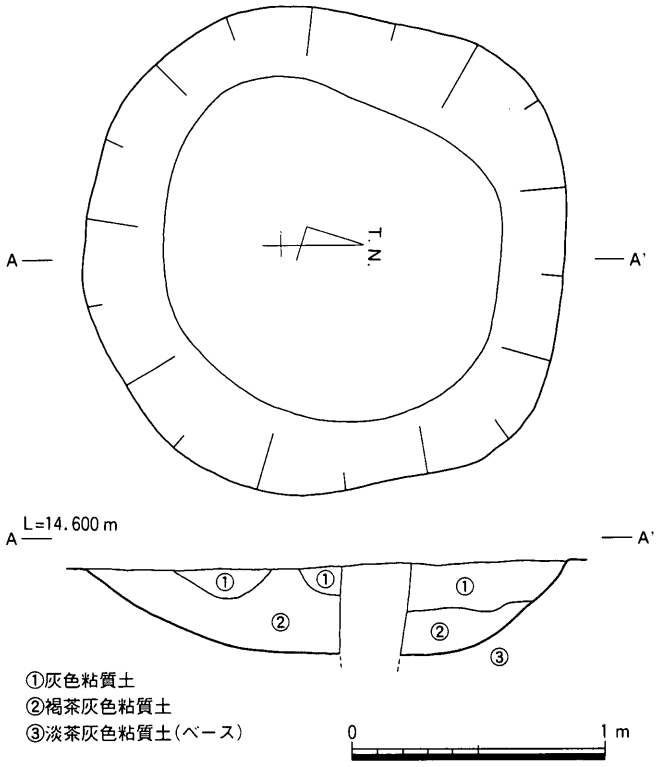
SKj11（第43図）

SKj11は第Ⅰ調査区北部で検出した。平面形態は不正円形で，規模は天幅が1.91ｍで，検出面からの深さは0.38ｍを計る。埋土は灰色を主とした上下２層の堆積が確認できる。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。



第42図　SKj10平・断面図



第43図　SKj11平・断面図

SKj12（第44図）

SKj12は第Ⅰ調査区北部で検出した。平面形態はほぼ円形で，北部に浅い円形の張り出し部がある。規模は天幅が1.39ｍで，検出面からの深さは0.44ｍを計る。土坑内やや南寄りに集石が確認できる。

土坑内から肥前系陶胎染付が出土している（第45図－86）。

口縁部外面に袈裟襷文が，体部外面に山松文が描かれている。高台畳付以外にやや青味を帯びた透明釉が掛かっており，貫入が著しい。呉須の発色は良い。

時期は，出土遺物から18世紀末から19世紀前半と思われる。

SKj13（第46図）

SKj13は第Ⅰ調査区北部で検出した。平面形態は歪な円形で，規模は天幅1.62ｍを計り，検出面からの深さは0.23ｍを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

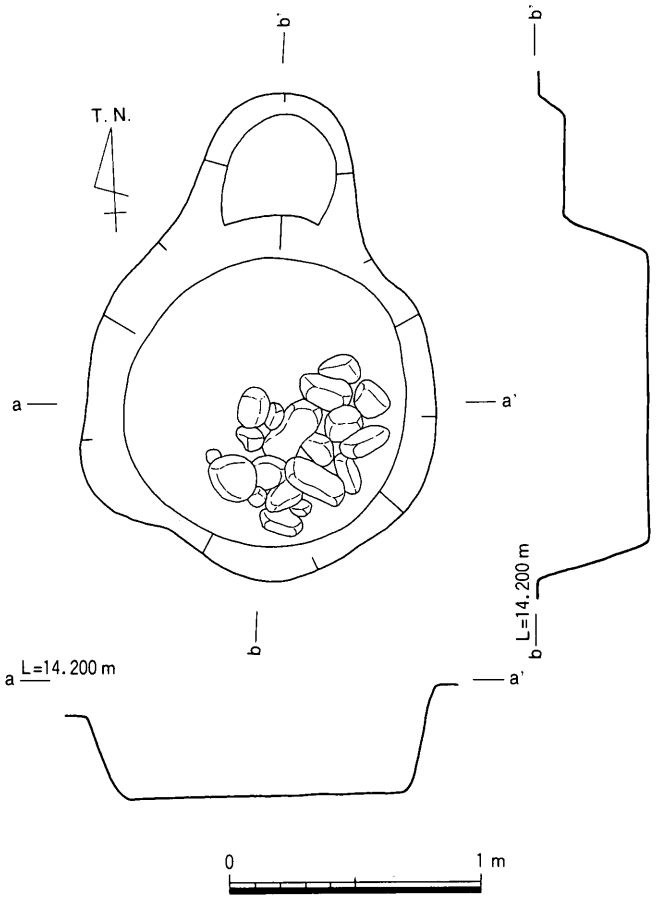
土坑内から陶器鉢が出土している（第47図－87）。

遺物があまり出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

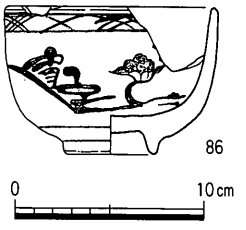
SKj14（第48図）

SKj14は第Ⅱ調査区北部で，全調査区のほぼ中央で検出した。平面形態は歪な円形で，天幅1.32ｍ，検出面からの深さは約0.30ｍを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

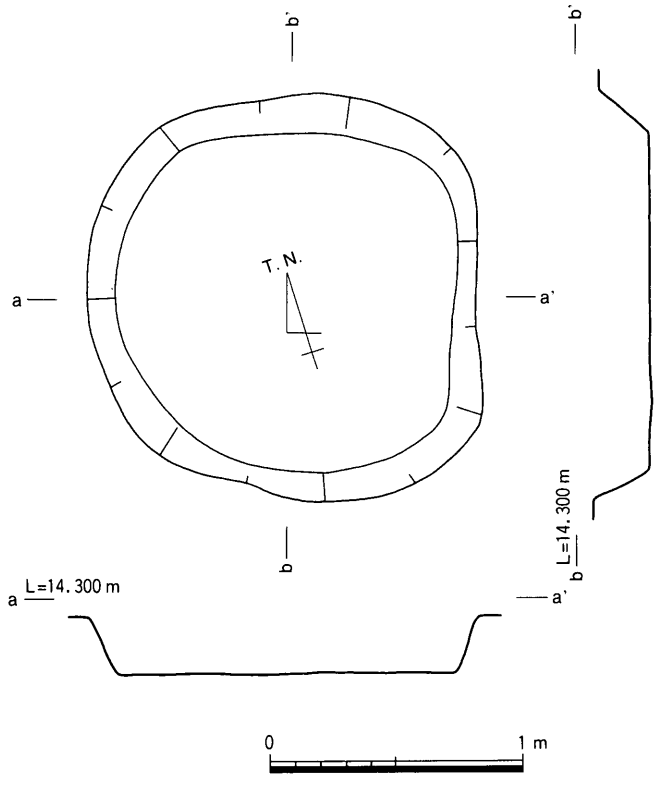
土坑内から中世及び近世の遺物が出土している（第49図－88～96）。



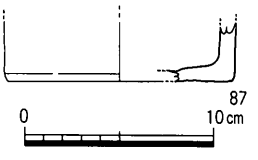
第44図　SKj12平・断面図



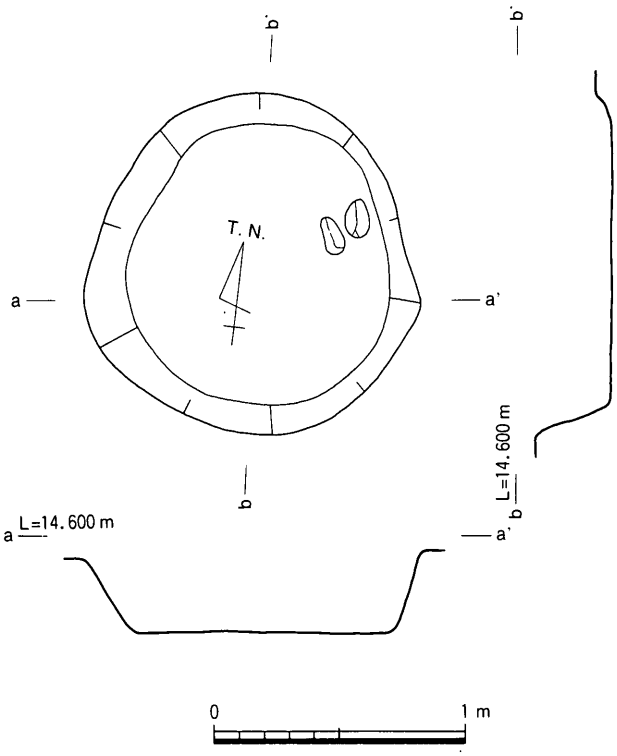
第45図　SKj12出土遺物実測図



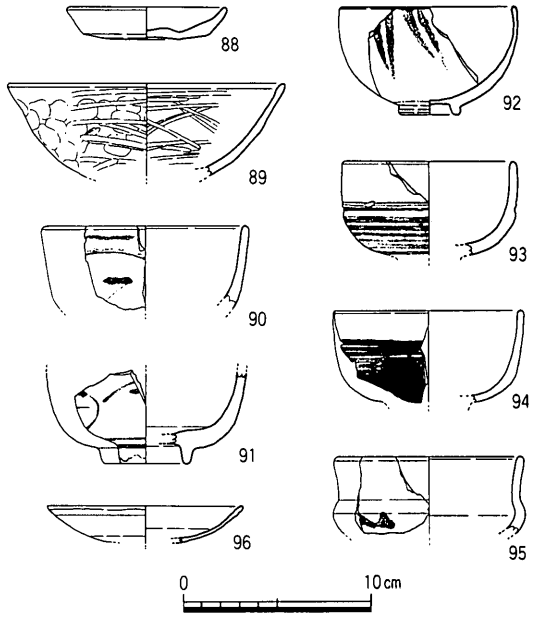
第46図　SKj13平・断面図



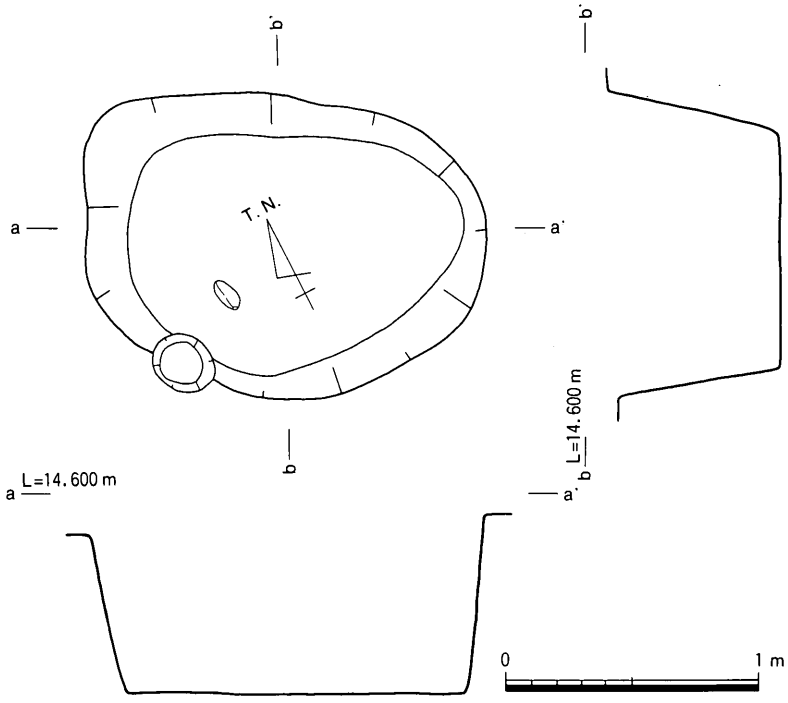
第47図　SKj13出土遺物実測図



第48図　SKj14平・断面図



第49図　SKj14出土遺物実測図



第50図　SKj15平・断面図

88は土師器小皿である。底部はヘラ切り，体部は横ナデされている。89は瓦器椀である。90・91は肥前系陶胎染付である。体部外面には草花文が描かれている。高台畳付以外にやや青味を帯びた透明釉が掛かっており，貫入が著しい。呉須の発色は良い。92は京焼風陶器碗である。高台以外に薄く透明釉が掛かっており，その後緑と赤に発色した模様が描かれている。93～95は「こしさび」あるいは「掛け分け碗」と呼ばれる瀬戸焼碗である。93・94は体部外面下半に茶色の鉄釉が掛かり，それ以外はやや緑味を帯びた透明釉が掛かっている。95は前面に黒色の鉄釉が掛かっている。96は陶器灯明皿である。外面は口縁部付近までヘラ削りされ，内面には塗土が認められる。

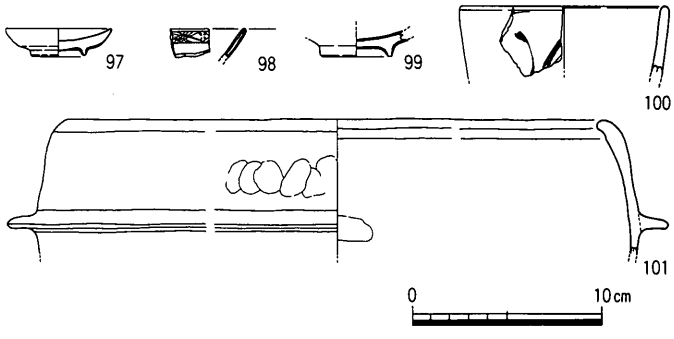
時期は瀬戸焼碗から18世紀末から19世紀前半と思われる。

SKj15（第50図）

SKj15は第Ⅱ調査区北部で，全調査区のほぼ中央で検出した。平面形態は不正円形で，天幅1.22m，検出面からの深さは約0.70mを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

土坑内から陶器・瓦質土器が出土している（第51図－97～101）。

97は白磁皿である。高台畳付以外にやや青味を帯びた透明釉が掛かっている。98は染付磁器碗である。口縁部内面に四方袈裟襷文が描かれている。99は瀬戸焼碗である。内面に緑味を帯びた透明釉が，外面に焦茶色の鉄釉が掛かっている。100は肥前系陶胎染付である。やや青味を帯びた透明釉が掛かり，全体に貫入が著しい。呉須の発色はやや悪い。101は瓦質羽釜である。



第51図　SKj15出土遺物実測図

時期は出土遺物から18世紀末から19世紀前半と思われる。

SKj16（第53図）

SKj16は第Ⅱ調査区北部で，全調査区のほぼ中央で検出した。西部でSDj01によって削られているため，平面形態は不明である。規模は天幅約1.79m，検出面からの深さは約0.33mを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj17（第54図）

SKj17は第Ⅱ調査区北部で，全調査区のほぼ中央で検出した。平面形態は円形で，天幅1.55m，検出面からの深さは約0.59mを計る。埋土は灰色粘質土を基本とし，白茶色粘質土やこげ茶灰色粘質土を基調とするブロックが混じる層である。

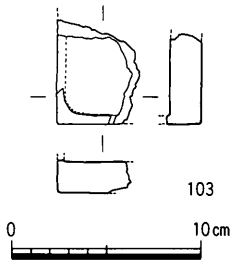
土坑内から肥前系磁器が出土している（第55図－102）。

高台畳付以外に透明釉が掛かり，内面見込み部分は蛇の目釉剥されている。

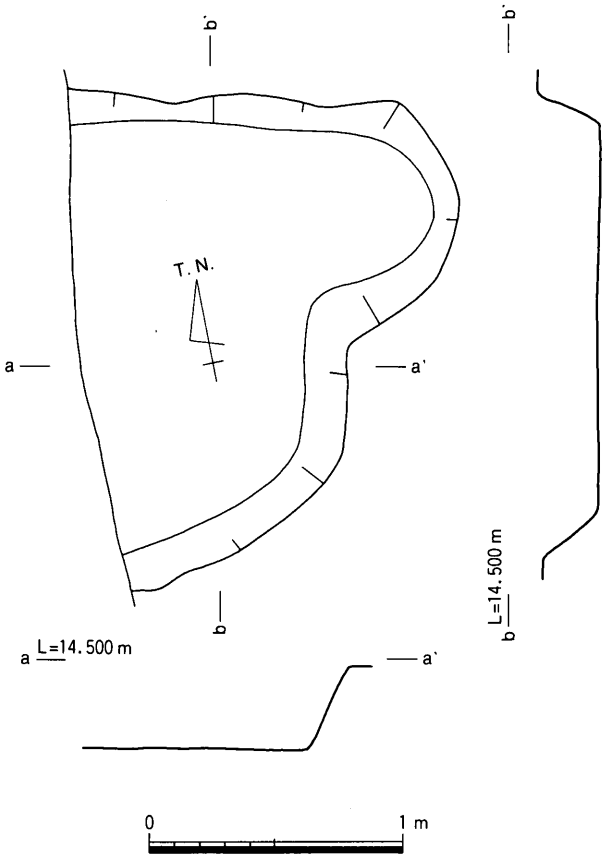
時期は埋土及び出土遺物から近世と思われる。

SKj18（第56図）

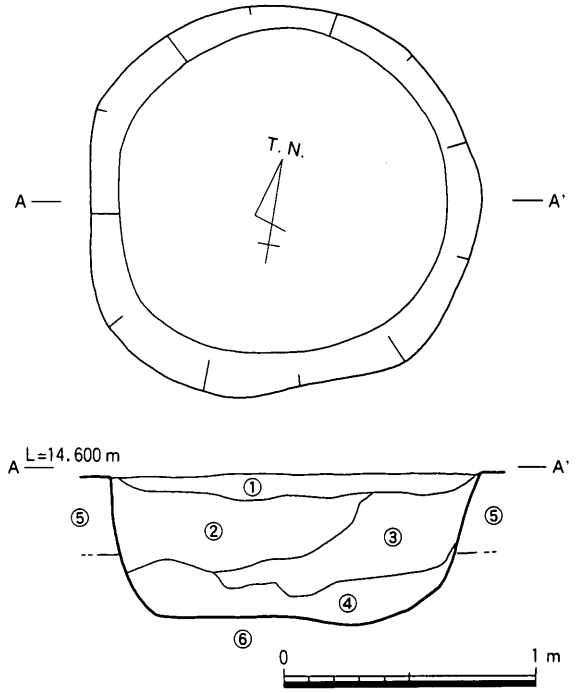
SKj18は第Ⅱ調査区北東部，全調査区のほぼ中央西部で検出した。平面形態は方形で，一辺0.97m，検出面からの深さは約0.34mを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。



第52図　SKj18出土遺物実測図

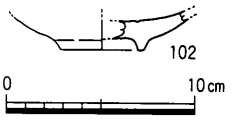


第53図　SKj16平・断面図

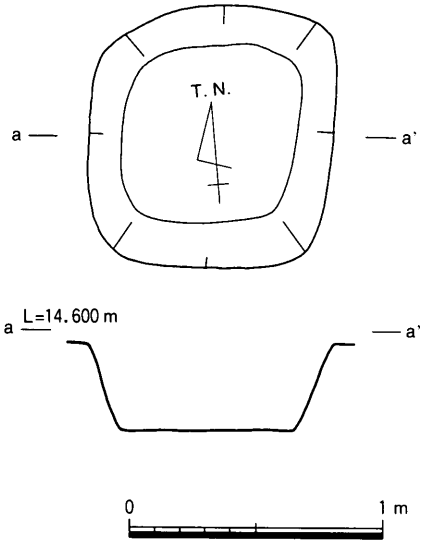


①灰色粘質土(白茶色粘質土のブロックを含む)
②　〃　(淡白茶色粘質土のブロックと暗こげ茶灰色粘質土のブロックを多量に含む)
③　〃　(淡白茶色粘質土のブロックと暗こげ茶灰色粘質土のブロックを少量含む)
④　〃　(濁白茶色粘質土のブロックを含む)
⑤灰色砂礫(砂1mm以下、礫2～5cm、ベース)
⑥茶灰色砂礫(砂1mm以下、礫5～10cm、ベース)

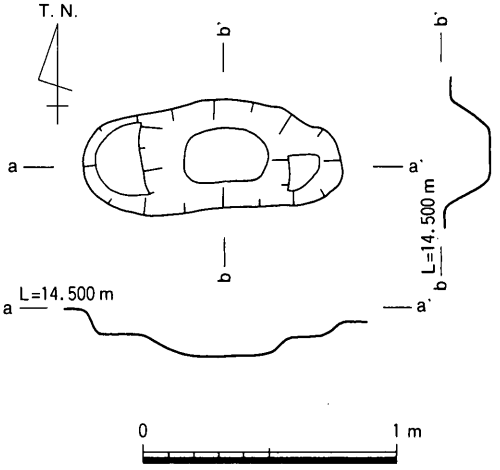
第54図　SKj17平・断面図



第55図　SKj17出土遺物実測図



第56図　SKj18平・断面図



第57図　SKj19平・断面図

土坑内から粘板岩製の硯が出土している（第52図－103）。

遺物があまり出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj19（第57図）

SKj19は第Ⅱ調査区東部で検出した。平面形態は楕円形で，中央が凹み，２段掘の掘方を持つ。規模は長幅が1.02ｍ，短幅が0.42ｍを計り，検出面からの深さは0.18ｍを計る。

遺物が出土していないため明確な時期は不明である。

SKj20（第58図）

SKj20は第Ⅱ調査区南東部で検出した。平面形態は方形で，規模は一辺0.74ｍ，検出面からの深さは0.16ｍを計る。

土坑内から少量・小片ではあるが黒色土器椀が出土しており，埋土も近世のものと違い暗灰色を呈していることから，時期は掘立柱建物SBj09と同時期の12世紀頃と考えられる。

SKj21（第59図）

SKj21は第Ⅱ調査区南部で検出した。平面形態は隅丸長方形で，規模は長辺2.04ｍ，短辺0.61ｍ，検出面からの深さは0.30ｍを計る。埋土は暗灰茶色粘質土の単層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明である。

SKj22（第60図）

SKj22は第Ⅱ調査区南東部隅で検出した。平面形態は円形で，規模は天幅0.91ｍ，検出面からの深さは0.49ｍを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

SKj23（第61図）

SKj23は第Ⅱ調査区南部で検出した。平面形態は円形で，規模は天幅0.98ｍ，検出面からの深さは0.08ｍを計る。埋土は白灰色粘質土の単層である。

遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが，埋土から近世と考えられる。

４．溝状遺構

当調査区で溝状遺構は11条検出した。しかし，そのほとんどがかなり削平を受けており，残りの悪いものである。また，溝状遺構にしたものの中には土層断面がレンズ状を呈しておらず，やや歪な断面を呈しているもの（SDj07・09）や，やや長い土坑状を呈するものも含んでいる。

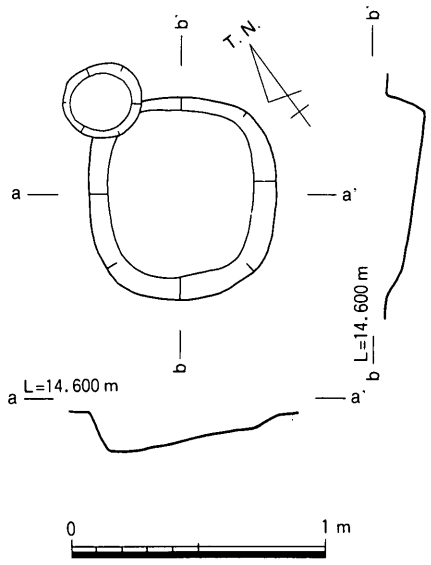
ここでは確実に溝状遺構となるもの（SDj01・04・05・08・10）について報告する。

SDj01（第11図）

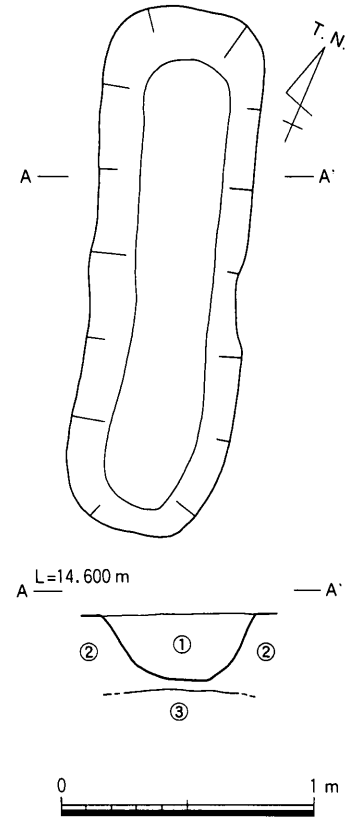
SDj01は第Ⅰ調査区を斜めに横切るように検出した。規模は天幅約3.82ｍ，最深部約0.70ｍを計る。この溝は平成３年度四国工業技術研究所の調査で検出した掘立柱建物群を区画する溝の一部で，その東辺南北溝に当たる。今回の調査でほぼ区画溝の全容が確認でき，従来から言われていた区画溝の東西幅約130ｍ，南北幅約110ｍが再確認できたことになる。また，SDj01の西部（区画内）で掘立柱建物などの遺構を検出したことにより，ほぼ区画内の建物配置も明らかとなった。

流路は真北から約10.0°東偏するもので，ほぼ現在高松平野に残る方格地割に合致する。

溝の断面はレンズ状を呈しており，堆積は上層に暗灰色粘質土を基本とする埋土で，濁灰黄色砂質土層の間層を挟み，下層の濁黄色砂層を基本とする土層となる（第62図）。上層の下部には水際に繁殖す

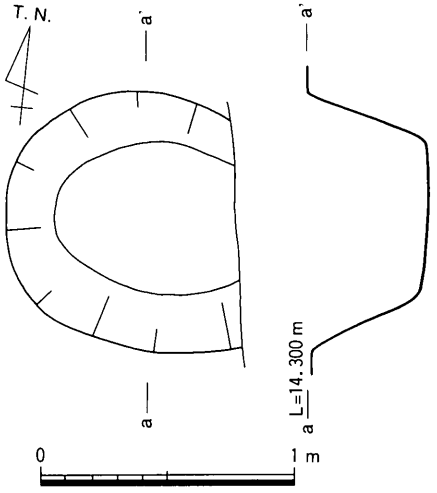


第58図　SKj20平・断面図

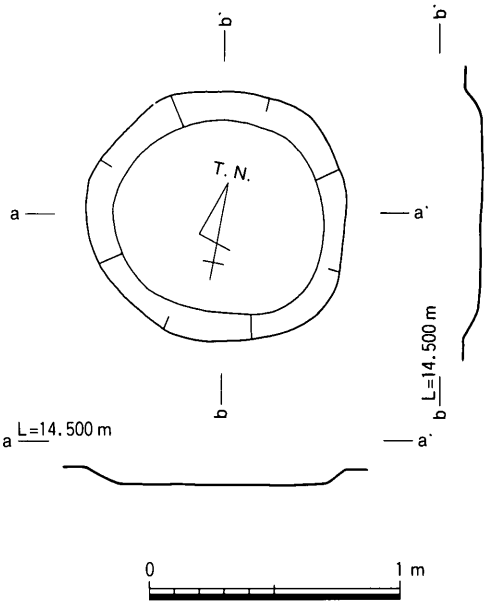


①こげ茶黒色粘質土
②灰黄色粘質土(ベース)
③濁白灰色砂礫(砂1mm以下、礫1cm以下、ベース)

第59図　SKj21平・断面図



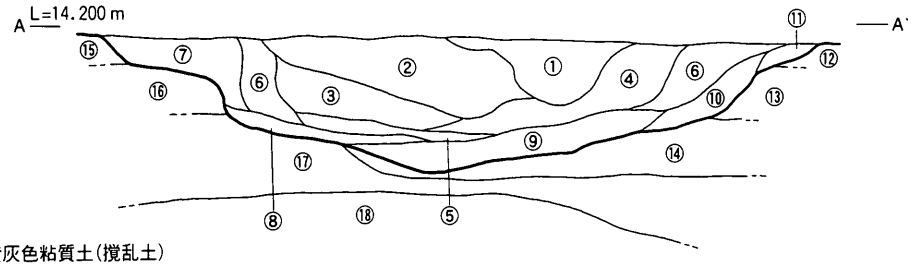
第60図　SKj22平・断面図



第61図　SKj23平・断面図

る草状のものがかなり堆積しており，上層は短期間に埋没したものと考える。

遺物は上層から下層にかけて多量に出土した（第64図）。そのほとんどは近・現代を中心とするもので，僅かに近世の遺物が混じる。報告するのは近世のものについてで，近・現代の遺物についてはその一部を写真のみの掲載とした。



①暗黄灰色粘質土(撹乱土)
②暗灰色砂質土と濁黄色砂質土の混った土
③暗灰色粘質土
④　〃　（1cm程度の礫を含む）
⑤濁灰黄色砂質土
⑥緑灰色粘質土
⑦黄灰色粘質土
⑧暗灰色粘質土
⑨濁黄白色砂
⑩灰色砂（4～10cm程度の礫を含む）
⑪暗白色粘質土（4～10cm程度の礫を含む）
⑫灰色粘質土（4～10cm程度の礫を多量に含む，ベース）
⑬暗灰色砂礫（0.2～5cm程度の砂礫，ベース）
⑭灰黒色砂（1mm以下，ベース）
⑮明灰茶色粘質土（ベース）
⑯⑬と同じ
⑰暗青灰色砂（1mm以下，ベース）
⑱青灰色砂（1mm以下，ベース）

0　1m

第62図　SDj01土層断面図

104～106は肥前系染付である。104は皿で，体部内外面に草花文が，内面見込み部分に五弁花文が描かれている。105は碗で，内面見込み部分は蛇の目釉剥されている。106は二重編目文の碗である。107は肥前系陶胎染付碗である。高台畳付以外に濁白色を帯びた透明釉が掛かっており，全面貫入が著しい。108～110は陶器擂鉢である。全て体部外面にはヘラ削りが施され，内面は条溝が密に施されている。110は体部内面の条溝が見込み部に及んでなく，見込み部には「ウールマーク」状に条溝が施されている。111・112は銅製のキセルである。111は吸い口部と煙部を竹製の煙管で繋いだものである。112は吸い口部から雁首にかけて一体成形のもので，側面に接合痕が認められる。113は粘板岩製の硯である。僅かに右半分と上端海部が残る。114は砂岩製の砥石で，一部しか残っていないが，欠損部を除く四面に使用面が確認できる。115は砂岩製の叩き石である。上下端に敲打痕が確認でき，また側面には砥石として使用した痕跡が使用面として残る。二次的に加熱されており，赤変している。116は凝灰岩製の石臼である。ほぼ中央に芯受けの孔があり，上面に8分割の溝が確認できる。117はサヌカイト製のスクレイパーである。表面はかなり風化して白色に近い。

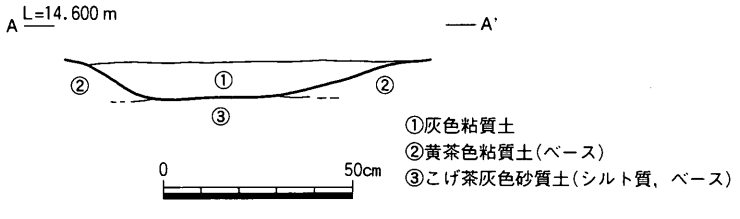
時期は最終埋没が近・現代で，出土遺物から遡れる時期は近世頃である。

SDj04（第11図）

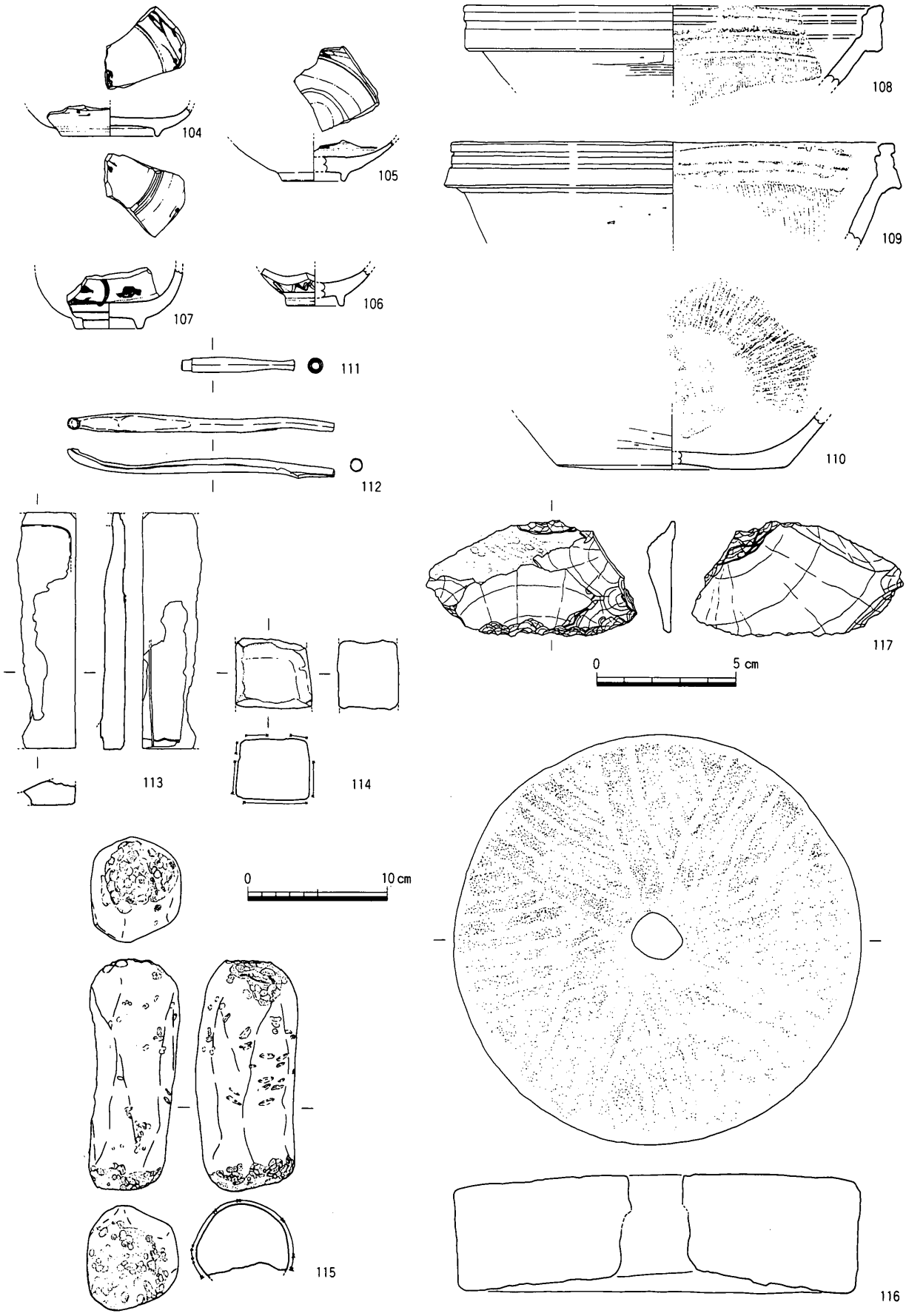
SDj04はSDj01の東側で近接して検出したものである。規模は天幅0.82m，最深部0.10mを計る。流路はほぼSDj01と同じ方向で，並走する。

溝の断面はレンズ状を呈し，削平を受けているため浅い。埋土は単層で，灰色粘質土である。

時期は出土遺物小片及び埋土から18世紀後半～19世紀前半と思われる。



第63図　SDj04土層断面図

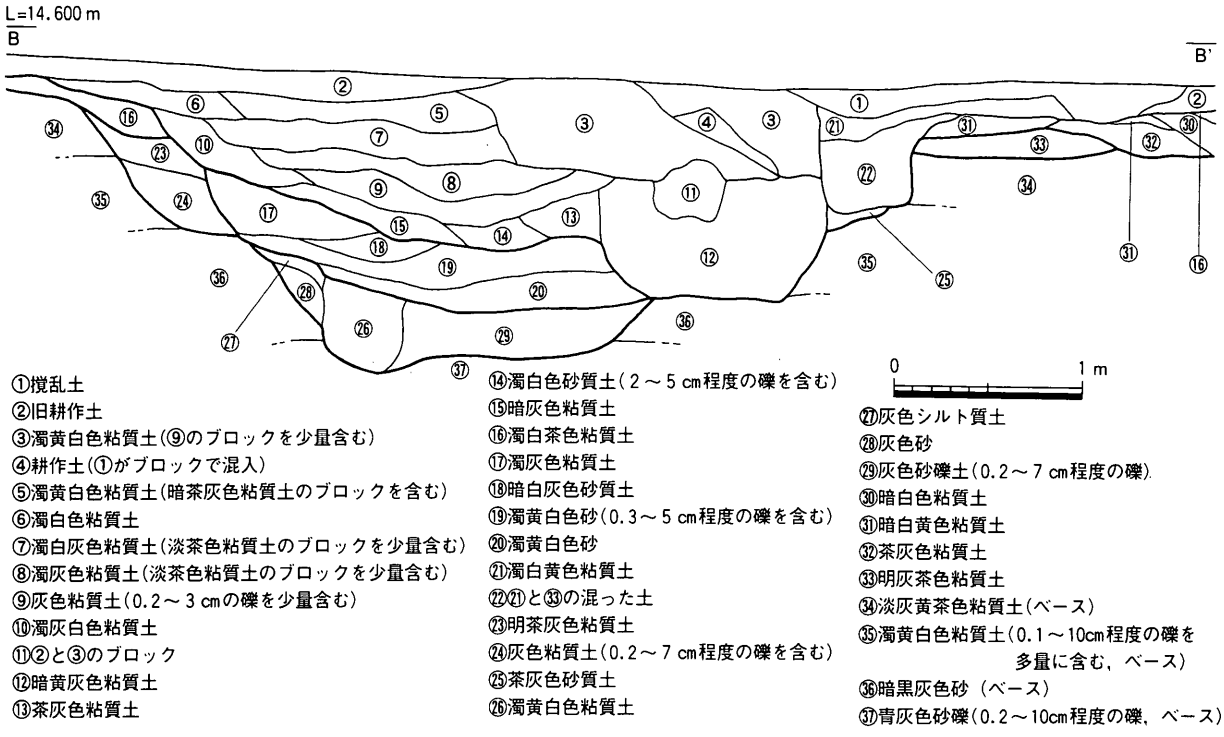


第64図　SDj01出土遺物実測図

SDj05（第11図）

SDj05はSDj01の東側肩部で検出した溝である。規模は天幅(1.55)m，最深部0.16mを計る。おそらくSDj01と同方向に流路を取っていたものが，SDj01に掘削され，その一部が僅かに残っていたものと考えられる。

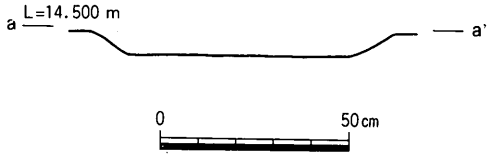
埋土は明灰茶色粘質土で，破片ではあるが中世の遺物が出土している。



第65図　SDj01・05北壁土層断面図

SDj08（第11図）

SDj08は調査区ほぼ中央で，SDj01にほぼ直行するように検出した溝である。規模は天幅0.80m，最深部0.06mを計る。SDj01とはやや間隔を開けて終わっており，その関係は不明である。しかし，埋土からはSDj04とほぼ同じ埋土であることから近世には，SDj04と直行し，繋がっていたものと考えられる。

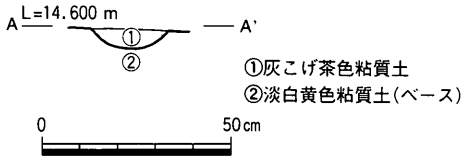


第66図　SDj08断面図

SDj10（第11図）

SDj10は調査区南東部で検出した溝である。規模は天幅0.20m，最深部で0.05mを計るかなり細い溝である。

埋土は暗茶灰色を呈しており，弥生時代の遺構の可能性がある。



第67図　SDj10土層断面図

5．柱穴出土遺物（第68図）

118～137は柱穴出土遺物である。

118はSPj23出土の遺物で，瀬戸焼系の掛け分け碗である。時期は18世紀末から19世紀前半である。

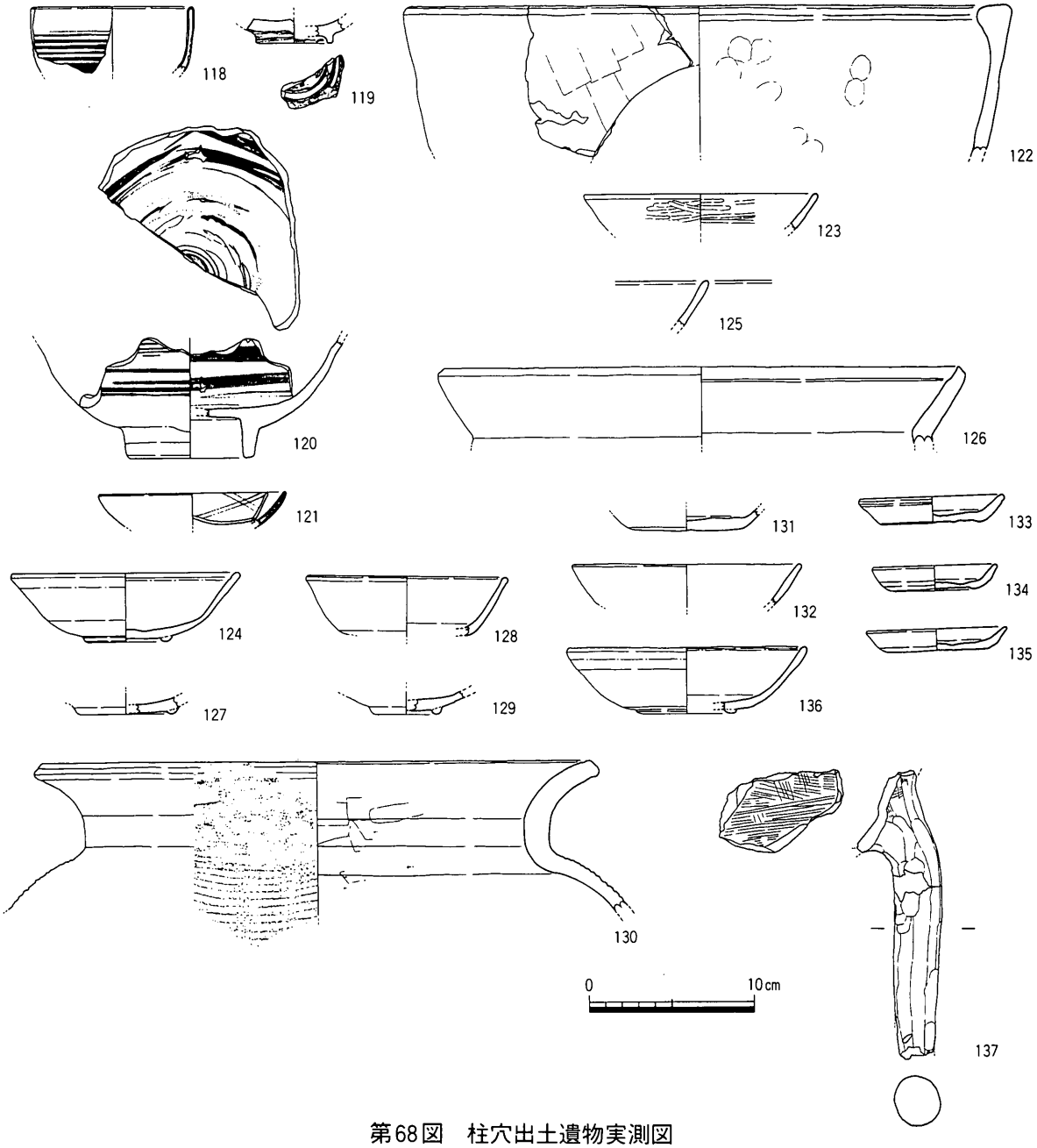
119～122はSPj73出土の遺物である。119は瀬戸焼の掛け分け碗で，内面には緑味を帯びた透明釉が，外面は高台畳み付け以外にこげ茶色の鉄釉が掛かっている。120は唐津刷毛目鉢である。121は

肥前系染付である。口縁内面に斜格子文が描かれている。122は土師質の火鉢と思われる。体部には円状の穴が開いており，やや特異な形態である。体部外面には板状のナデが，内面には僅かに指頭痕が認められる。時期は18世紀末から19世紀前半である。

123はSPj93出土の遺物である。和泉産の瓦器椀で，体部内外面に横方向のヘラ磨きが密に施されている。時期は12世紀前半頃である。

124はSPj101出土の遺物である。十瓶山窯産須恵器椀（瓦質土器椀）で，時期は12世紀末から13世紀初頃である。

125・126はSPj110出土の遺物である。125は内黒の黒色土器椀である。126は土師質甕である。頸部が「く」の字に屈曲し，体部は直線的に延びる長胴の甕と考えられる。時期は12世紀中葉頃と思われる。



第68図　柱穴出土遺物実測図

127はSPj144出土の遺物である。十瓶山窯産須恵器椀（瓦質土器椀）である。時期は13世紀前半頃と思われる。

128・129はSPj155出土遺物である。128は土師器坏である。129は十瓶山窯産須恵器椀（瓦質土器椀）である。時期は13世紀前半頃と思われる。

130はSPj174出土遺物である。十瓶山窯産甕である。体部外面に格子叩きが，内面は指ナデされている。

131・132はSPj179出土の遺物である。131は土師器坏である。底部はヘラ切りされている。132は土師器椀である。時期は13世紀前半頃と思われる。

133はSPj186出土の遺物である。土師器小皿で，底部は糸切りされ，体部は横ナデされている。時期は中世である。

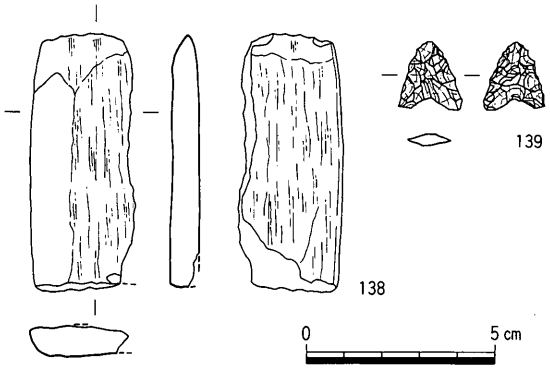
134～136はSPj190出土遺物である。134・135は土師器小皿である。底部は糸切りされ，体部は横ナデされている。136は十瓶山窯産須恵器椀（瓦質土器椀）で，時期は12世紀末から13世紀初頃と思われる。

137はSPj222出土遺物である。土師質土釜Bの脚である。時期は中世と思われる。

6．包含層出土遺物（第69図）

138・139は包含層出土遺物である。

138は結晶片岩製の扁平片刃石斧である。139はサヌカイト製の石鏃である。



第69図　包含層出土遺物実測図

第4節　まとめ

当調査区（Ｊ地区）で検出した遺構は，掘立柱建物10棟，井戸１基，土坑23基，溝状遺構11条，柱穴370個（掘立柱建物を構成する柱穴も含む）で，遺構の密集する部分とやや希薄な部分とに分かれる。

遺構の時期は平安時代末以降のもので，これまでの空港跡地遺跡で確認されている弥生時代から平安時代後期までの遺構は検出されていない。しかし，出土遺物の中には弥生時代の土器片及び石製品が確認されている。

このような検出遺構の状況と当調査区周辺はすでにかなりの面積が調査されているため，遺構の全体像については空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告として随時刊行される予定の『空港跡地遺跡Ⅰ～』の報告書にゆずるとして，ここでは調査区内で検出した遺構を便宜的にⅠ～Ⅲ期（第70図）に分け，各期毎の様相を述べるに止めたい。

Ⅰ期（12世紀後半～13世紀初）

Ⅰ期は平安時代末から鎌倉時代初頃の遺構で，８棟の掘立柱建物を中心として検出している。柱穴出土遺物及び柱穴掘削時期の前後関係からこれらは２時期（Ⅰ－ａ期，Ⅰ－ｂ期）に細分できるが，掘立柱建物の検出状況及び柱穴出土遺物からこれらは継続する住居群としてとらえられる。

時期は前者が12世紀後半で，後者が12世紀末から13世紀初である。

Ⅰ－ａ期の遺構は掘立柱建物４棟と土坑１基である。うち１棟はやや離れ，調査区外（Ⅲ－38区）に延びていることから，ここではまとまりを見せているSBj07・09・10とSKj20について説明する。これら掘立柱建物と土坑は調査区南東部で検出され，東西棟で四面庇を持つ主屋としてのSBj09を中心に北と南に南北棟の掘立柱建物を伴う。南北主軸は現在の高松平野に残る方格地割の方向Ｎ－10°－Ｅより若干東偏するＮ－13°－Ｅをとり，周囲には建物を区画する区画溝を持たない。

Ⅰ－ｂ期の遺構は掘立柱建物４棟と土坑１基，溝状遺構１条である。掘立柱建物はⅠ－ａ期で検出した掘立柱建物群のやや北寄りにまとまって検出され，柱穴出土遺物からみて僅かな時期差のある東西棟で四面庇のSBj06・08を中心に北側に東西棟のSBj04・05を伴う。南北主軸はⅠ－ａ期の方向とほぼ同じで，現在の方格地割と同方向である。また，この時期には方格地割方向を持つSDj05を伴う。SDj05はSDj01の東側で近接して検出されてもので，北壁の土層からSDj01によって削平されてはいるが，同位置に同方向で存在していたことが判る溝状遺構である。SDj01及びSDj05が同一溝で，いつまで遡るかは今回の調査では判明しなかった。しかし，Ⅰ－ａ期の掘立柱建物もほぼSDj01と同方向を持つことから同時期に存在していた可能性も考えられ，今後周辺の遺構の状況から判断がつくものと思われる。

Ⅰ期の遺構は特に南・西側調査区では検出されておらず，調査区南東部でまとまりを見せていることから，主屋と付属の建物がまとまりを見せる集落形態が12世紀中葉から後半段階で確立していることが判る。そして13世紀前半に平成３年度に調査された東調査区集落に代表されるような集落を区画する溝を持つ集落形態に変わる重要な遺構と考えられる。

Ⅱ期（18世紀後半～19世紀前半）

Ⅱ期の遺構は掘立柱建物２棟，土坑12基，溝状遺構３条である。ほぼ調査区中央にあるSDj01を中心に並走する溝SDj04と調査区中央で直行する溝SDj08があり，SDj01の西側に掘立柱建物と土坑が，東側に近接して井戸・土坑が検出されている。そのなかで井戸SEj01はSDj01の東側で検出しており，同

時期の遺構が近接して検出されていないことや石組み内最下層で竹製の茶杓が出土していることから，今後この井戸の使用目的が問題となろう。

近世の遺構は，調査区周辺の調査で多数検出しているため全体像は後の報告書にゆずることとしたい。

Ⅲ期（19世紀中葉以降）

Ⅲ期の遺構は溝１条のみである。この溝は現在の方格地割と合致し，周囲に同時期の遺構が確認されていないことから近世以降には水田用用水路として機能していたことが判る。

この溝が掘削された時期は，今回の調査では近世まで遡ることは確認できたが，どこまで遡るかは不明のままである。しかし，12世紀段階の溝SDj05がSDj01に削平されていることや同方向に流路を持つことから，SDj05がSDj01と同一の溝でこの段階まで遡らせることは可能であると考える。最終埋没時期は周辺の調査で，昭和19年と考えられている。

第70図　空港跡地遺跡　J地区遺構変遷図

第2表　遺構観察表

遺構一覧表(SD)

SD	規模(m)		出土遺物	時期	挿図番号	図版番号
	天幅	深さ				
01	3.82	0.70	染付，陶胎染付，陶器擂鉢，ガラスなど	近世～近代	第62・65図	図版6－(1)・(2)
02	0.50	0.21				
03	0.35	0.06				
04	0.82	0.10	陶器擂鉢，染付，陶胎染付，瓦質土鍋	18世紀後半～19世紀前半	第63図	図版12－(1)
05	(1.55)	0.16	土師質土器，土師質土釜，須恵器	中世	第65図	
06	0.80	0.20				
07	1.02	0.32				
08	0.80	0.06	陶胎染付椀，陶器	近世	第66図	
09	0.70	0.47				
10	0.20	0.05			第67図	
11	0.50	0.03				

遺構一覧表(SB)

SB	規模(m)		出土遺物	南北主軸	時期	挿図番号	図版番号
	梁間	桁行					
01	1間 3.25 m	3間 6.98 m		N－5.0°－E	近世	第12図	図版3－(2)
02	1間 3.34 m	3間 5.94 m		N－1.5°－E	近世	第13図	
03	2間 3.98 m	(2)間 (3.30 m)	黒色土器A類椀	N－11.5°－E	12世紀 中葉	第15図	
04	2間 3.67 m	2間 4.59 m	黒色土器B類椀	N－11.0°－E	12世紀	第16図	図版7－(2) 図版8－(2)
05	(1)間 (4.76 m)	(3)間 (7.07 m)		N－10.0°－E		第17図	図版7－(2) 図版8－(2)
06	1間 3.30 m	3間 6.61 m	土師器小皿，須恵器椀	N－8.0°－E	12世紀 末	第20図	
07	1間 3.28 m	3間 5.26 m	土師器小皿・高台付小皿・椀，黒色土器椀，瓦器椀	N－13.0°－E	12世紀 中葉	第21図	図版7－(2) 図版8－(2) 図版9－(1)
08	1間 3.62 m	3間 6.77 m	土師器小皿・坏・椀，青磁碗，瓦質こね鉢，砥石	N－10.0°－E	13世紀 前半	第22図	図版7－(2) 図版8－(2) 図版9－(1)
09	1間 4.02 m	3間 6.95 m	土師器小皿・椀，黒色土器椀，瓦器椀，土師質土鍋，砥石	N－9.3°－E	12世紀 中葉	第23図	図版7－(2) 図版8－(2) 図版9－(2)
10	1間 2.47 m	(3)間 (5.19 m)		N－13.5°－E		第26図	

遺構一覧表(SK)

SK	平面形	規模(m)		出土遺物	時期	挿図番号	図版番号
		天幅	深さ				
01	隅丸長方形	1.76	0.08		近世	第30図	
02	不正円形	1.14	0.14		近世	第31図	
03	隅丸方形	1.32	0.42	染付，陶器灯明皿	近世	第32図	
04	楕円形	1.34	0.52		近世	第33図	
05	円形	1.20	0.52		近世	第33図	
06	円形	1.11	0.33	瓦質羽釜，明石産擂鉢，瓦	18世紀末～19世紀前半	第34図	
07	不正円形	0.90	0.17	土師器	近世	第36図	
08	不正円形	0.78		土師質土器，擂鉢，石臼	近世	第37図	図版5－(1)
09	隅丸長方形	長 1.45 短 1.11	0.24	瓦質土鍋･土釜，擂鉢，陶器，染付，円盤状土製品	18世紀末～19世紀前半	第39図	
10	隅丸長方形	長 1.18 短 0.66	0.15	京焼風陶器，唐津刷毛目皿，土師質土器	18世紀末～19世紀前半	第42図	
11	不正円形	1.91	0.38	磁器，唐津刷毛目皿，土師質土器	近世	第43図	
12	不正円形	1.39	0.44	陶胎染付，土師質土器，陶器	18世紀末～19世紀前半	第44図	図版5－(2)
13	不正円形	1.62	0.23	備前焼鉢，染付皿，土師質土器	近世	第46図	
14	不正円形	1.32	0.30	土師器，瓦器，陶器，土師質土器，染付，瓦	18世紀末～19世紀前半	第48図	
15	不正円形	1.22	0.70	瓦質土釜，土師質土器，陶胎染付，陶器，擂鉢，磁器	18世紀末～19世紀前半	第50図	
16	不正形	1.79	0.33	土師質土器，土師器，須恵器	近世	第53図	
17	円形	1.55	0.59	磁器碗	近世	第54図	図版11－(1)
18	方形	0.97	0.34	染付皿，硯	近世	第56図	
19	楕円形	長 1.02 短 0.42	0.18			第57図	
20	方形	0.74	0.16	黒色土器	12世紀	第58図	
21	隅丸長方形	長 2.04 短 0.61	0.30			第59図	図版11－(2)
22	円形	0.91	0.49	土師質土器	近世	第60図	
23	円形	0.98	0.08		近世	第61図	

第3表　出土遺物観察表

SBj03

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
1	14		黒色土器　椀	15.8			横ナデ・指頭痕・ヘラ磨き	横ナデ・ヘラ磨き	A類	普通	外：浅黄橙10YR 8/3　内：黒2.5Y 2/1	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石を含む	口径1/8

SBj04

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
2	16		黒色土器　椀				横ナデ	横ナデ	B類　口縁端部内面に沈線	普通	黒2/	0.1～1㎜の砂粒を少量含む　石英・長石含む	破片

SBj06

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
3	18		須恵器　椀	12.8			横ナデ	横ナデ後板ナデ	十瓶山窯産(瓦質土器)	普通	灰白10Y 7/1	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	破片
4	18		土師器　小皿	8.0	1.3	5.5	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ		普通	にぶい橙7.5YR 7/4	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石を含む	口径1/8

SBj07

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
5	19	13	土師器　小皿	8.4	1.2	6.4	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ		普通	灰白2.5Y 8/2	0.1～1㎜の砂粒を少量含む	口径5/8
6	19	14	土師器　高台付小皿	8.2	2.2	4.9	横ナデ	横ナデ	托状	普通	淡黄2.5Y 8/3	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英含む	底径8/8
7	19	13	土師器　椀	14.4			横ナデ	横ナデ		普通	浅黄橙7.5YR 8/4	0.1～1㎜の砂粒を含む 金雲母含む	口径1/8
8	19	13	黒色土器　椀	14.2			横ナデ・ヘラ磨き	ヘラ磨き	A類	普通	外：灰白2.5Y 8/2 内：黒2/	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	破片
9	19	13	瓦器　椀	15.4	5.3	6.6	横ナデ・指頭痕後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	和泉型	普通	灰6/	0.1～2㎜の砂粒を少量含む　石英含む	口径2/8 底径4/8
10	19	13	瓦器　椀	15.6	5.1	6.1	横ナデ・指頭痕後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	和泉型	普通	灰N 7/	0.1～1㎜の砂粒を少量含む	口径3/8 底径8/8
11	19	13	瓦器　椀			6.6	横ナデ・指頭痕	横ナデ・平行ヘラ磨き	和泉型	普通	外：オリーブ黒7.5Y 3/1　内：浅黄橙10YR 8/3	0.1～1㎜の砂粒を含む	底径2/8

SBj08

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
12	24	15	土師器　小皿	7.0	1.3	5.0	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ		普通	橙5YR 6/6	0.1～1㎜の砂粒を含む	口径2/8
13	24	15	土師器　小皿	8.2	1.5	7.0	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ		普通	橙5YR 6/8	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径1/8
14	24	15	須恵器　小皿	8.7		6.6	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	十瓶山窯産(瓦質土器)	普通	灰白8/	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英含む	口径1/8
15	24	15	土師器　坏	12.2			横ナデ	横ナデ・ヘラ磨き		普通	灰白2.5Y 8/2	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径1/8
16	24	15	土師器　坏	13.8			横ナデ	横ナデ		普通	灰白10YR 8/2	0.1～1㎜の砂粒を多量に含む　石英・長石含む	破片
17	24	15	土師器　椀				横ナデ	横ナデ		普通	黄灰2.5Y 4/1	0.1～1㎜の砂粒を含む	破片
18	24	15	青磁　碗						Ⅰ－5類	良好	灰白8/ 釉：明青灰10BG 7/1 呉須：明緑灰10GY 8/1	精良	破片
19	24	15	須恵器　こね鉢			10.8	指頭痕・横ナデ	指頭痕・横ナデ	十瓶山窯産(瓦質土器)	普通	外：灰白6/ 内：灰白5Y 7/1	0.1～3㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	底径2/8

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	整形・調整の特徴
20	24	14	砥石	15.4	13.2	4.7	1,702.77	砂岩	表・裏・側面に使用痕

SBj09

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
21	25		土師器　小皿	8.3	0.6	6.4	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ・仕上げナデ		普通	灰白2.5Y 8/2	0.1～1㎜の砂粒を少量含む	口径1/8
22	25		土師器　小皿	8.2	1.0	7.4	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ		普通	橙2.5YR 6/6	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	底径2/8
23	25	14	土師器　小皿	8.0	1.5	5.9	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ・仕上げナデ		普通	黄灰2.5Y 5/1	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英含む	8/8

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
24	25		土師質 椀				横ナデ	横ナデ		普通	灰白2.5Y8/2	0.1～1㎜の砂粒を含む	破片
25	25		土師器 椀	13.0			横ナデ	横ナデ・ヘラ磨き		普通	灰白5YR8/2	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	破片
26	25		土師質 椀	14.5			横ナデ	横ナデ		普通	淡黄2.5Y8/2	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英含む	破片
27	25		土師器 椀	15.0			横ナデ	横ナデ		普通	灰白2.5Y8/2	0.1～2㎜の砂粒を含む	口径1/8
28	25	16	黒色土器 椀	13.8			横ナデ後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	A類	普通	外：灰白2.5Y8/2 内：黒2.5Y2/1	0.1～4㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径1/8
29	25	16	黒色土器 椀	14.0			横ナデ後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	A類	普通	外：灰白10YR8/1 内：オリーブ黒5Y2/2	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径1/8
30	25	16	黒色土器 椀	15.8			横ナデ後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	A類	普通	外：灰白2.5Y7/1 内：黒2.5Y2/1	0.1～4㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	破片
31	25	16	黒色土器 椀	17.0			横ナデ・ヘラ削り後ナデ・ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き・ハケ目	A類	普通	外：灰白10YR7/1 内：黒2.5Y2/1	0.1～4㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	破片
32	25	16	黒色土器 椀			5.6	横ナデ・ヘラ削り後ナデ・ヘラ磨き	ヘラ磨き？摩滅	A類	普通	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：黒7.5Y2/1	0.1～4㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	底径8/8
33	25		黒色土器 椀			6.0	横ナデ	ヘラ磨き	A類	普通	外：淡黄2.5Y8/3 内：黒褐色2.5Y3/1	0.1～1㎜の砂粒を少量含む 石英・長石含む	底径2/8
34	25		瓦器 椀	16.5			横ナデ・指頭痕・ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	和泉型	普通	暗青灰5PB3/1	0.1～1㎜の砂粒を少量含む	破片
35	25	14	土師質 土鍋	30.2			横ナデ・指ナデ・指頭痕後ハケ目	横ナデ・板ナデ		普通	暗灰黄2.5Y5/2	0.1～2㎜の砂粒を多量に含む 石英・長石含む	破片
36	25	14	土師質 土鍋	38.4			横ナデ・指頭痕・ハケ目	横ナデ・板ナデ		普通	浅黄2.5Y7/3	0.1～2㎜の砂粒を多量に含む 石英・長石含む	破片

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	整形・調整の特徴
37	25		砥石	14.3	10.3	5.5	1,678.61	砂岩	
38	25	14	砥石	14.5	9.3	11.9	2,574.10	砂岩	欠損部以外4面に使用痕あり

SEj01

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
39	28	17	磁器 小坏	8.0					施釉	良好	灰白8/ 釉：灰白5GY8/1	精良	口径1/8
40	28	17	陶器 碗	9.6					京焼風 施釉(貫入)	良好	灰白10Y8/1 釉：灰白10Y8/2 色絵：緑灰10GY6/1	緻密	口径1/8
41	28	17	陶器 陶胎染付碗	9.4					肥前系 施釉(貫入) 呉須	良好	青灰5PB6/1 釉：明緑灰10GY7/1 呉須：淡藍色	緻密	破片
42	28	17	陶器 鉢	24.0					施釉	良好	赤10R5/6 釉：黒褐7.5YR2/2	0.1～1㎜の砂粒を少量含む	破片
43	28	17	陶器 壺			6.4	横ナデ	横ナデ		良好	外：にぶい赤褐2.5YR4/4、内：青灰5PB6/1	緻密	底径2/8
44	28	17	唐津 刷毛目鉢			7.2			施釉(貫入) 内面に蛇の目釉剥 畳付け部分に重ね焼痕	良好	灰白5Y7/1 釉：暗オリーブ5Y4/3	緻密	底径2/8
45	28	17	唐津 刷毛目鉢			9.8			内面に施釉	良好	赤褐2.5YR4/6 釉：にぶい黄橙10YR7/3	0.1～2㎜の砂粒を少量含む	底径2/8
46	28		陶器 蓋	15.2	1.2	12.4	横ナデ	横ナデ	備前焼か？	良好	明赤褐2.5YR5/6	0.1～3㎜の砂粒を含む 石英・長石を含む	口径1/8
47	28		陶器 灯明皿	9.8			横ナデ・ヘラ削り	横ナデ	内面に塗り土	良好	外：黄灰2.5Y6/1 内(塗り土)：灰黄褐10YR4/2	0.1～0.5㎜の砂粒を少量含む	破片
48	28		陶器 鉢			13.0	横ナデ	横ナデ	備前焼 外面に塗り土	良好	外(塗り土)：にぶい赤褐5YR4/3 内：明赤褐2.5YR5/6	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石を含む	底径2/8
49	28	18	陶器 擂鉢	33.2			横ナデ	横ナデ・擂目	備前焼 口縁部に重ね焼痕	良好	明赤褐2.5YR5/6	0.1～2㎜の砂粒を含む 長石含む	破片
50	28	18	陶器 擂鉢	33.4			横ナデ・ヘラ削り	横ナデ・擂目	堺産又は明石産	良好	赤褐2.5YR4/6	0.1～2㎜の砂粒を少量含む	破片
51	28	18	陶器 擂鉢	35.0			横ナデ・ヘラ削り	横ナデ・擂目	堺産又は明石産	良好	灰褐7.5YR5/2	0.1～2㎜の砂粒を少量含む	破片
52	28	18	陶器 擂鉢	33.6			横ナデ・ヘラ削り	横ナデ・擂目	堺産又は明石産	良好	灰赤2.5YR4/2	0.1～5㎜の砂粒を含む	破片
53	28	18	陶器 擂鉢			18.0	横ナデ・ヘラ削り	横ナデ・擂目	堺産	良好	明赤褐2.5YR5/6	0.1～3㎜の砂粒を含む	底径1/8
54	28	18	陶器 擂鉢			15.4	横ナデ・ヘラ削り	擂目	明石産 底部に重ね焼痕	良好	褐灰7.5YR5/1	0.1～3㎜の砂粒を多量に含む	底径2/8
55	28		土師質 火鉢	29.0			横ナデ	横ナデ後板ナデ	外面に波状文 上面に沈線	普通	淡黄2.5Y8/3	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石を含む	破片

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
56	28		土師質 焙烙	35.2			横ナデ・指頭痕	横ナデ・指頭痕	穿孔2個1対	普通	黄灰2.5Y5/1	0.1～2mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	破片
57	28	19	土師質 焙烙	39.4			横ナデ・指頭痕	横ナデ・ハケ目		普通	黒褐2.5Y3/1	0.1～2mmの砂粒を少量含む 金雲母含む	口径1/8
58	28	19	土師質 焙烙	41.0			横ナデ・指頭痕	横ナデ		普通	黄灰2.5Y4/1	0.1～3mmの砂粒を少量含む 石英・金雲母含む	口径1/8

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	器高(cm)	最大径(cm)	材質	整形・調整の特徴
59	29	19	茶杓	5.9	6.2	竹	外面に細かい縦方向の削りが施されている
60	29	19	茶杓	6.1	6.7	竹	外面に細かい縦方向の削りが施されている

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
61	29	20	陶器 陶胎染付小碗			3.6			瀬戸焼 施釉(貫入) 呉須	良好	灰白5Y8/1 釉：灰白5GY8/1 呉須：青灰5B6/1	緻密	底径2/8
62	29	20	陶器 陶胎染付碗			4.0			肥前系 施釉(貫入) 呉須	良好	暗青灰5PB4/1 釉：灰白8/ 呉須：緑灰5GY5/1	緻密	底径2/8
63	29	20	陶器 陶胎染付碗	10.0	6.6	4.0			肥前系 施釉 呉須	良好	明青灰5PB7/1 釉：明緑灰7.5GY8/1 呉須：藍色	緻密	底径4/8
64	29	20	円板状土製品				ハケ目	ナデ・指頭痕	須恵器転用	良好	灰6/	0.1～4mmの砂粒を少量含む	破片
65	29	21	瓦質 羽釜	11.2			横ナデ・指頭痕	横ナデ・指頭痕・指ナデ		普通	暗灰N3/	0.1～0.5mmの砂粒を少量含む 石英含む	口径1/8
66	29	21	瓦質 羽釜	19.4			指頭痕状の指ナデ・横ナデ	ハケ目後指ナデ後横ナデ		普通	暗灰N3/	0.1～2mmの砂粒を少量含む 金雲母含む	口径2/8
67	29	21	土師器 焙烙	27.9			横ナデ	横ナデ	外面にすす付着	普通	黒10Y2/1	0.1～2mmの砂粒を少量含む 金雲母含む	口径1/8
68	29	22	陶器 擂鉢	14.8			ヘラ削り	擂目	堺産又は明石産	良好	にぶい赤褐5YR4/4	0.1～12mmの砂粒を多量に含む	底径3/8
69	29	20	磁器 皿			4.6			肥前系 施釉 呉須	良好	灰白8/ 釉：明青灰10BG7/1 呉須：藍色	精良	底径1/8
70	29	22	陶器 底部			14.0	横ナデ・ナデ	横ナデ	底部に刻印有り	良好	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：暗赤褐2.5YR3/4	0.1～0.5mmの砂粒を少量含む	底径2/8
71	29	22	陶器 擂鉢			14.2	ヘラ削り後指ナデ	擂目	堺産又は明石産	良好	明赤褐2.5YR5/6	0.1～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	底径2/8
72	29	20	陶器 陶胎染付碗	10.1					肥前系 施釉(貫入) 呉須	良好	灰6/ 釉：明緑灰10GY7/1 呉須：藍色	緻密	口径1/8
73	29		土師質 土釜				横ナデ	横ナデ後板ナデ		普通	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：褐灰10YR4/1	0.1～2mmの砂粒を含む 石英・金雲母含む	破片
74	29		陶器 鉢	11.0			横ナデ	横ナデ	備前焼	良好	赤灰2.5YR5/1	0.1～4mmの砂粒を含む 石英含む	口径1/8
75	29	22	陶器 擂鉢	35.4			ヘラ削り	横ナデ・擂目	堺産又は明石産	良好	灰黄褐10YR4/2	0.1～3mmの砂粒を含む	破片

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	現存長(cm)	筒部径(cm)	凸面	凹面	胎土	色調	焼成
76	29		軒丸瓦	(5.0)	8.8	摩滅	横ナデ	0.1～2mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	灰10Y6/1	不良

SKj06

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
77	35	23	陶器 擂鉢	27.0			ヘラ削り後横ナデ	横ナデ・擂目	明石産か？	良好	にぶい赤褐5YR5/4	0.1～2mmの砂粒を含む 石英・長石含む	破片
78	35	23	陶器 擂鉢	33.0			ヘラ削り後横ナデ	横ナデ・擂目	明石産か？	良好	赤褐10R4/4	0.1～2mmの砂粒を含む 石英・長石を含む	口径1/8
79	35		瓦質 羽釜	17.8			横ナデ・指頭痕後指ナデ	横ナデ・ハケ目		普通	オリーブ黒5Y3/1	0.1～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	破片

SKj08

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	整形・調整の特徴
80	38	23	石臼		最大径31.4	11.1	2,570.49	角礫凝灰岩	

SKj09

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
81	40	23, 32	陶器 掛け分け椀	9.0	5.7	3.9			瀬戸焼 施釉(内面に貫入) 鉄釉	良好	灰白5Y8/1 釉：明緑灰10G7/1 鉄釉：黒褐10YR2/3	緻密	口径2/8

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
82	40	23,32	陶器 碗	9.5	5.0	2.8			京焼風 施釉 色絵	良好	灰白8/ 釉：灰白5Y7/2 色絵：暗赤10R3/6 淡緑	緻密	3/8
83	40	23,32	土師質 焙烙	37.5			横ナデ	横ナデ	外面にすす付着 穿孔2個 うち1つは貫通してない	普通	オリーブ黒5Y3/1	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径3/8
84	40	23,32	円板状土製品	径4.6	厚み1.7		摩滅・ナデ		瓦を転用	普通	暗青灰5PB3/1	0.1～3㎜の砂粒を多量に含む 石英・長石含む	8/8

SKj10

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
85	41		陶器 碗			4.8			京焼風 施釉	良好	灰白2.5Y8/2 釉：灰白5Y8/2	緻密	底径4/8

SKj12

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
86	45	23	陶器 陶胎染付碗	11.0	7.6	4.6			肥前系 施釉(貫入) 呉須	良好	灰白7/ 釉：明青灰5BG7/1 呉須：淡藍色	緻密	5/8

SKj13

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
87	47		陶器 鉢			13.8	横ナデ	横ナデ	備前焼	良好	にぶい赤褐2.5YR5/4	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石を含む	底径1/8

SKj14

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
88	49		土師器 小皿	8.4	1.6	6.8	横ナデ・ヘラ切り後指ナデ	横ナデ		普通	灰白10YR8/2	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	底径2/8
89	49		瓦器 椀	14.6			横ナデ・指頭痕後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	和泉型	普通	灰N6/	0.1～2㎜の砂粒を少量含む 石英含む	口径1/8
90	49	24	陶器 陶胎染付碗	10.6					肥前系 施釉(貫入) 呉須	良好	灰N6/ 釉：明青灰10BG7/1 呉須：淡藍色	緻密	破片
91	49	24	陶器 陶胎染付碗			4.4			肥前系 施釉(貫入) 呉須 畳付け部分に砂粒付着	良好	灰白N7/ 釉：明青灰5BG7/1 呉須：淡藍色	緻密	底径4/8
92	49	24,32	陶器 碗	9.1	5.6	3.1			京焼風 施釉(一部貫入) 色絵	良好	灰白5Y8/2 釉：灰白5Y8/2 色絵：暗赤10R3/6 淡緑	緻密	5/8
93	49	24	陶器 掛け分け碗	8.9					瀬戸焼 施釉(貫入) 鉄釉	良好	灰白7.5Y8/1 釉：灰白2.5GY8/1 鉄釉：黒褐10YR2/3	緻密	口径1/8
94	49	24	陶器 掛け分け碗	9.9					瀬戸焼 施釉(貫入) 鉄釉	良好	灰7.5Y6/1 釉：明緑灰7.5GY7/1 鉄釉：黒褐7.5YR3/2	緻密	口径2/8
95	49	24	陶器 掛け分け碗	9.7					瀬戸焼 施釉 鉄釉 長石	良好	灰白5Y8/2 釉：灰白8/ 鉄釉：黒1.5/	緻密	破片
96	49	24	陶器 灯明皿	10.4			回転ヘラ削り	横ナデ	内面に塗り土 口縁端部の一部に灯芒痕	良好	にぶい赤褐2.5YR5/4 塗り土：暗赤褐2.5YR3/4	0.1～1㎜の砂粒を含む	口径1/8

SKj15

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
97	51		白磁 小皿	5.6	1.4	2.6			施釉	良好	灰白8/ 釉：明緑灰7.5GY8/1	精良	7/8
98	51		磁器 染付碗						施釉 呉須	良好	灰白8/ 釉：明緑灰10GY7/1 呉須：藍色	精良	破片
99	51		陶器 掛け分け碗			3.8			瀬戸焼 施釉 鉄釉	良好	灰白7.5Y8/1 釉：灰白5Y7/2 鉄釉：黒10YR1.7/1	緻密	底径8/8
100	51		陶器 陶胎染付碗	10.8					肥前系 施釉(貫入) 呉須	良好	灰5Y6/1 釉：明緑灰10GY7/1 呉須：淡藍色	緻密	破片

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
101	51		瓦質 羽釜	28.4			横ナデ・指頭痕	横ナデ・指ナデ		普通	灰5Y5/1	0.1～1mmの砂粒を含む 石英・長石含む	破片

SKj17

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
102	55		磁器 碗			4.4			肥前系 内面に蛇の目釉剥 畳付け部分に砂粒付着	良好	灰白8/ 釉：明青灰5B7/1	精良	底径2/8

SKj18

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	整形・調整の特徴
103	52	25	硯	(5.4)	(4.4)	(1.7)	70.17	粘板岩	

SDj01

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
104	64	27	磁器 皿			6.8			肥前系 施釉 畳付け部分に砂粒付着	良好	灰白8/ 釉：明緑灰7.5GY8/1 呉須：藍色	精良	底径1/8
105	64	27	磁器 碗			4.6			肥前系 施釉 内面に釉剥 畳付け部分に砂粒付着	良好	灰白8/ 釉：明青灰5BG7/1 呉須：緑灰10GY6/1	精良	底径2/8
106	64	27	磁器 碗			4.2			肥前系 施釉 呉須 二重編目文	良好	灰白5Y8/1 釉：明緑灰7.5GY8/1 呉須：緑灰7.5GY6/1	精良	底径3/8
107	64	27	陶器 陶胎染付碗			4.8			肥前系 施釉(貫入) 呉須	良好	にぶい褐7.5YR6/3 釉：灰白7.5YR8/1 呉須：オリーブ黒10Y3/2	緻密	底径4/8
108	64	28	陶器 擂鉢	29.6			ヘラ削り後横ナデ	横ナデ・擂目	堺産又は明石産	普通	褐7.5YR4/3	0.1～1mmの砂粒を含む 石英含む	口径1/8
109	64	28	陶器 擂鉢	30.7			ヘラ削り後横ナデ	横ナデ・擂目	堺産又は明石産	普通	灰黄褐10YR4/2	0.1～2mmの砂粒を含む	口径1/8
110	64	28	陶器 擂鉢			16.6	ヘラ削り後横ナデ	擂目	明石産	普通	紫灰5RP5/1	0.1～3mmの砂粒を多量に含む	底径2/8

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	整形・調整の特徴
111	64	26	キセル	7.4(竹2.5)	最大径1.0			銅・竹	吸い口 「住吉」の文字を彫っている
112	64	26	キセル	19.1	最大径1.0			銅	

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	整形・調整の特徴
113	64	25	硯	16.8	(4.2)	1.7	179.64	粘板岩	
114	64		砥石	(5.0)	5.5	4.4	208.26	砂岩	欠損部以外4面に使用痕あり
115	64	25	叩き石	16.5		7.1	1,126.07	砂岩	上下端に敲打痕あり、側面に砥石として使用した痕跡あり、赤変
116	64	26	石臼		最大径29.2	8.1	12,100.00	角礫凝灰岩	
117	64	26	スクレイパー	7.6	4.1	0.9	27.90	サヌカイト	白色風化

柱穴

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	備考	焼成	色調	胎土	遺存度
118	68	29	陶器 掛け分け碗	9.6					瀬戸焼 施釉 鉄釉	良好	灰白7.5Y7/1 釉：灰白5GY8/1 鉄釉：黒褐10YR2/2	緻密	口径1/8
119	68	29	陶器 掛け分け碗			4.8			瀬戸焼 施釉 鉄釉	良好	淡黄2.5Y8/3 釉：灰白2.5GY8/1 鉄釉：黒褐7.5YR3/2	緻密	底径2/8
120	68	29	唐津 刷毛目鉢			7.4			施釉	良好	浅黄橙10YR8/4 釉：緑灰5G5/1	0.1～4mmの砂粒を含む	底径2/8
121	68	29	磁器 染付皿	11.2					肥前系 施釉 呉須	良好	灰白8/ 釉：明緑灰7.5GY8/1 呉須：明緑灰7.5GY7/1	精良	口径1/8
122	68	31	土師質 火鉢	37.0			横ナデ・板ナデ	横ナデ・指頭痕		普通	灰褐5YR4/2	0.1～3mmの砂粒を含む 石英・長石含む	破片
123	68		瓦器 椀	14.1			横ナデ・ヘラ磨き	横ナデ・ヘラ磨き	和泉産	普通	灰5/	0.1～1mmの砂粒を含む	口径1/8

遺物番号	挿図番号	写真図版	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外　面	内　面	備　考	焼成	色　調	胎　土	遺存度
124	68	30	須恵器　椀	13.7	3.2	5.1	横ナデ	横ナデ・板ナデ	十瓶山窯産(瓦質土器)	普通	灰白5Y7/1	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径1/8 底径7/8
125	68		黒色土器　椀				横ナデ	横ナデ・ヘラ磨き	A類	普通	外：浅黄橙10YR 8/3　内：オリーブ黒5Y3/1	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	破　片
126	68	31	土師質　甕	31.2			横ナデ・指ナデ	横ナデ		普通	灰黄褐10YR5/2	0.1～3㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	破　片
127	68		須恵器　椀			5.9	横ナデ	横ナデ	十瓶山窯産(瓦質土器)	普通	灰白8/	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英含む	底径2/8
128	68		土師器　坏	12.0			横ナデ	横ナデ		普通	灰白10YR8/2	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径1/8
129	68		須恵器　椀			4.0	横ナデ	横ナデ	十瓶山窯産(瓦質土器)	普通	灰白7/	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	底径2/8
130	68	30	須恵器　甕	33.2			横ナデ・格子叩き目・横ナデ	指ナデ・板ナデ	十瓶山窯産	良好	青灰5PB6/1	0.1～3㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径1/8
131	68		土師器　坏			7.2	横ナデ・ヘラ切り後指ナデ	横ナデ		普通	にぶい褐7.5YR 5/4	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	底径4/8
132	68		土師器　椀	13.8			横ナデ	横ナデ		普通	にぶい黄褐10YR 5/3	0.1～1㎜の砂粒を含む	破　片
133	68	30	土師器　小皿	8.6	1.6	6.4	横ナデ・糸切り	横ナデ		普通	橙5YR7/6	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	8/8
134	68	31	土師器　小皿	7.4	1.5	4.8	横ナデ・糸切り	横ナデ		普通	にぶい橙7.5YR 7/4	0.1～1㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	底径3/8
135	68	31	土師器　小皿	8.4	1.3	6.2	横ナデ・糸切り	横ナデ		普通	橙5YR6/6	0.1～2㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	底径3/8
136	68	31	須恵器　椀	14.4	4.0	5.2	横ナデ・	横ナデ・板ナデ	十瓶山窯産(瓦質土器)	普通	灰白8/	0.1～4㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	口径2/8
137	68	31	土師質　土釜脚				指ナデ	ハケ目	土釜B	普通	灰褐5YR6/2	0.1～3㎜の砂粒を含む 石英・長石含む	脚部7/8

包含層

遺物番号	挿図番号	写真図版	器　種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	整形・調整の特徴
138	69	31	扁平片刃石斧	6.8	2.8	0.8	33.68	結晶片岩	
139	69	31	石　鏃	1.8	1.7	0.3	0.71	サヌカイト	

図　　版

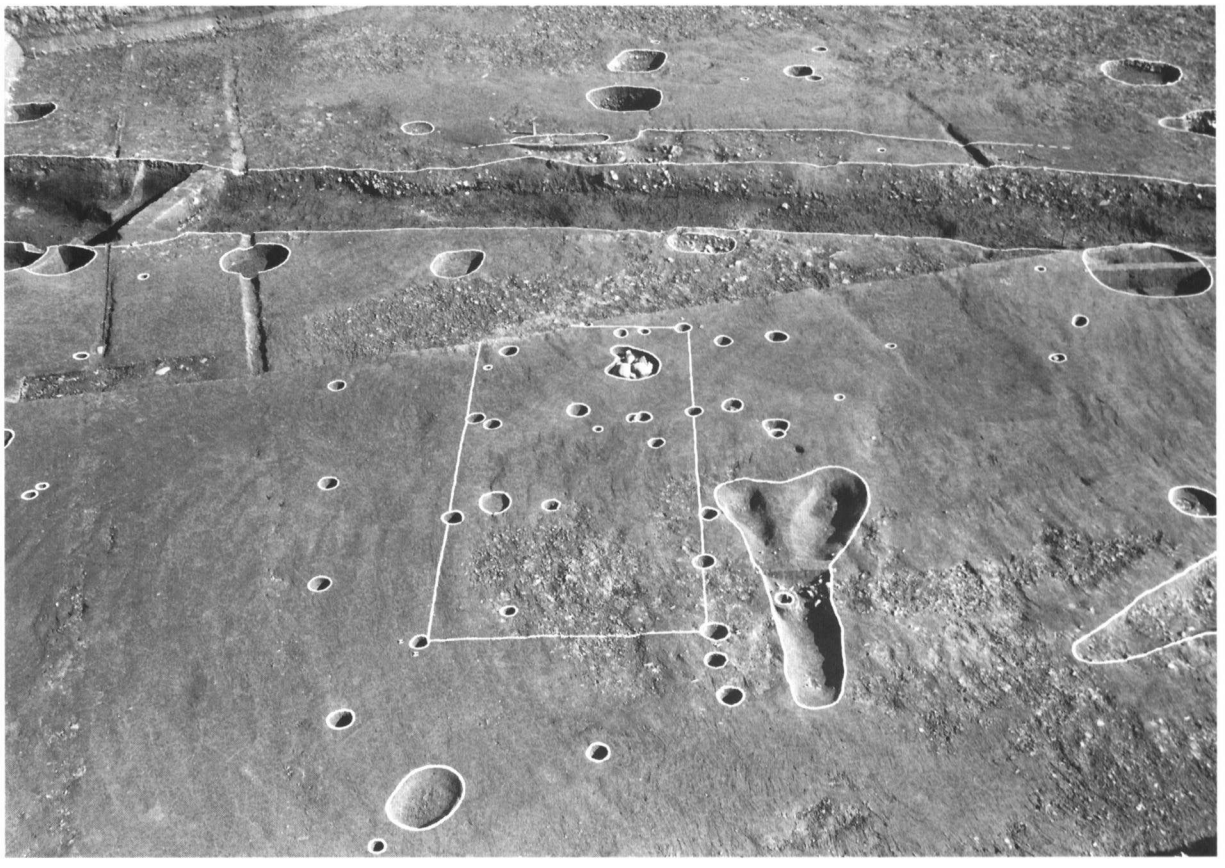
調査区全景（真上より）

図版 2

(1)第Ⅰ調査区遺構検出状況(南より)

(2)第Ⅰ調査区遺構検出状況(南南東より)

(1)第Ⅰ調査区北部遺構検出状況(西より)

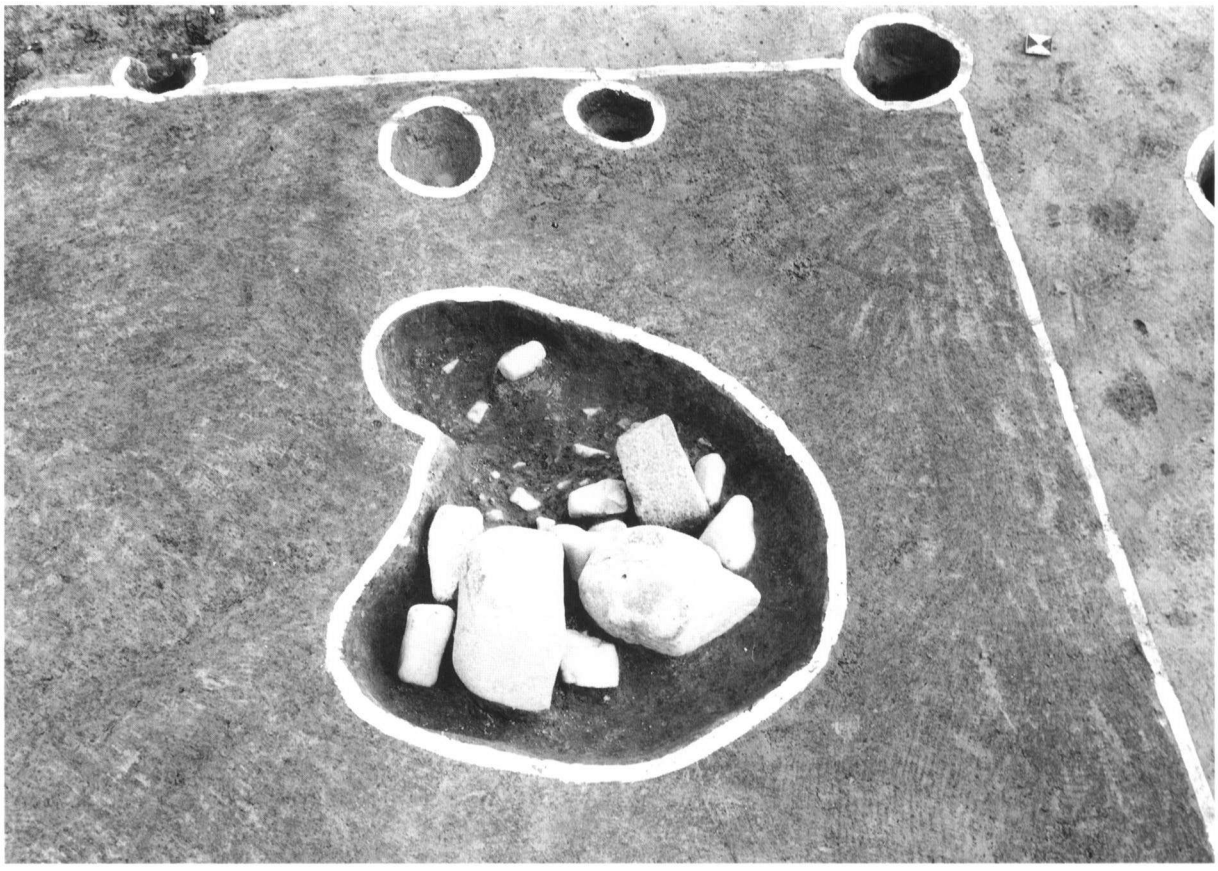


(2)SBj01検出状況(西より)

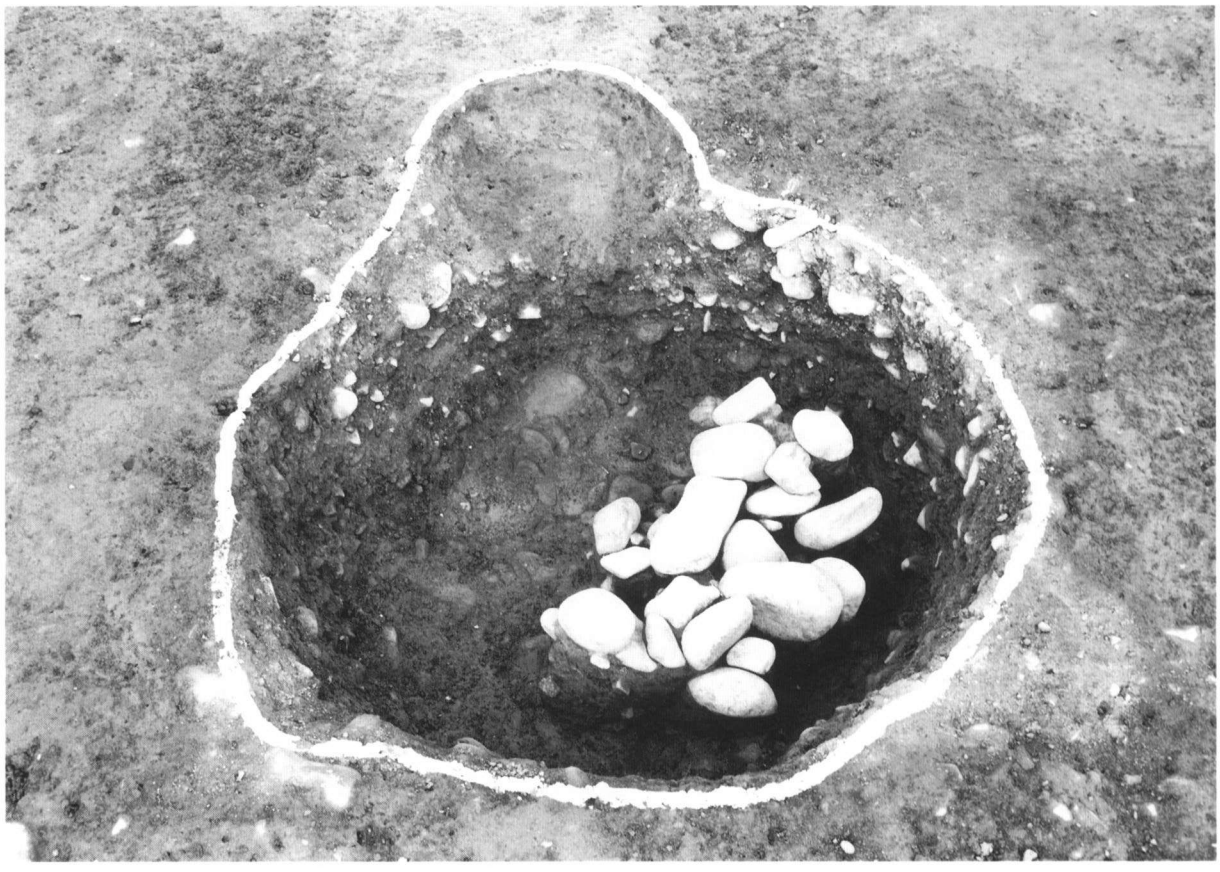
図版 4

(1)SEj01 検出状況(南より)

(2)SEj01 断面(南より)



(1)SKj08検出状況(西より)



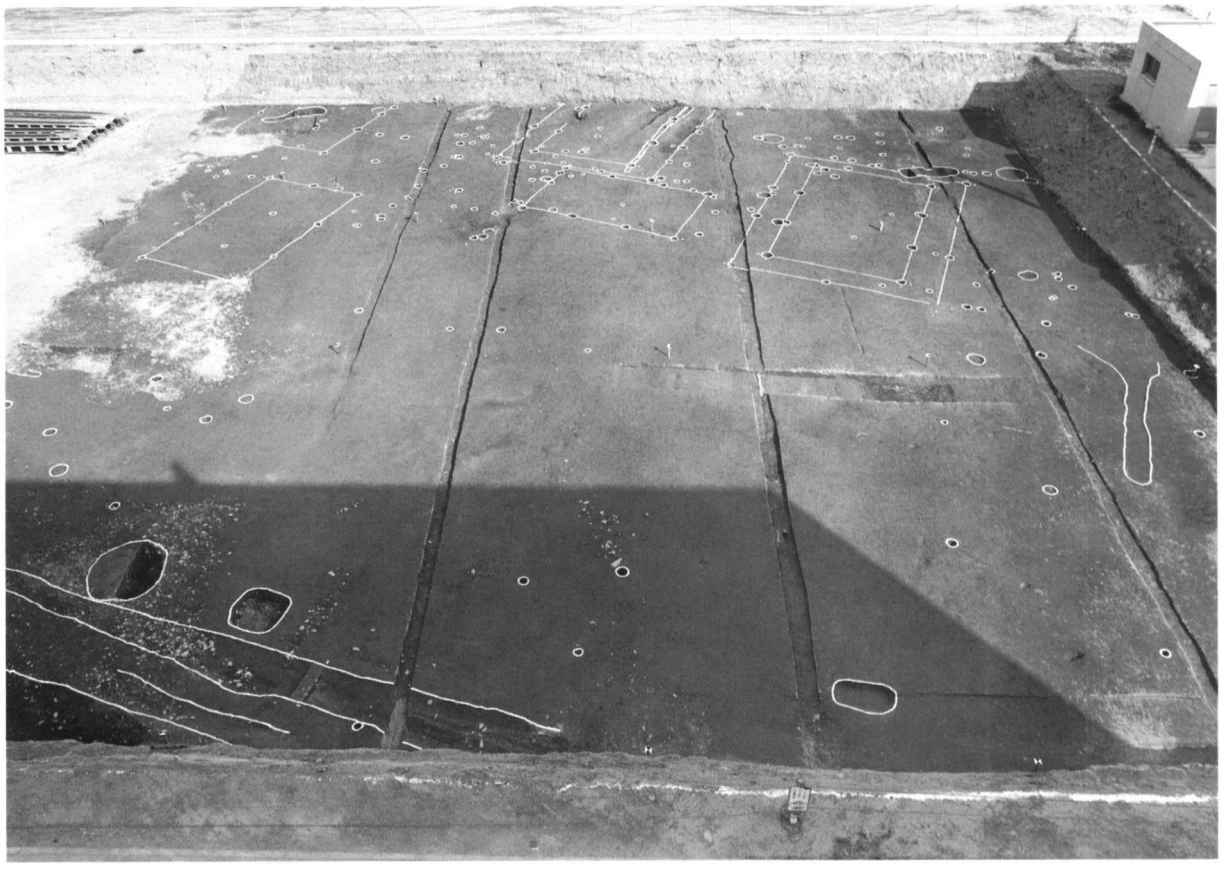
(2)SKj12検出状況(南より)

図版 6

(1)SDj01 北壁土層(南より)

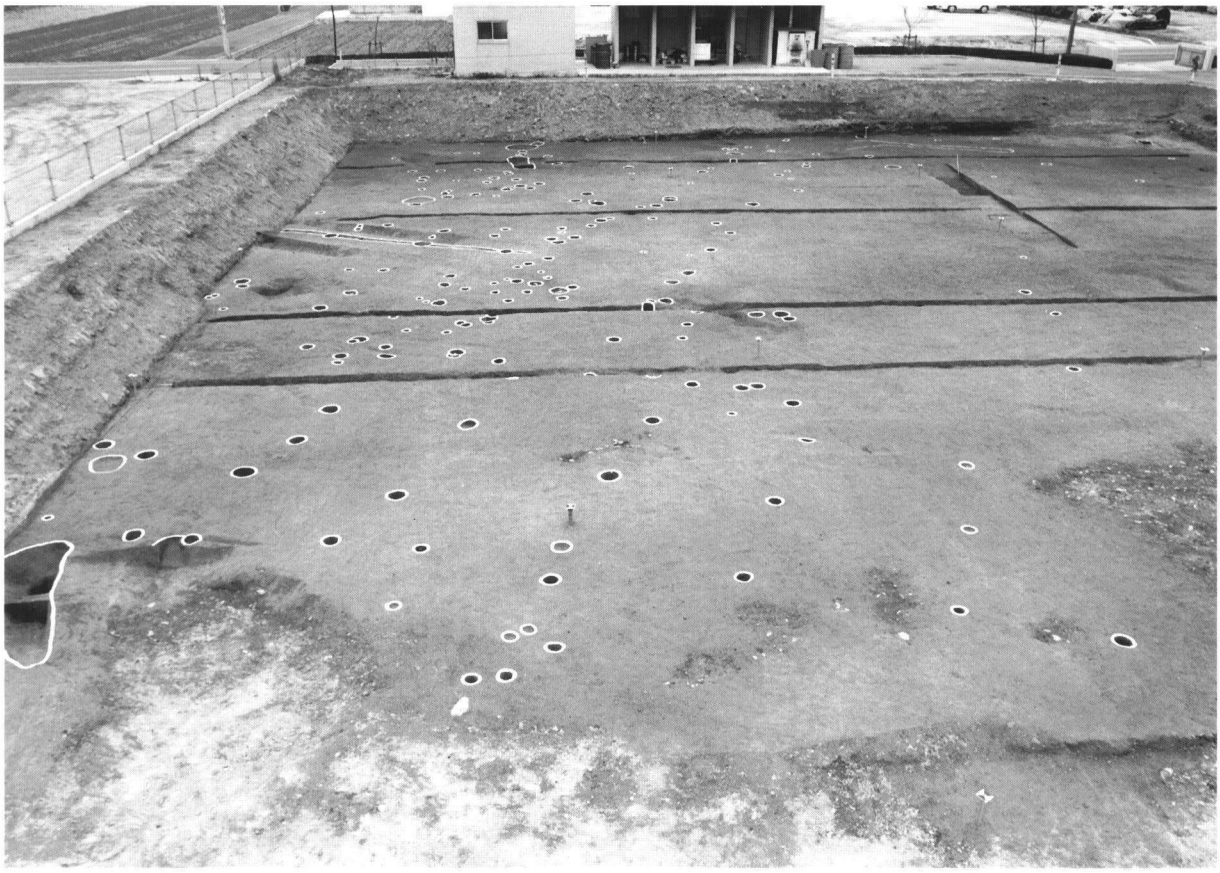
(2)SDj01 土層(北より)

(1)第Ⅱ調査区遺構検出状況(西より)



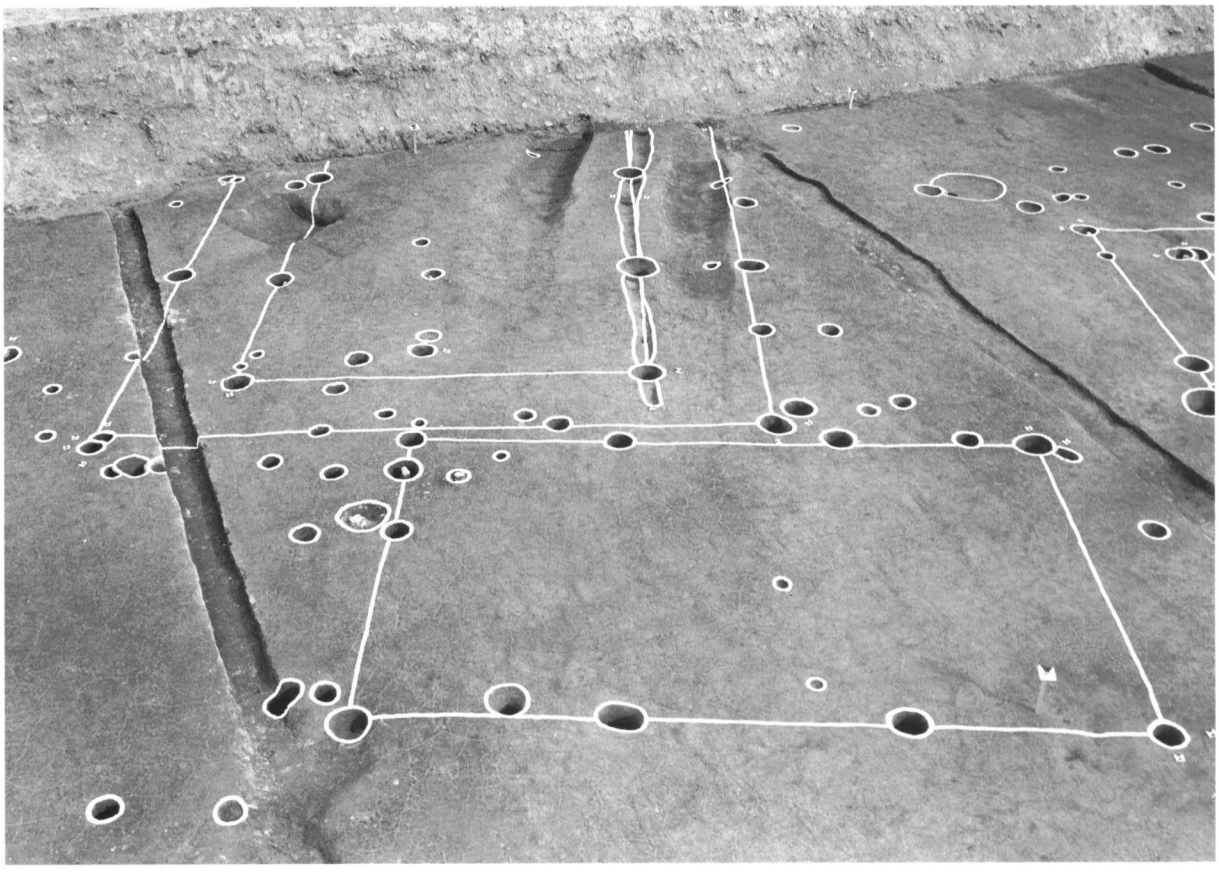
(2)SBj04・05・07・08・09検出状況(西より)

図版 8

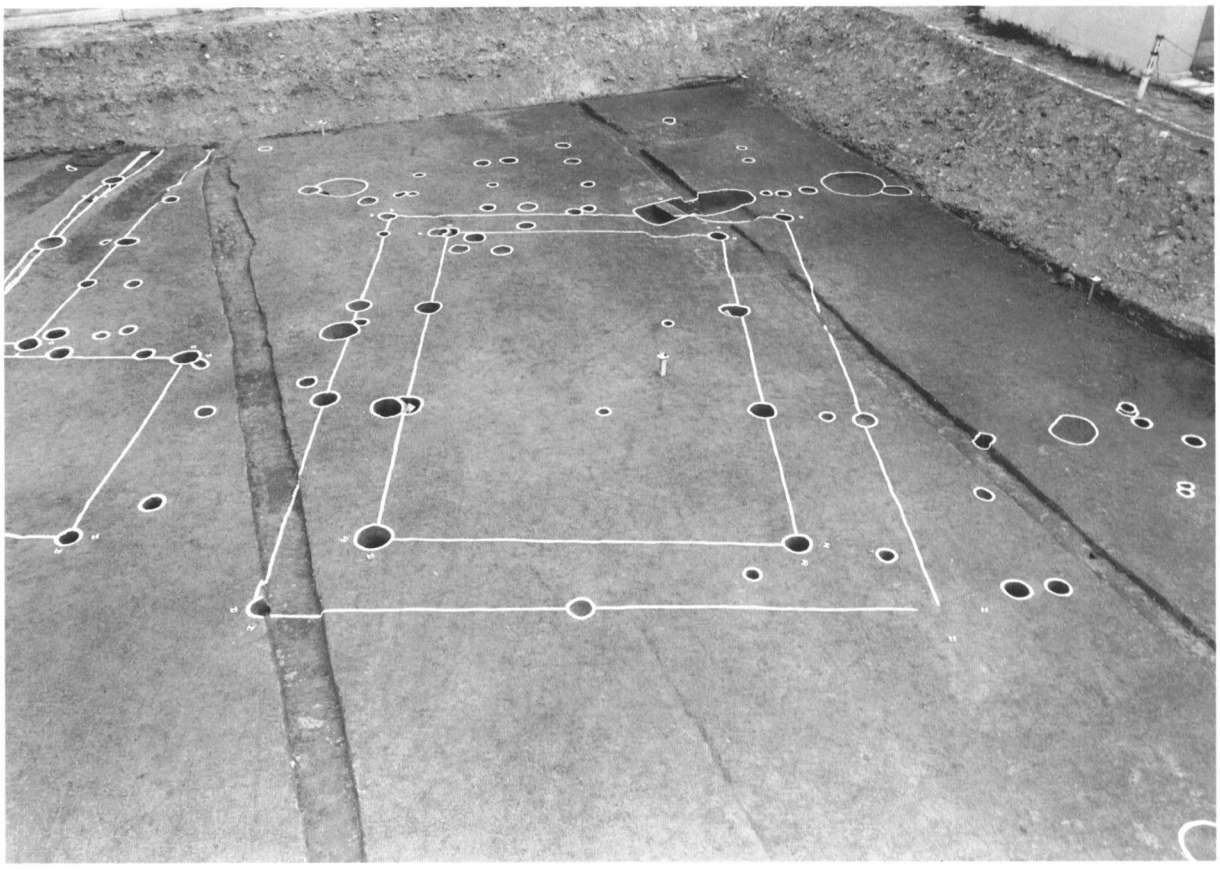


(1)第Ⅱ調査区東部遺構検出状況(北より)

(2)SBj04・05・07・08・09検出状況(南より)

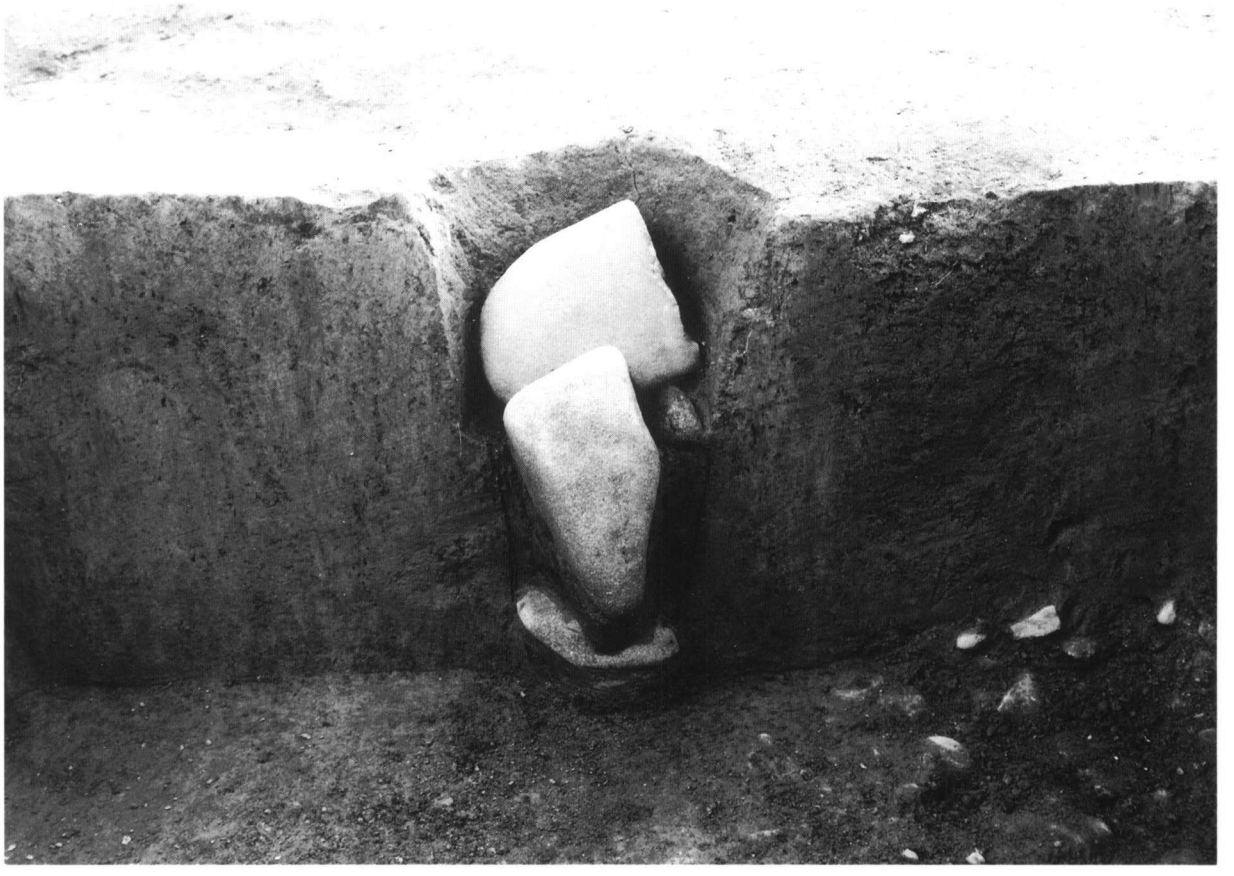


(1)SBj07・08検出状況(西より)

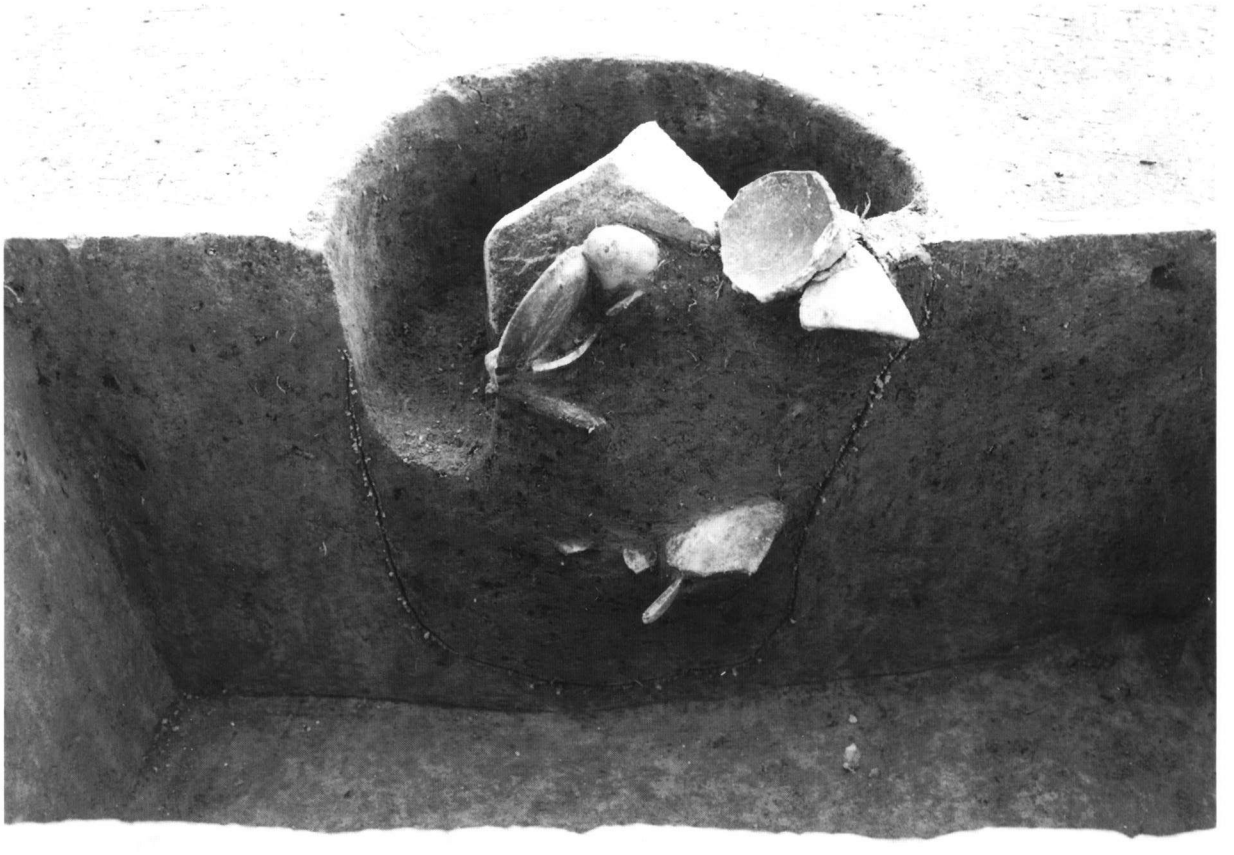


(2)SBj09検出状況(西より)

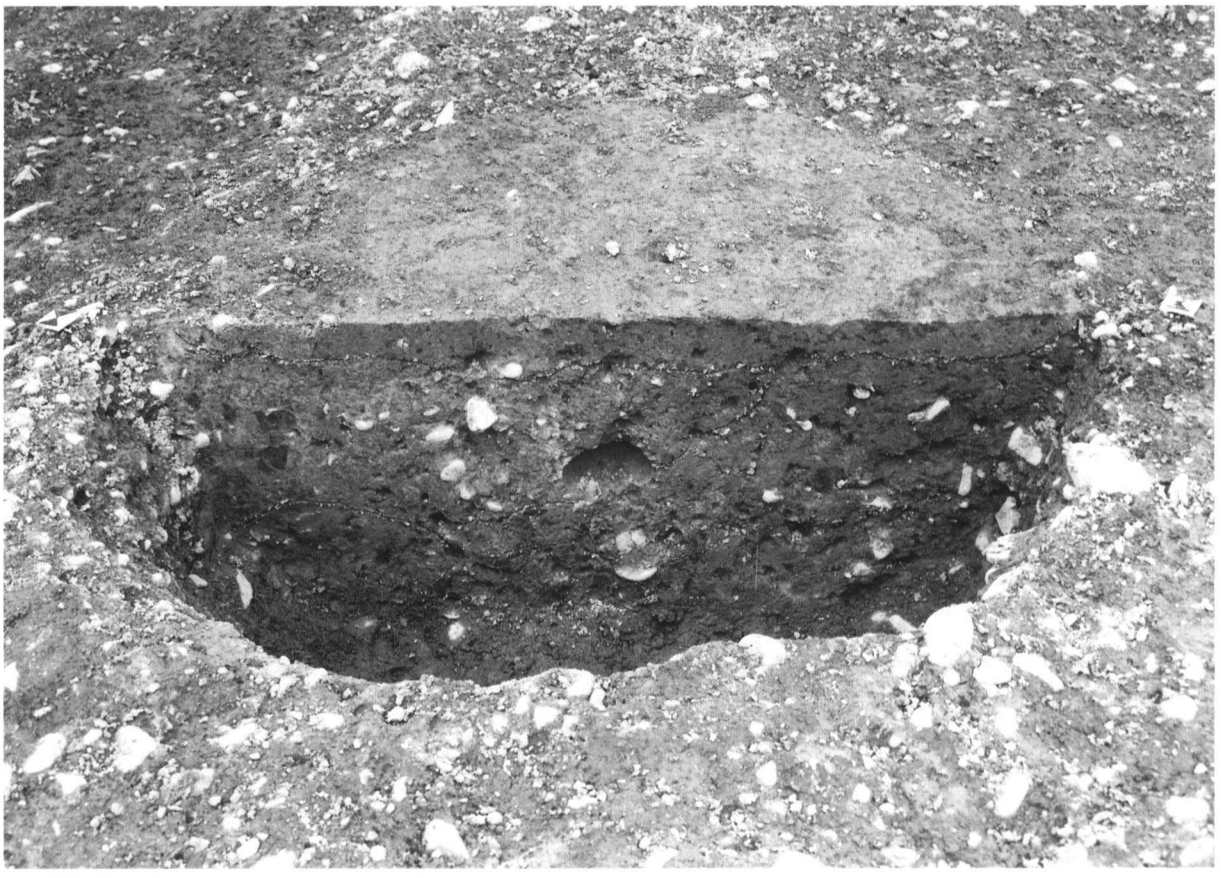
図版10



(1)SBj08 SPj160断面(北より)



(2)SBj09 SPj111断面(北より)

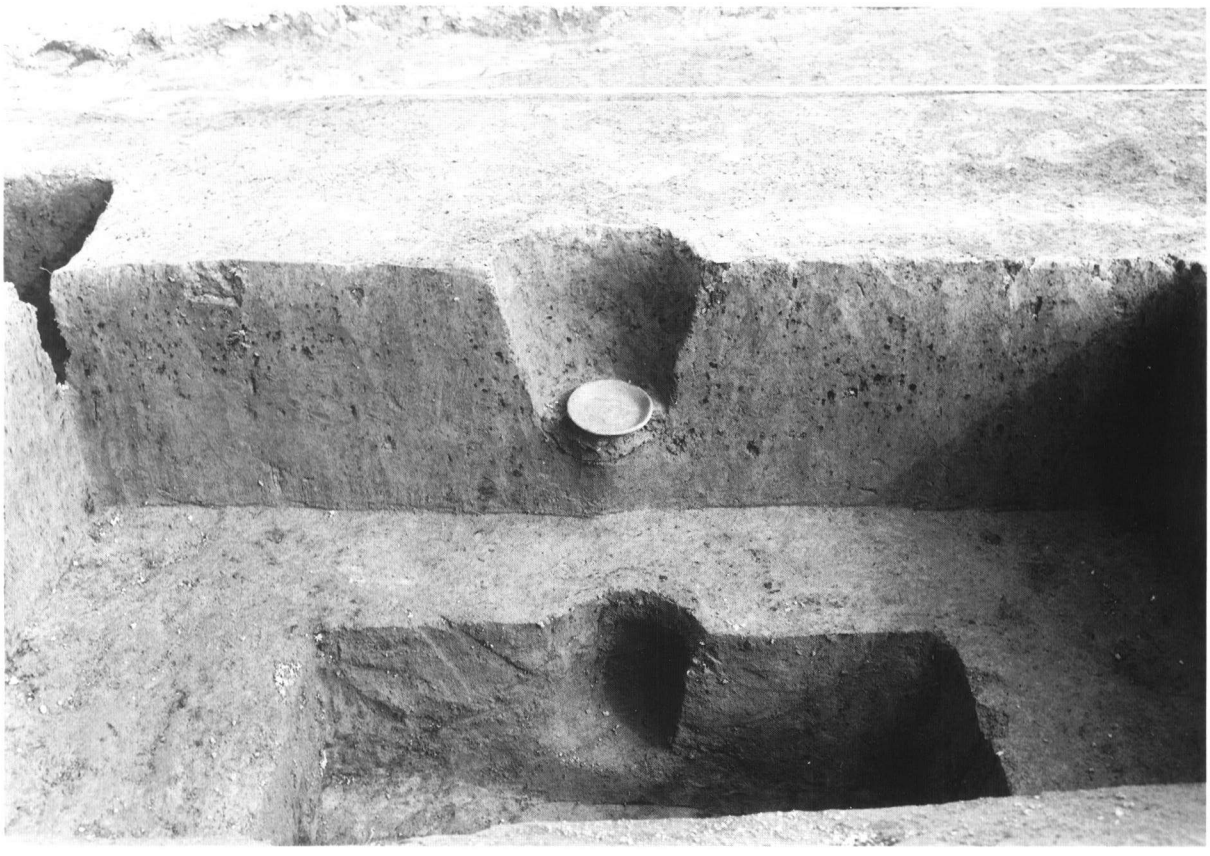


(1)SKj17土層(南より)

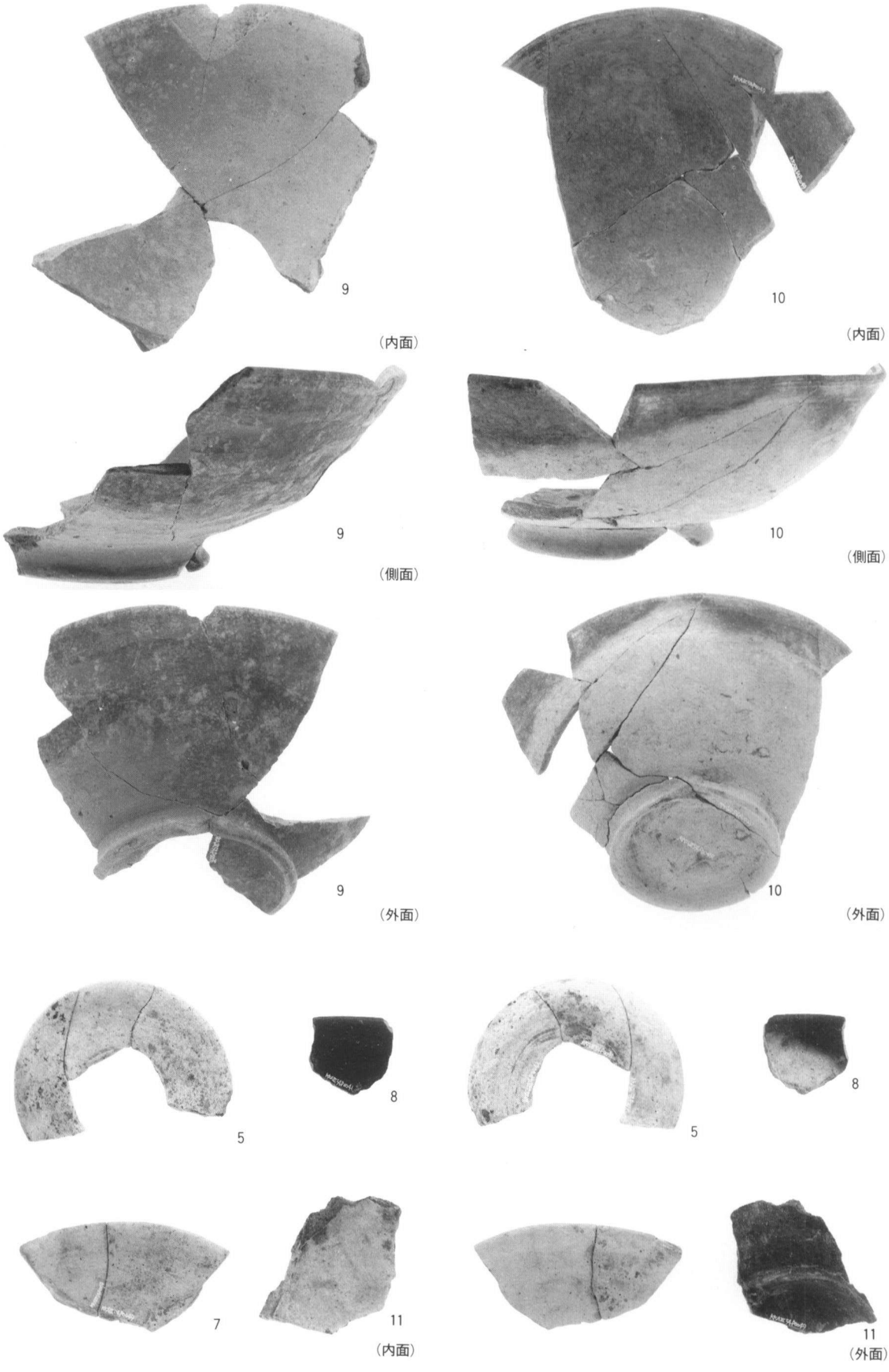
(2)SKj21土層(南より)

図版12

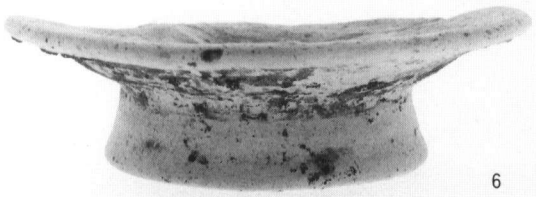
(1)SDj04土層(南より)



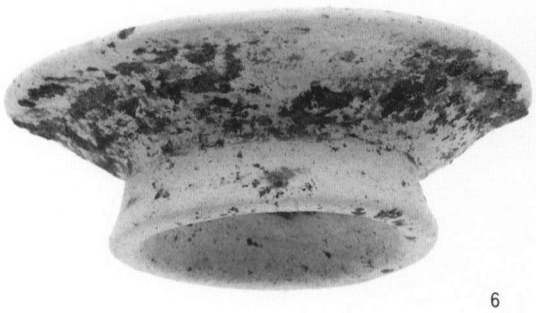
(2)SPj186遺物検出状況(南より)



SBj07出土遺物①

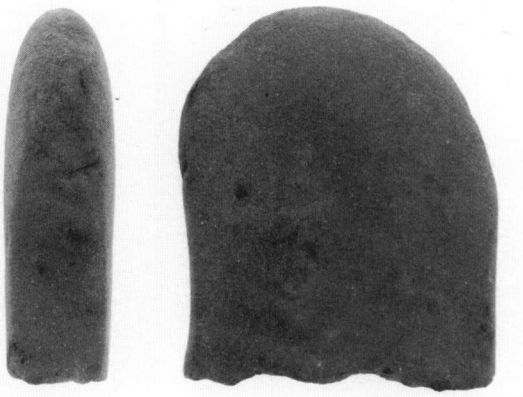


6



6

SBj07出土遺物②



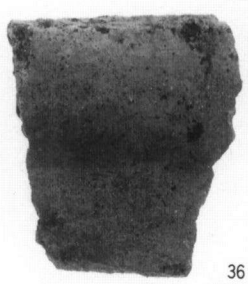
20

SBj08出土遺物①

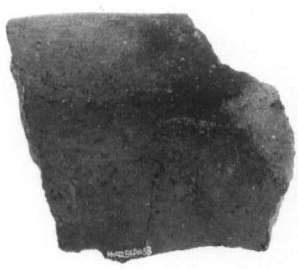
23

23
（底部）

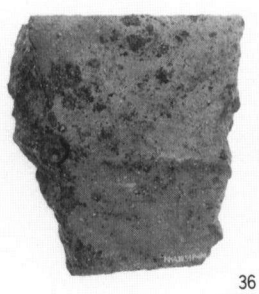
35



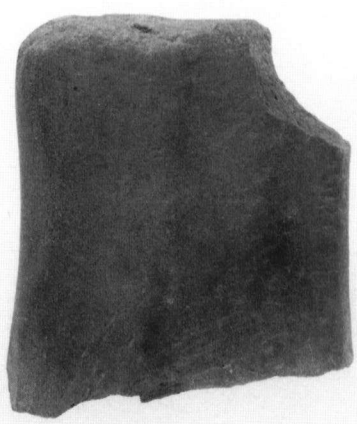
36
（外面）



35

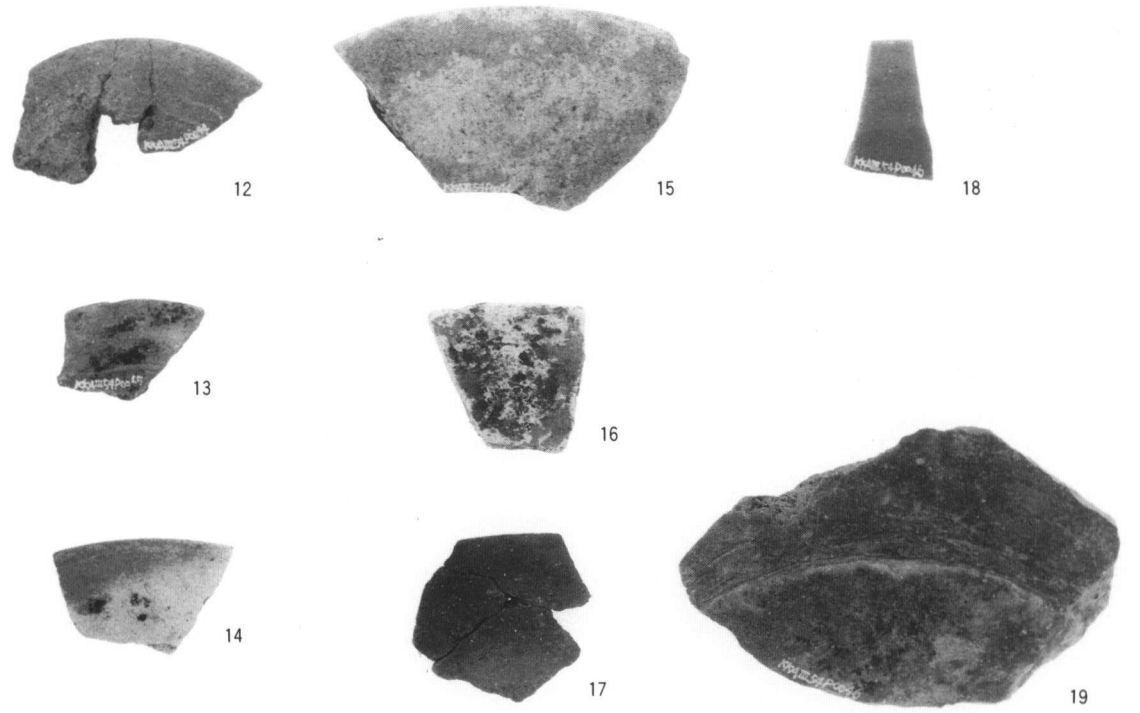


36
（内面）

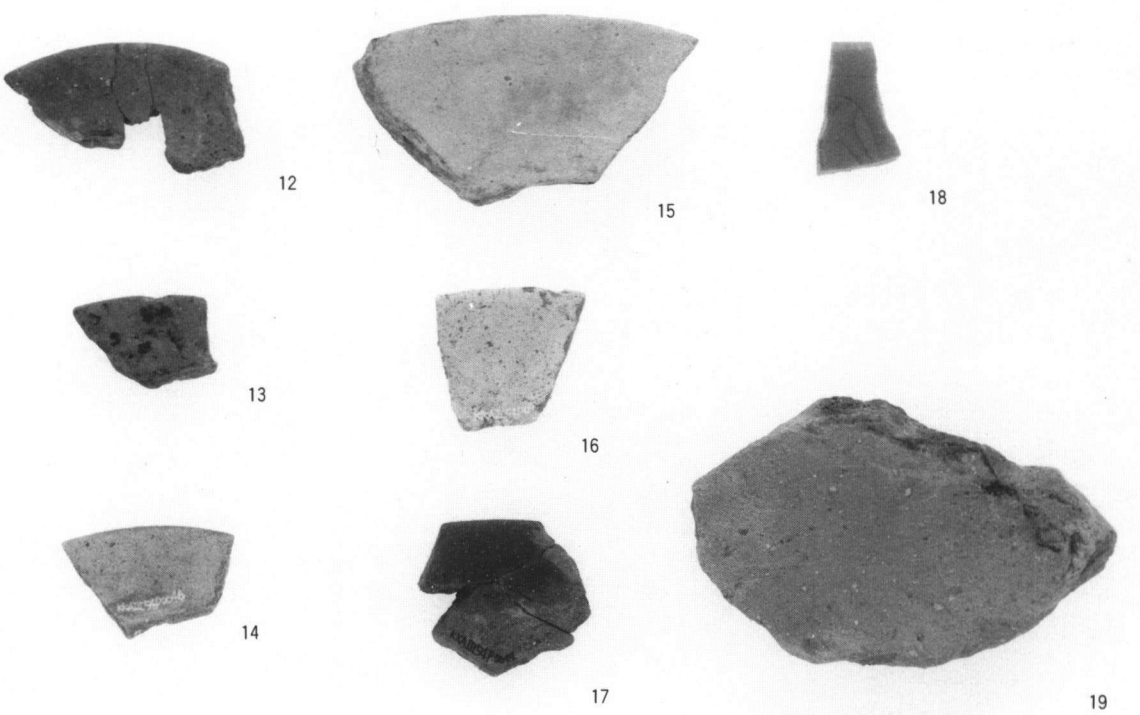


38

SBj09出土遺物①

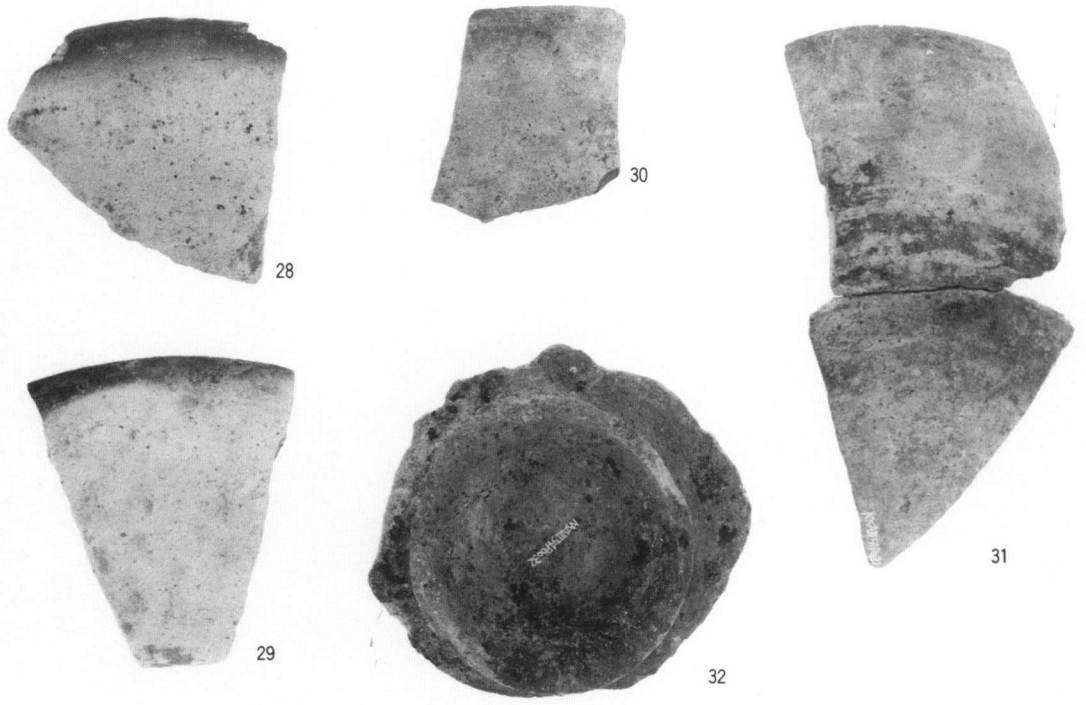


（外面）

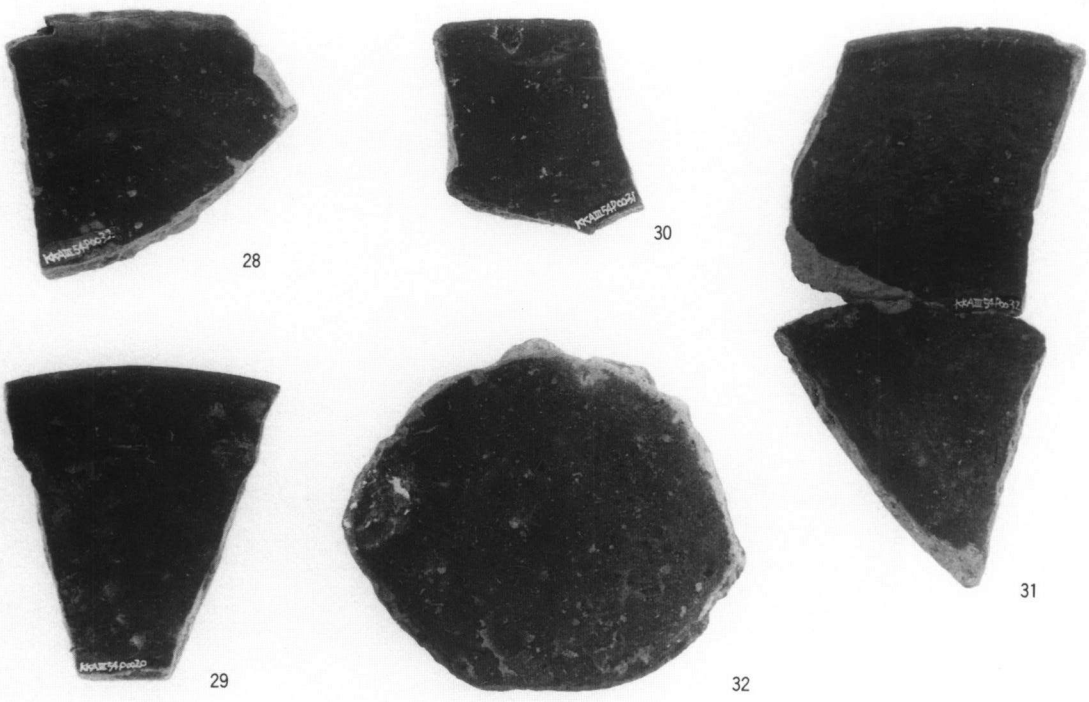


（内面）

SBj08出土遺物②

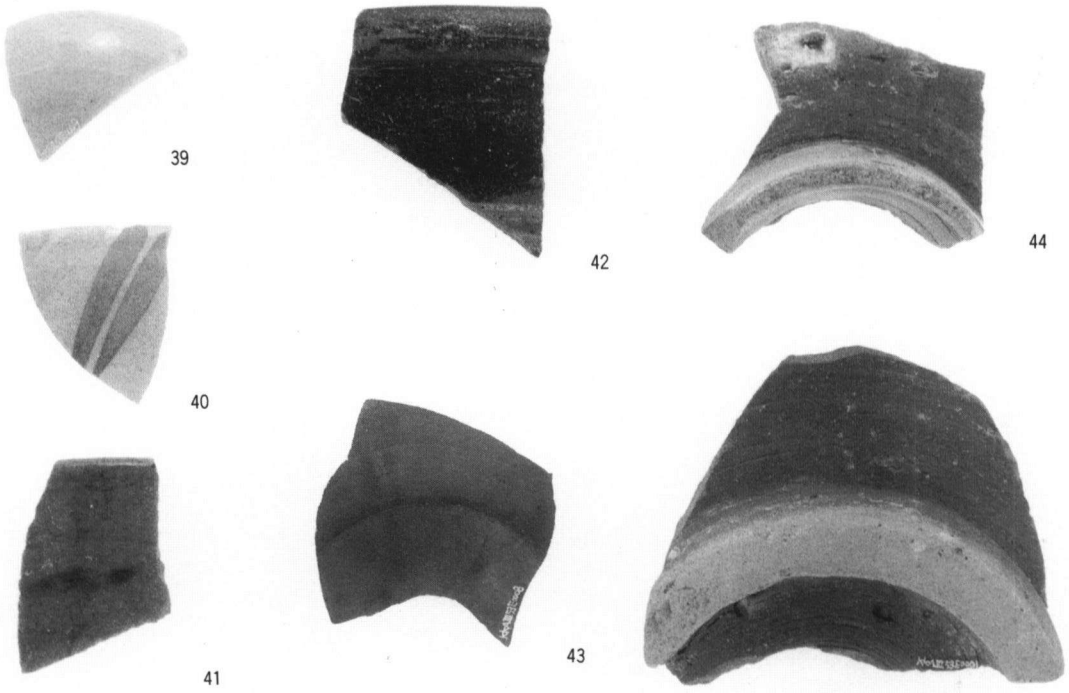


（外面）

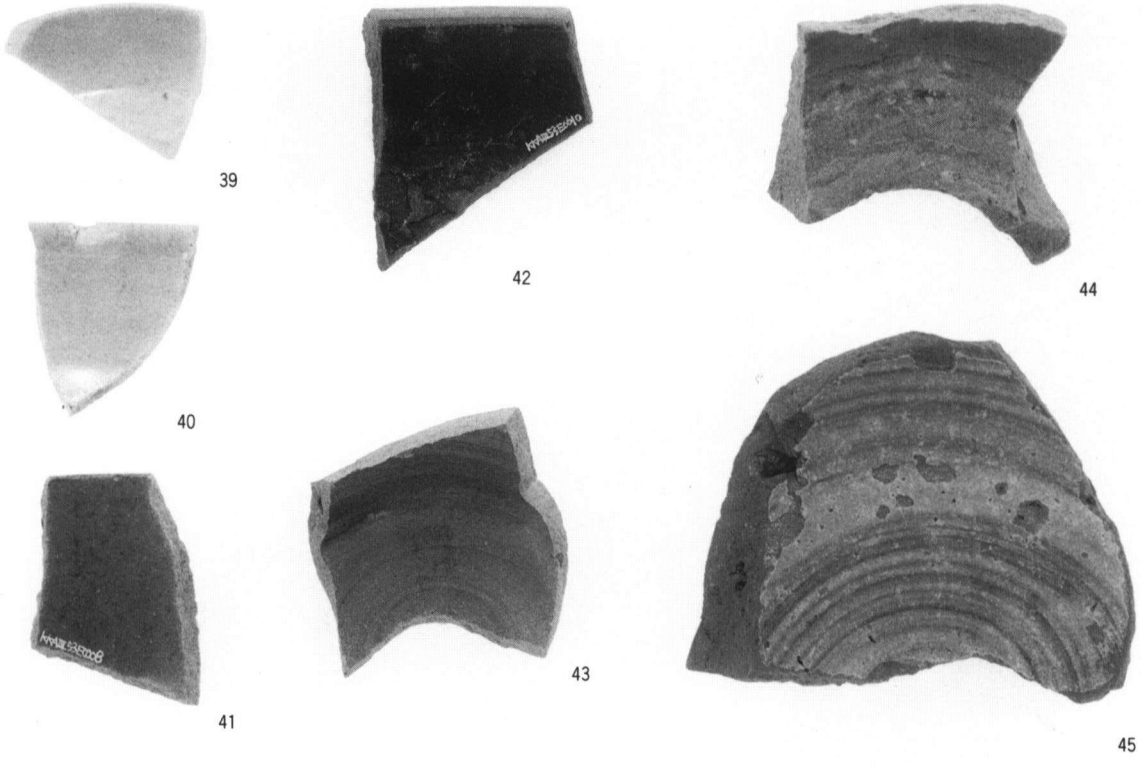


（内面）

SBj09出土遺物②

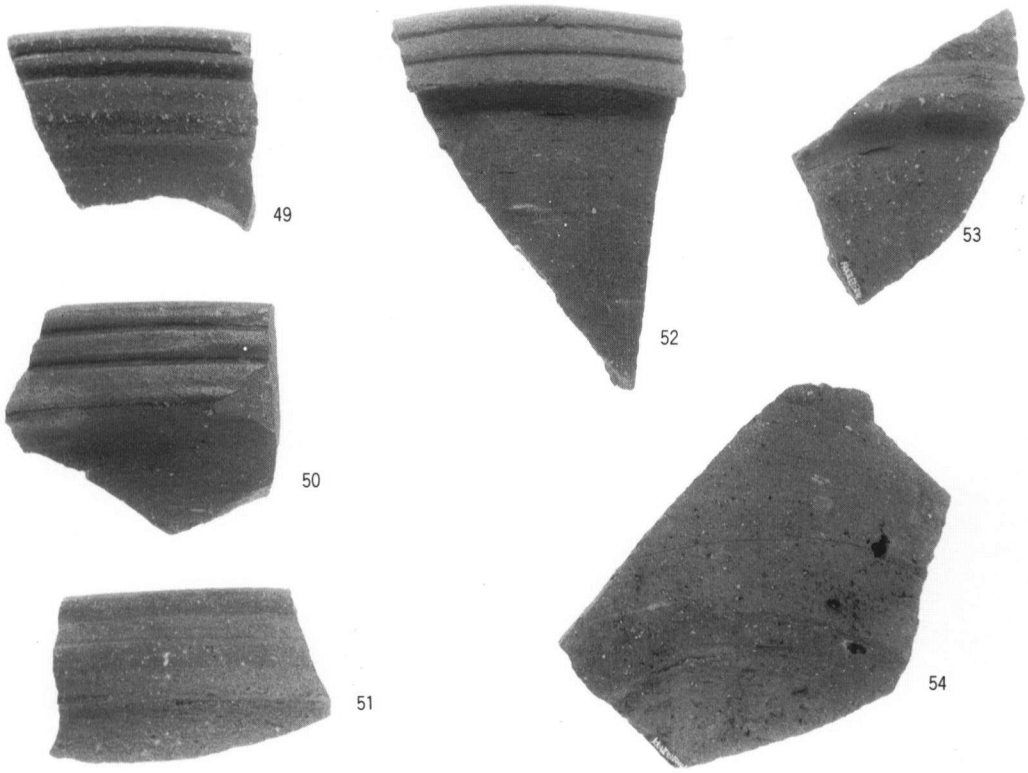


（外面）

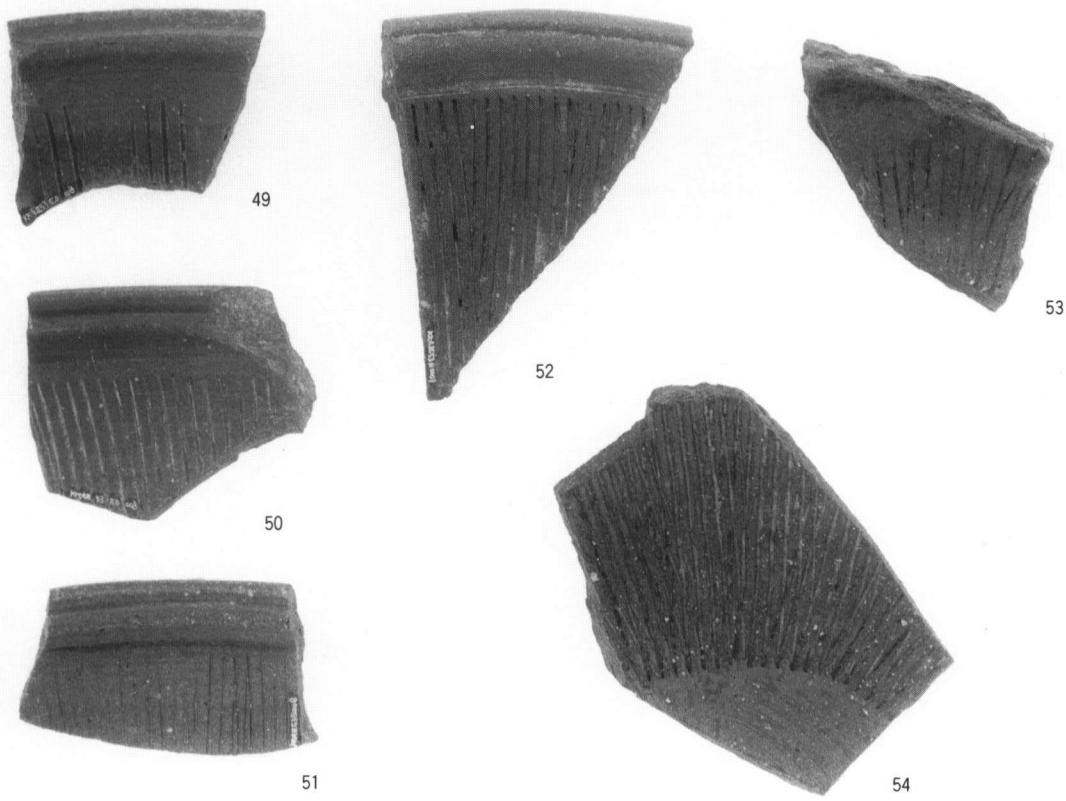


（内面）

SEj01井戸掘方内出土遺物①



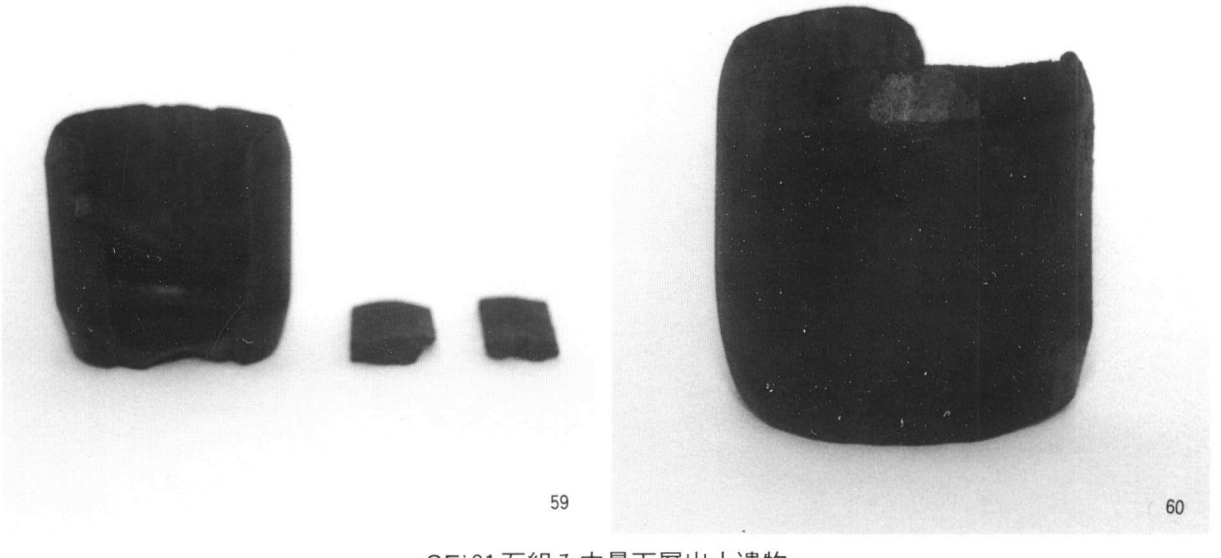
（外面）



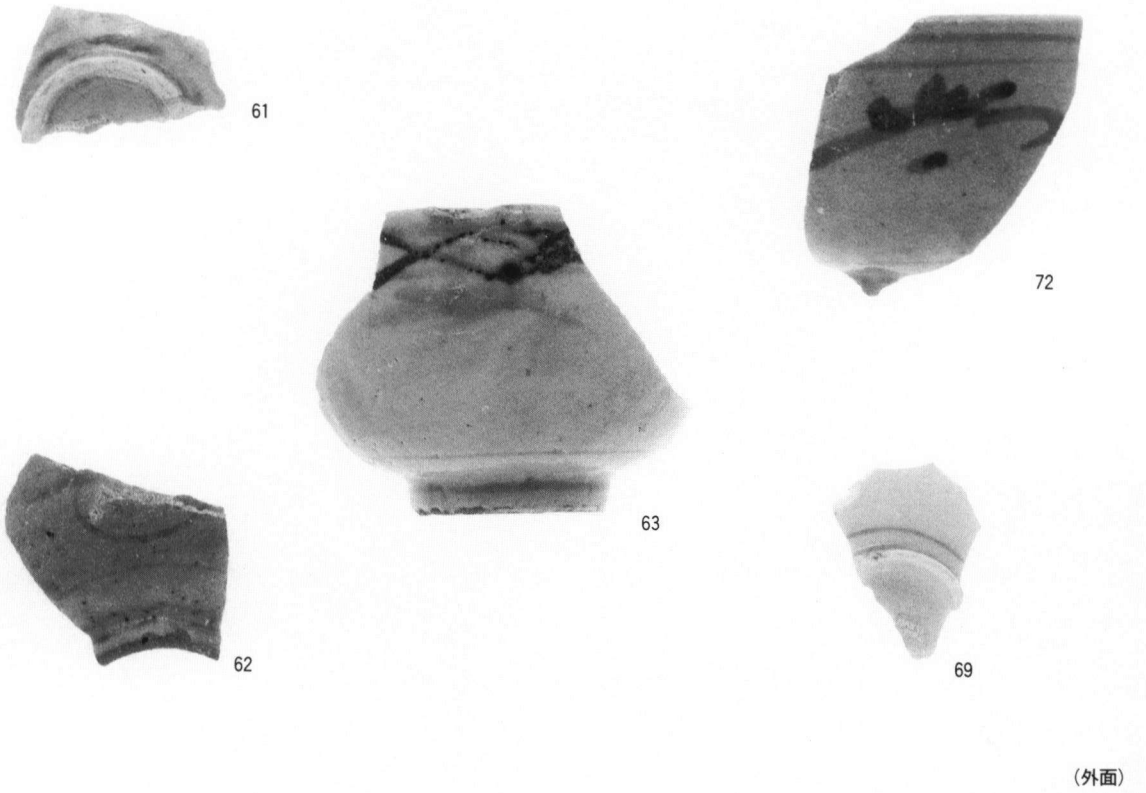
（内面）

SEj01井戸掘方内出土遺物②

SEj01井戸掘方内出土遺物③



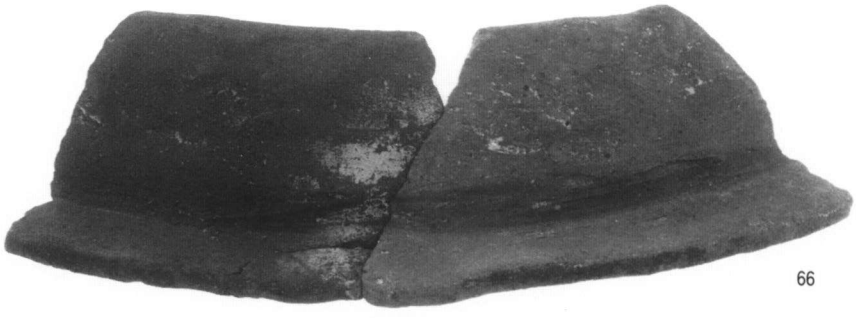
SEj01石組み内最下層出土遺物



SEj01裏込め埋土出土遺物①

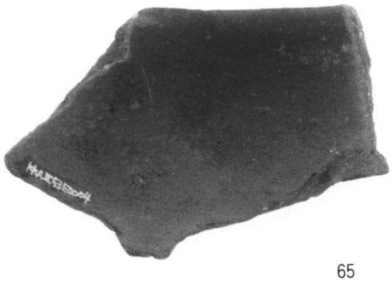
65

67



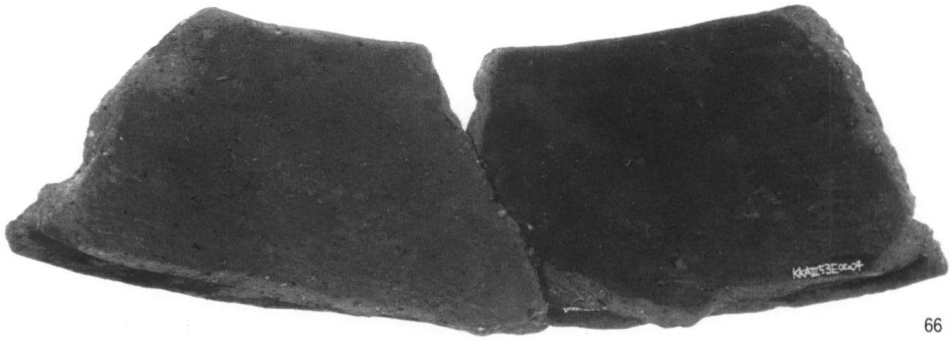
66

（外面）



65

67



66

（内面）

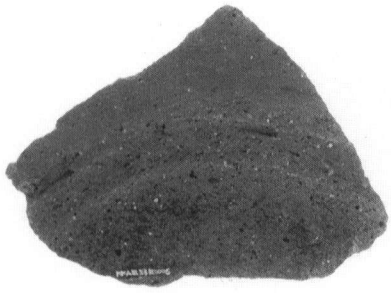
SEj01裏込め埋土出土遺物②

図版22

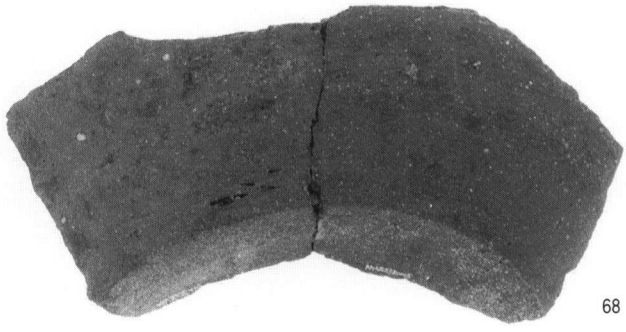
70

75

70（底部）

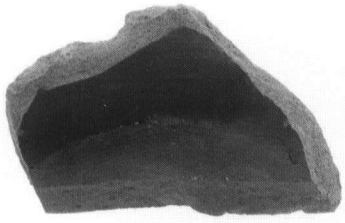


71



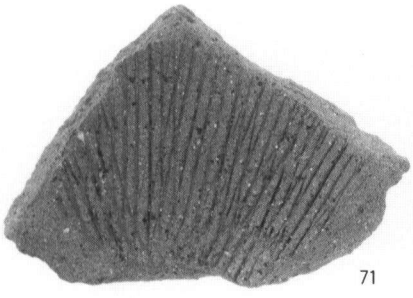
68

（外面）



70

75

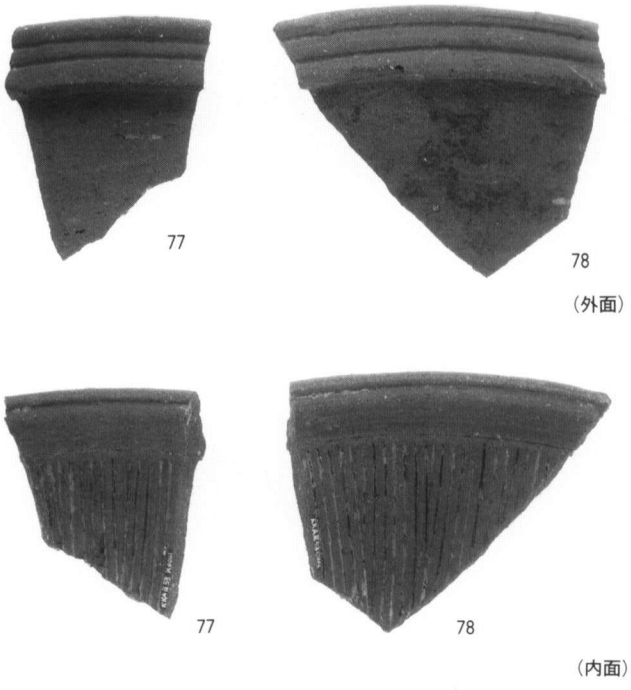


71

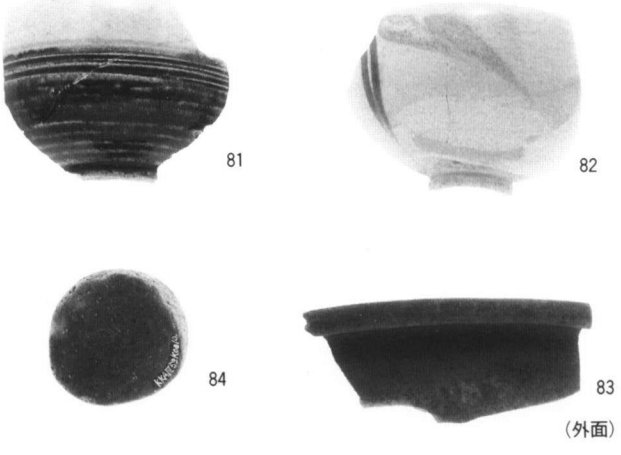
68

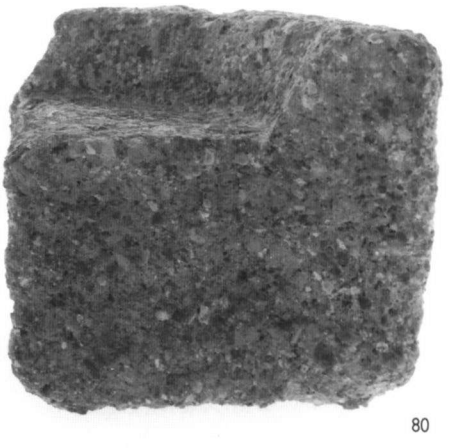
（内面）

SEj01裏込め埋土出土遺物③

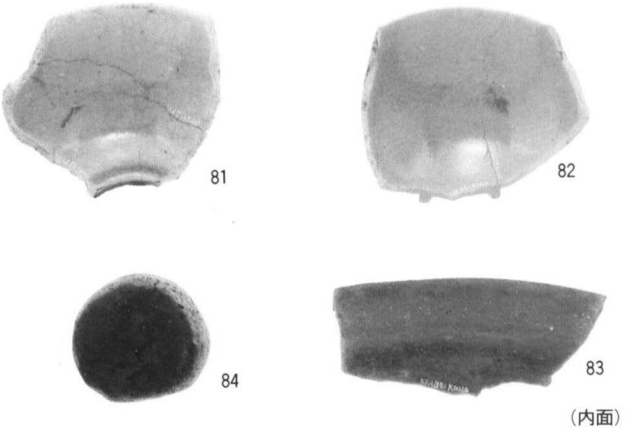


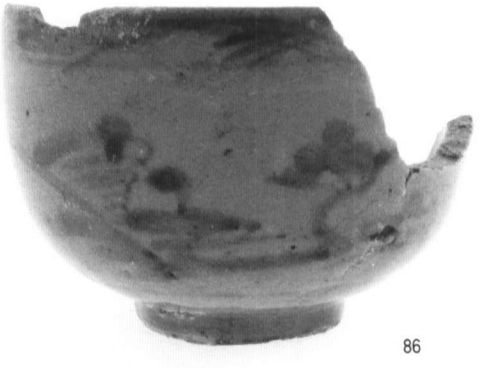
SKj06出土遺物





SKj08出土遺物

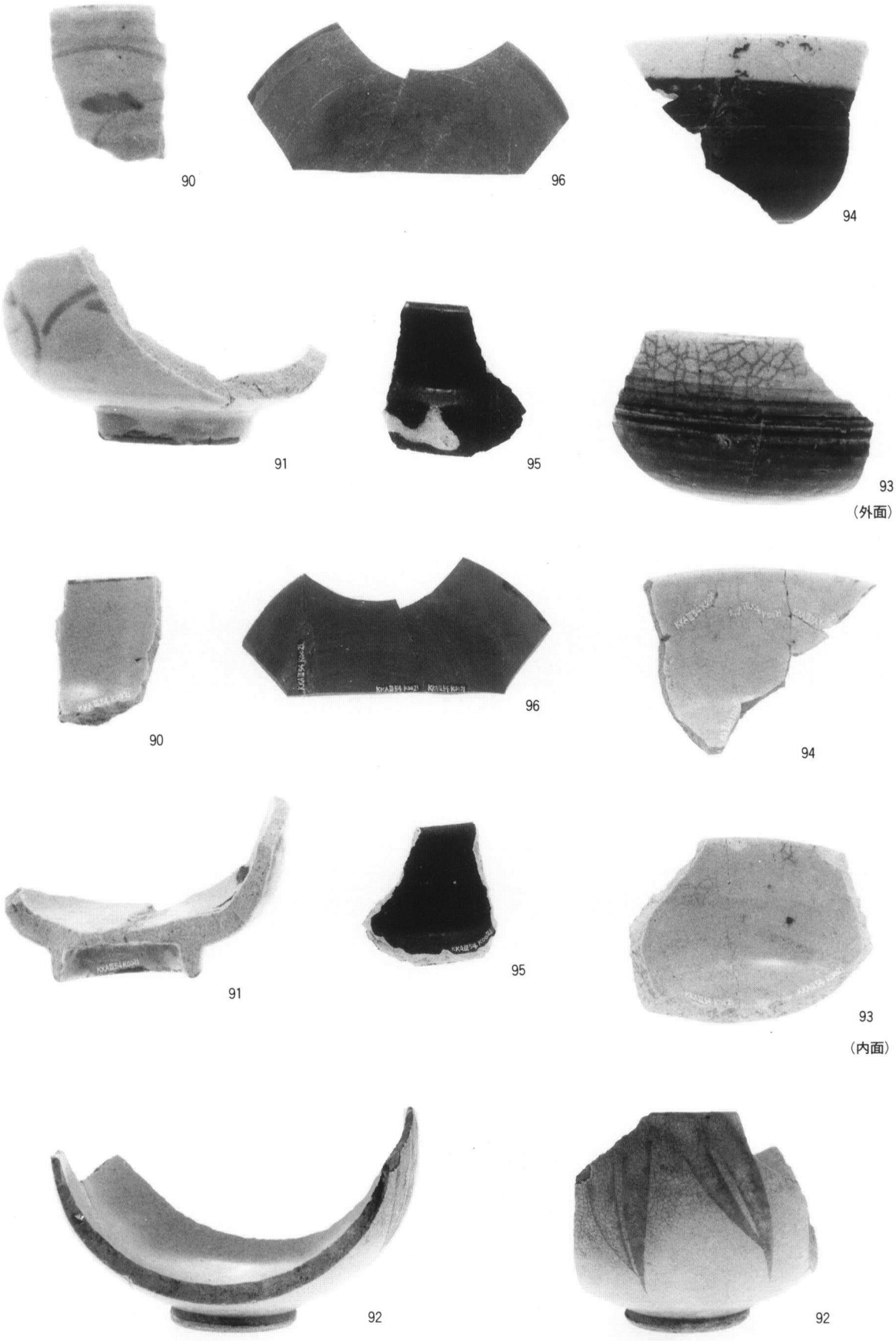




SKj09出土遺物

SKj12出土遺物

図版24



SKj14出土遺物

103

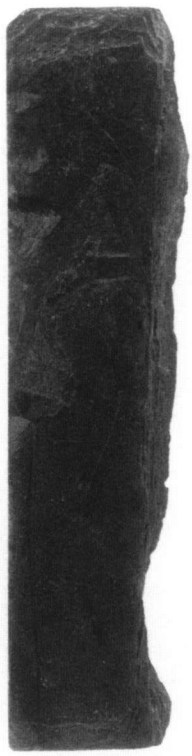
115

SKj18出土遺物

115

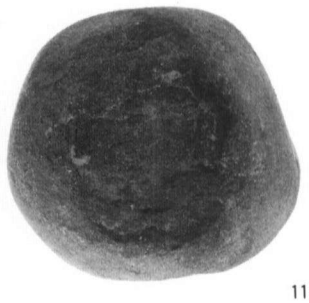
113

（表）



113

（裏）



115

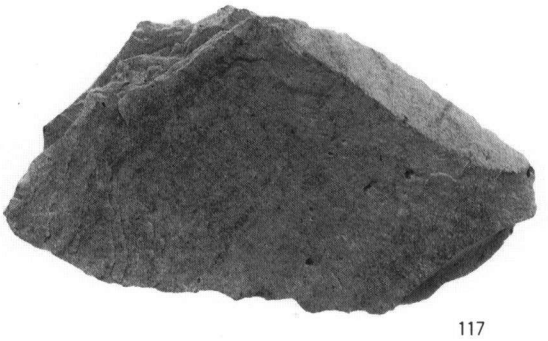
SDj01出土遺物①

112

111

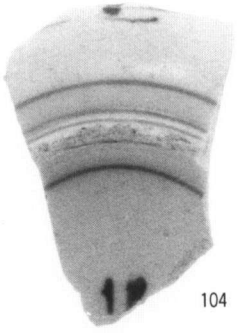
116

117

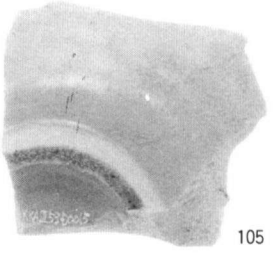


117

SDj01出土遺物②

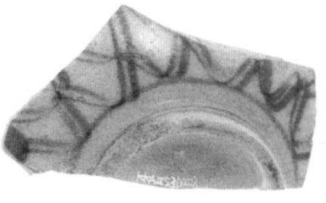


104



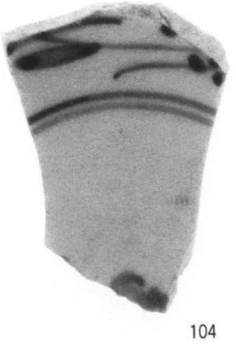
105

107

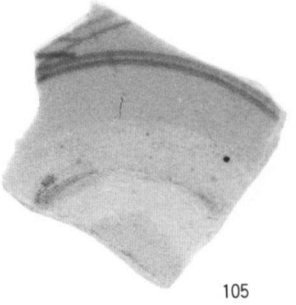


106

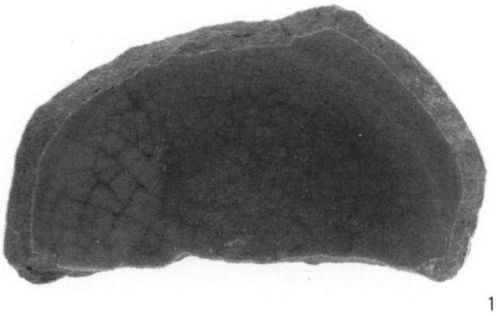
（外面）



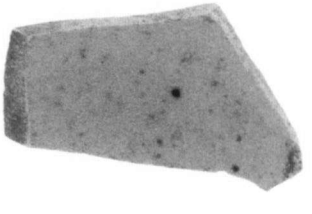
104



105



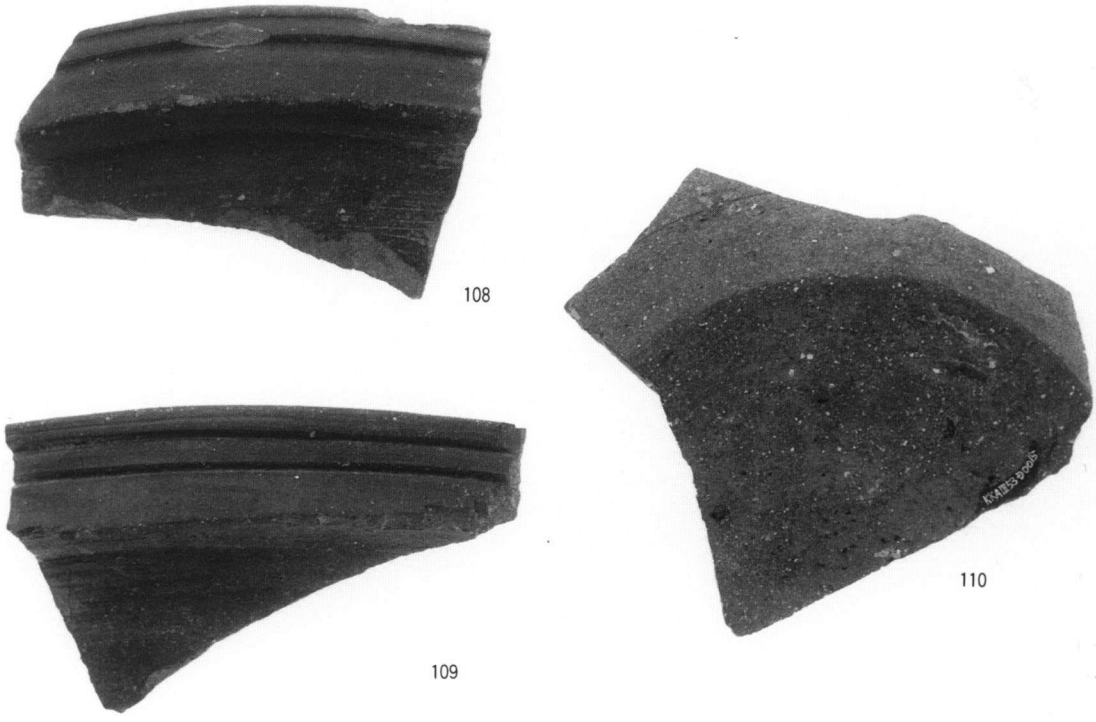
107



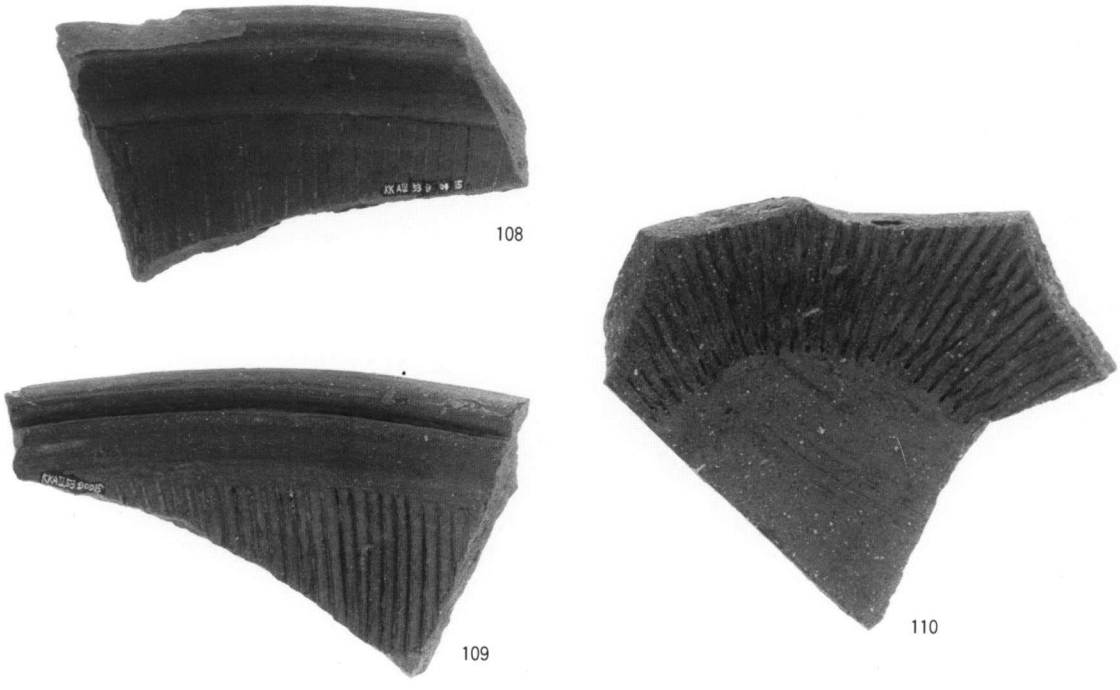
106

（内面）

SDj01出土遺物③

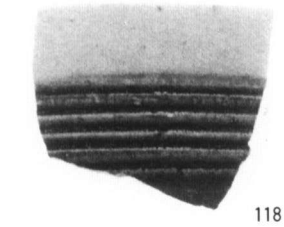


（外面）

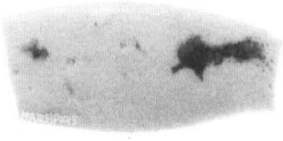


（内面）

SDj01出土遺物④



118

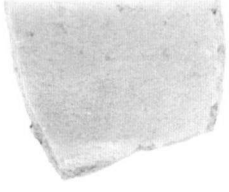


121

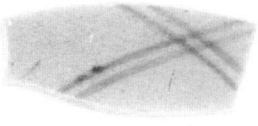
119

120

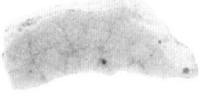
（外面）



118



121



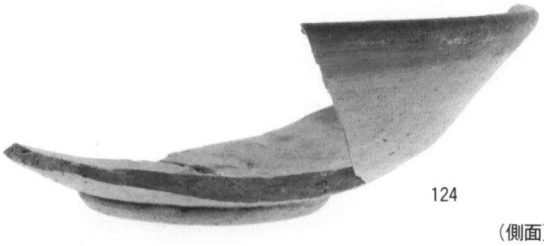
119

120

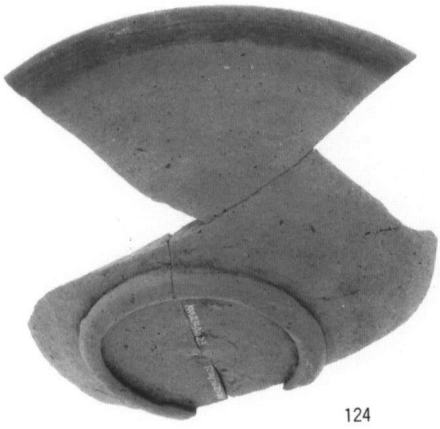
（内面）

柱穴出土遺物①

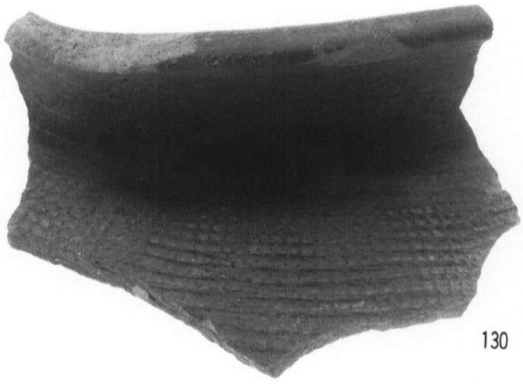
124
（内面）



124
（側面）

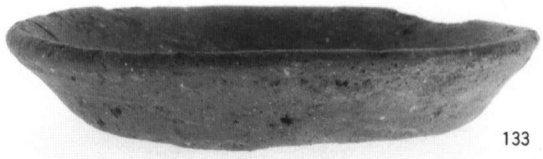


124
（外面）

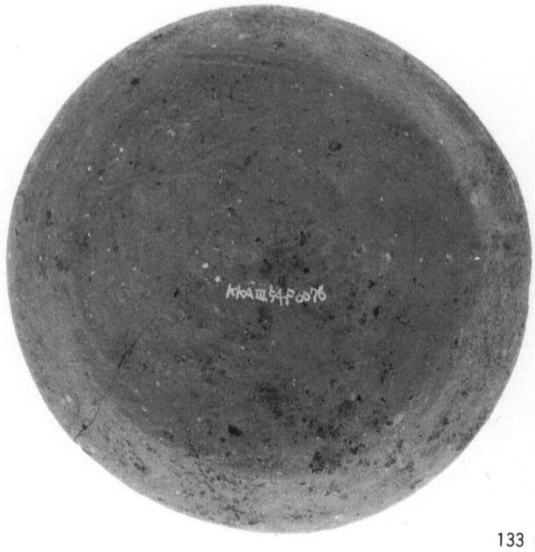


130
（外面）

130
（内面）



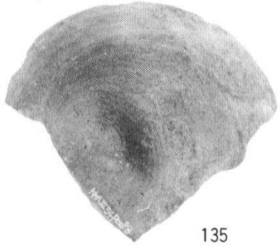
133

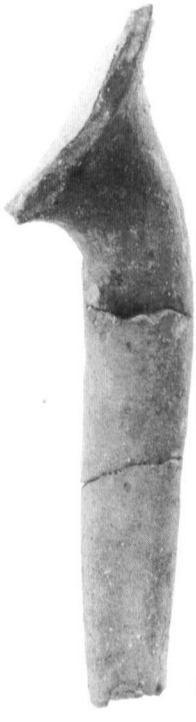


133

柱穴出土遺物②

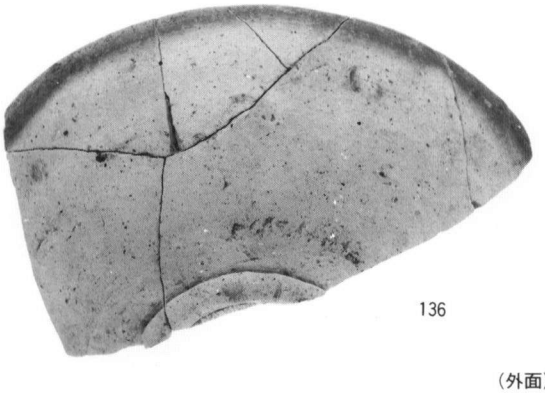
122

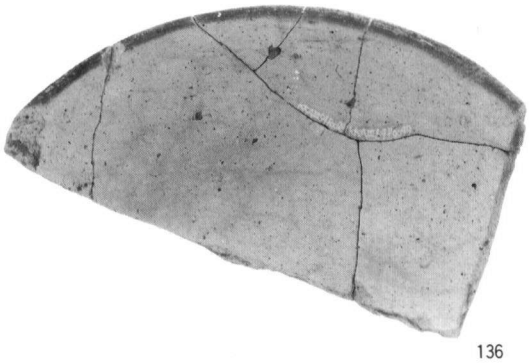

135


137

126

134

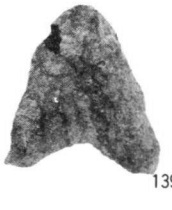

136
（外面）


136
（内面）

柱穴出土遺物③

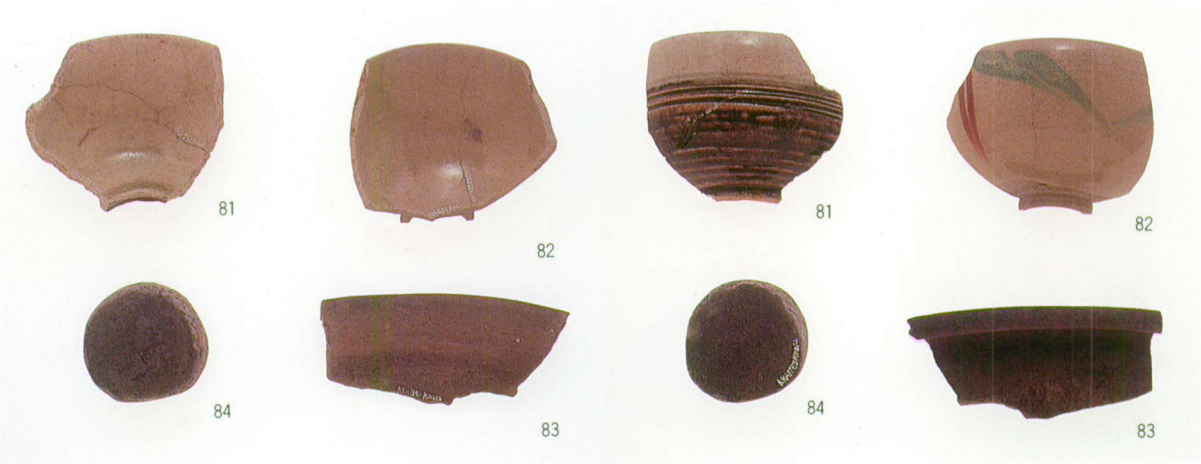
138

138

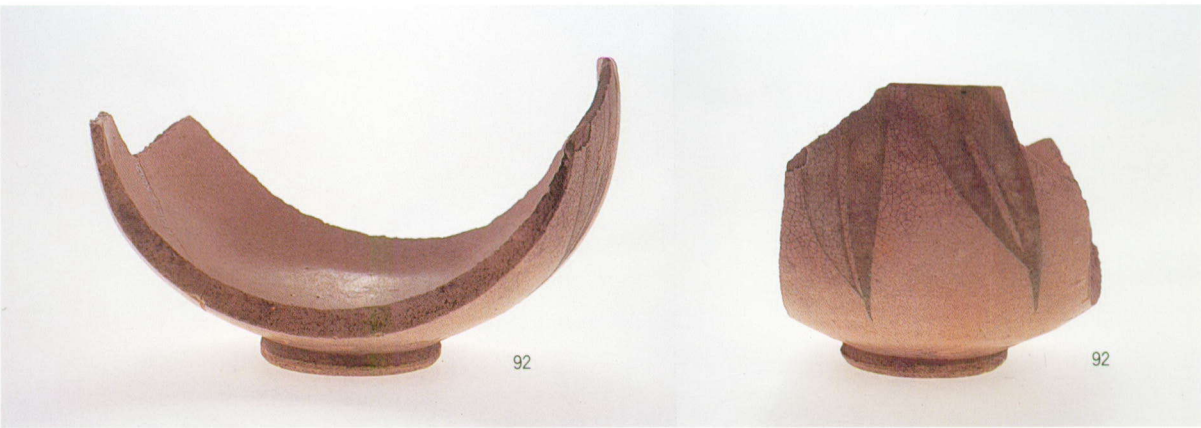

139

139

包含層出土遺物



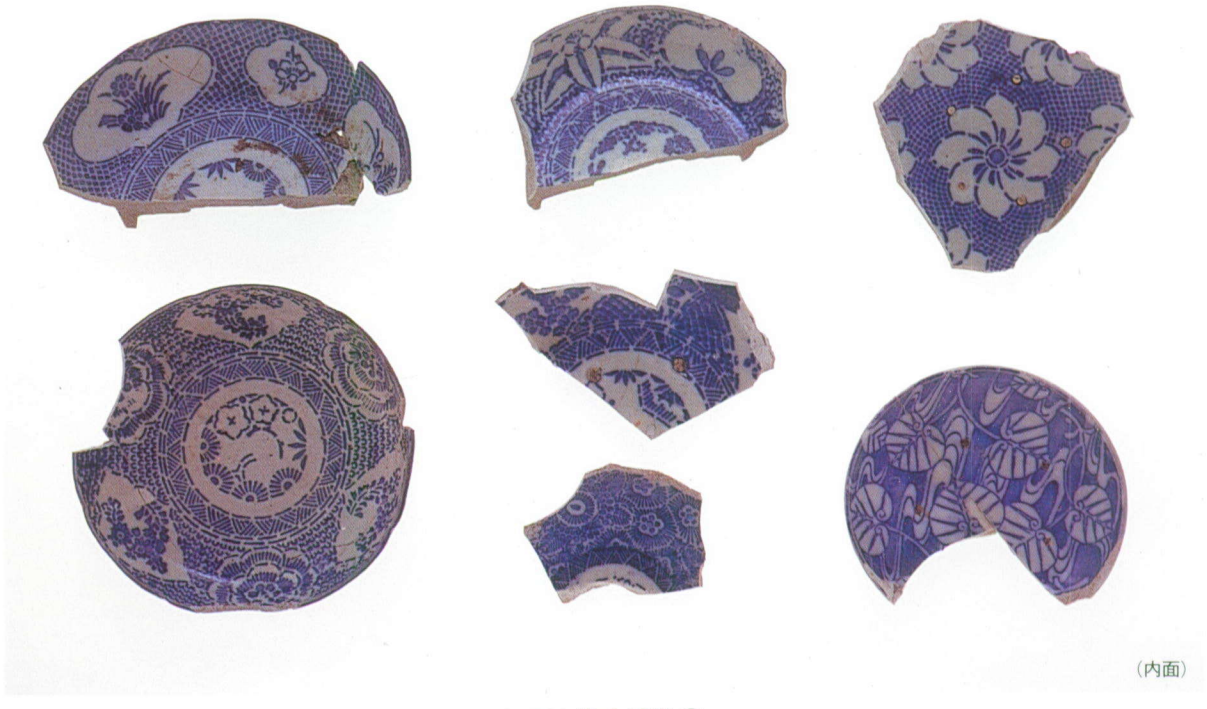
SKj09出土遺物



SKj14出土遺物

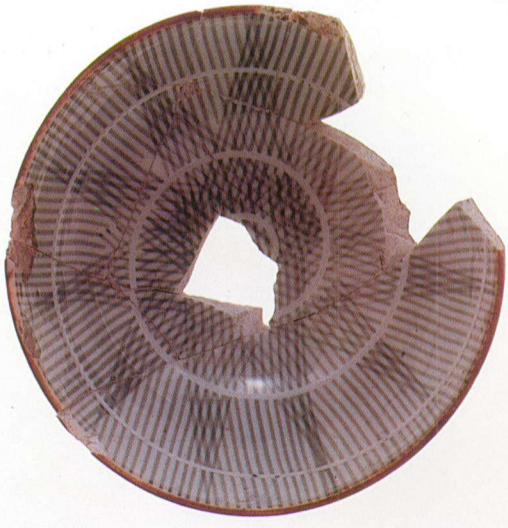
SDj01出土遺物⑤

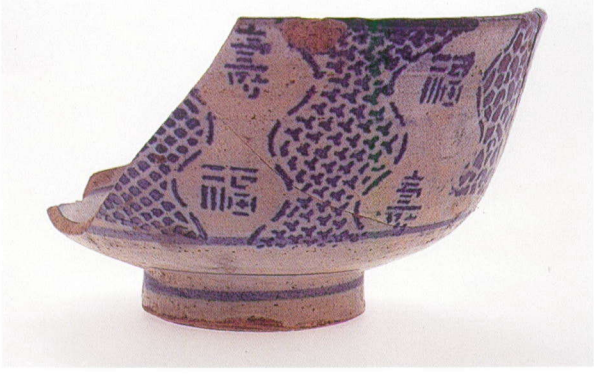
（外面）



（内面）

SDj01 出土遺物⑥





SDj01 出土遺物⑦

報告書抄録

ふりがな	くうこうあとちいせき
書名	空港跡地遺跡（Ｊ地区）
副書名	
巻次	
シリーズ名	四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	
編著者名	片桐孝浩
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒762　香川県坂出市府中町南谷5001-4　TEL 0877-48-2191
発行機関名	香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・建設省中国地方建設局
発行年月日	1997年　3月　31日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
94頁	6頁	46頁	8頁	34頁	115枚	70枚	1枚

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
空港跡地遺跡 （Ｊ地区）	香川県高松市 林町新町2217-14	37201		34° 17' 29"	134° 4' 30"	平成7年 12月1日 ～ 平成8年 3月31日	2,780 m²	四国工業 技術研究 所増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
空港跡地遺跡 （Ｊ地区）	集落跡	古代末 中世 近世	掘立柱建物 溝 掘立柱建物 土坑 掘立柱建物 土坑	土師器、黒色土器 瓦器、土師質土鍋 土師器、瓦器 土師質土釜 土師器、土師質土器 染付、陶胎染付、瓦 銭、茶杓、砥石、硯 煙管、陶器擂鉢	四面庇を主屋に付属の建物1棟あるいは2棟を伴う12世紀後半から13世紀初の集落形態が確認できた。

四国工業技術研究所増築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

空港跡地遺跡
（J 地区）

平成9年3月31日

編集　㈶香川県埋蔵文化財調査センター
発行　香川県教育委員会
　　㈶香川県埋蔵文化財調査センター
　　建設省中国地方建設局
印刷　美巧社

付図　空港跡地遺跡　J地区（Ⅲ－53・54区）遺構平面図